郷土の先達

真 木 和 泉 と 田 中 久 重

伊　藤　　久　編

平　成　２　２　年　１１　月　３　日

は　じ　め　に

真木和泉、田中久重、共に幕末に活躍した郷土の先達である。
かたや剛の勤皇思想家、かたや一民間人で今日の「東芝」の礎を築いた技術者、二人にはこれと言った共通点はないようにも見える。しかし、二人が生きた幕末から維新にかけては日本開明の真っ只中で、ともに自分の信じた道を邁進、後世に見事な遺産を残した。真木和泉は死してのち「王政復古」を成し遂げたし、久重は「人のために奉仕する」姿勢そのものが今日に受け継がれ、生き続けている。

生まれは真木が瀬の下町、久重が五穀神社近くの通町、同じ久留米藩の出身である。調べてみると、二人に直接の接触はなかったようであるが、人生後半に田中久重が世に花を咲かせるキッカケの一つを真木が用意したことが判り、意外であった。

その経緯を辿るうちに、久留米藩の暗い陰鬱な幕末史の一部も見えてきて、同郷人として悲しい思いもしたが、出来るだけ明るい面を見ながら、二人の事蹟を追ってみることとした。

真木和泉の生い立ち

文化１０年（１８１３）３月７日、筑後国久留米城下瀬下町にある水天宮神官真木左門旋臣（としおみ）の家では待望の男の子が呱々の声をあげた。真木家ではすでに長女駒子・次女成子をもうけていたが、家職をつぐべき長男を挙げるに至らぬため、性豪放の左門も遺憾としていたが、三度目にして宿望を達成した。後の真木和泉の誕生である。

この年、光格天皇の在位３５年目、第十一代将軍家斉の就任後２７年目であり、久留米では第九代藩主有馬頼徳の治世 2 年目であった。同じ年 5 月には前年ロシア軍艦に拉致された高田屋嘉兵衛が送還されており、７月になると寛政三奇人（林子平・高山彦九郎と合わせ）のひとり蒲生君平が没し、遠くヨーロッパではナポレオンがライプチッヒの戦いで決定的な敗北を喫するという事件が起こっている。

しかし、時まさに文化・文政の爛熟期を迎えんとするころ、明治維新に先立つこと５５年前で、新時代への胎動がまだ現実にそれほど感じられぬ時代であった。

したがって後年の幕末維新の志士たちの多くがまだこの世に生まれ出ていなかった。真木を中心に数えれば、横井小楠４歳、佐久間象山が２歳年上であることを除けば、以下の人はすべて年下で、西郷隆盛１４年、平野国臣１５年、吉田松陰・大久保利通は１７年、木戸孝允２３年、高杉晋作にいたっては２６年も年下である。なお、本稿のもう一人の主役である田中久重は和泉より１４歳年上であった。

幼名湊、やや長じて久寿・鶴臣といい、のち保臣、字は興公・定民と称し、紫灘と号したが、一般には真木和泉という場合が多い。天保 3 年２０歳の時上京し、神祇官領吉田家より大宮司の状を受ける際、父左門の神道裁許状に記された真木和泉平旋臣の通称和泉を襲って従五位下和泉守の官位を受けたことにもとづいている。

「真木家略系譜」によるとその始祖は大和国石上神社神官某の娘伊勢に発するという。伊勢は平知盛および清盛の妻時子に仕え、建礼門院の入内とともに宮中に入り、按察局と称した。壇の浦における平氏滅亡の際、遺命により安徳天皇以下一門の跡を弔うべく筑後の国に流れ来たり、筑後川のほとり鷺野原の地すなわち現在の所に住みついたという。ところが、知盛の子に従四位少将知時なるものあり、壇の浦より肥後五家庄に逃れたが、その四男右忠はある日伊勢を訪ねて筑後の地に来り、ついにその養子となって平氏の血統を伝えることになったという。伊勢が鷺野原に平氏一門を祀ったのは文治・建久期であったが、これがすなわち水天宮の創始であるといわれる。

江戸時代に入り、右忠十六代の孫忠左衛門重臣は慶安３年（１６５０）久留米第二代藩主有馬忠頼に水天宮社殿の改築を願い出て、忠頼の意志により今日の瀬下町の地に壮大な社殿を築かせ、社地として三潴郡京隈村（現久留米市京町）のなかに七畝二十八歩を与え、物成免とした。

この忠左衛門重臣は肥後真木村（現熊本県菊池郡大津町真木）の出身で先代竜臣の養子となったが、出身地の名をとってこれより真木姓を称するに至ったといわれる。以後、十七代平次・十八代忠左衛門是臣・十九代右門三臣・二十代右門重臣とつづき、和泉の父左門旋臣に至っている。

和泉は両親から五尺八寸の身長、しばしば力士に間違われたところの肥満した体躯、角ばった赤銅色の顔、広く秀でたひたい、跳ね上がった薄い眉、威力のある目、大きな耳と口、太く短い首、そしてやや猫背の容姿を受け継ぎ、加えるに討幕唱始者として久留米一藩を驚倒させ、天下の耳目を聳動させたあの激しい気性を受け継いだのである。

ところが幼年時代の和泉は、長男の故か起居動作に老成人の風あり、同年輩の子供らと遊び戯れることがなく、豪放闊達とうよりむしろ小心翼々たるものがあったといわれる。ある日、父左門は子供らの胆をねるためにと三人の男児を久留米城外の三潴郡二つ橋の刑場に連れて行き、囚人処刑の様を見せた。この時、亘・登の二弟は斬首の行われるさまを正視したが、和泉は終止うつむいて正視し得なかったといわれる。

しかし読書にはよくはげみ、母柳子の言うところでは読み書きせよと命じられることなく、むしろ勉学に過ぎて病気にかかるのを心配したほどであったとされている。このころから楠正成の伝記に親しんでいたという。長じて楠公崇拝は勤皇思想と結びつき、その威力は周りの人々を巻き込んでいくことになる。

文政６年（１８２３）６月和泉１１歳のとき父左門は風土病“七日病み”にかかり、同月２０日急死した。前年冬左門は１０歳の和泉に対し水天宮神符調成にあたっての伝来の秘法ー寒明けの節分前の７日間潔斎を行い、深夜丑の刻（午前二時）筑後川の流れに入って神水祈祷を行う法を授けたが、虫の知らせでもあったろうか、まだ３４歳の若さであった。真木家累代の墓は久留米城下町寺町千栄寺にあり、これまで仏式によって葬儀を行ってきた。関係者がこのたびもそのように執り行おうとしたところ和泉はあえて神葬を行うことを提言し、亡父に対し数珠に代わるに烏帽子・直衣を着せ、諡るに旋臣天神の号をもってした。このことは十余歳の少年の魂に既にある一つの志向が生まれてきたことを物語るものである。

父の死後和泉は名を久寿と改め、和泉正と称することになった。同年８月１２日家督相続、第二十二代水天宮神官となり、翌文政７年２月１５日久留米城に登り、藩主有馬頼徳に謁見した。亡父左門が家事に疎かったため、当時の真木家は窮乏ひどく晴れ着の新調ができず、父の古着を仕立て直し、ほころびをつくろって藩主の前に出たほどであったが、和泉はかえって母を慰めたという。

また、この年６月９日、京都吉田家より神道裁許状を得、名を鶴臣と改めた。

成人後

手短に彼の容貌、特徴を述べると、次のようになる。

「容貌魁偉（かいい）、意気は人を圧した。国典・漢籍に通じ、また武技にすぐれ、詩歌音楽まで学び、特に和歌に優れた。つとに皇室の衰微をなげき、楠公に私淑し、例年楠公祭を行って、その孤忠をしのんだ」

水戸の会沢正志斎の「新論」を読んで感嘆し、引化元年（天保１５年、１８４４）、３２歳のとき、江戸に出て後期水戸学の大成者会沢正志斎本人に面会、その門下に入った。また安井息軒、塩谷宕陰、橘守部らと往来した。しかし、その２年前の天保１３年（１８４２）中国（清国）がアヘン戦争で英国に敗れ、五つの港を開いたとの報に９月に接すると数日にして急ぎ帰国した。

彼に影響を与えたこのころの尊王思想の形成過程を整理すると次の通りである。

> 儒学の中にある尊王思想は、天皇を尊ぶ考え方である。当初、水戸学などで主張されていた。水戸学は、水戸藩が行なっていた『大日本史』の編纂事業から出てきた学派で、その前期は朱子学の大義名分論に基づく尊王論を展開していた。
>
> １７５８年、竹内式部が、京都で公家に神書・儒書を講じるなどしたため、京都所司代に告発されて追放となった。宝暦事件である。この時、式部から教

えを受けた公家らも謹慎となった。さらに、１７６７年、宝暦事件で刑を逃れた藤井右門が、山県大弐と甲府・江戸城攻撃の軍略を述べたことから、両人が死刑となり、直接関係のない竹内式部も流罪となった。明和事件である。

ただ、この頃の尊王論は幕府を否定するものではなく、朝廷を尊ぶことで幕府の権威を守ろうとするものが多かった。頼山陽は『日本外史』で、源平から徳川氏に至る武家の盛衰を記し、尊王論を説いた。また、高山彦九郎は、京都の三条大橋から皇居を拝する奇行で、尊王論を実践して諸国を遊説した。蒲生君平は、歴代天皇の陵墓の荒廃を嘆き、各地を調査して『山陵志』を著わした。先述の通り高山彦九郎、蒲生君平に林子平を加えて、寛政の三奇人という。

復古主義の立場から尊王論を唱えた国学者も、将軍は天皇から委任されて政治を行なっているという考え方をしていた。そのため、幕府を批判したものではなかった。しかし、平田篤胤の復古神道は、尊王攘夷運動や王政復古に大きな影響を与えることになった。また、水戸学の後期は、徳川斉昭（なりあき）を中心に天皇を尊び、覇者を排斥する尊王斥覇（せきは）から攘夷論を展開し、明治維新に影響を与えることになる。

９月久留米に帰り、木村三郎、村上守太郎らと水戸学（天保学）の影響下にある天保学連の中心となり弘化３(１８４６)年３月藩主有馬頼永に藩政改革意見を上書した。

弘化４(１８４７)年９月孝明天皇の即位式拝観のため上洛し、三条実万、東坊城聡長、野宮定功ら公卿、小林良典ら堂上諸大夫の知遇、面識を得た。このときすでに和泉は三条・野宮両卿に「王政復古」の策を陳上している。また長州藩主毛利敬親にも会って、その志を告げている。これより以後、もっぱら尊王攘夷の志を貫き、政権の皇室統一と国威の宣揚を天下に叫んで、勤王の大義を唱えることになる。

嘉永５(１８５２)年２月、久留米では稲次因幡、木村三郎、水野丹後らとともに執政有馬監物らを排斥しようとする藩政の改革を企てるが失敗し、関係者一同捕縛される。「嘉永の獄」と呼ばれるもので５月和泉は「三里構い」となって神職を剥奪され、弟のいる下妻郡水田天満宮（現筑後市）に送られた。実弟は天満宮祠官の大鳥居啓太でその家に幽閉された。のち邸隅に一小屋を構え、「山梔窩（クチナシの家）」と称し蟄居し、ひたすら読書に従い、付近の少年子弟を教育し、１１年におよぶ幽閉中、開国の進展に応じて諸国の尊攘志士と交流し公家に建策、文久元(１８６１)年、「義挙三策」を著し改めて王政復古を説いた。

水田に移った真木のもとには近隣より多くの若者が教えを請い集まり、その中からは原道太など多くの勤皇志士が育っていった。また、彼の思想は多くの志士たちに知られており、面会を求めるものも少なくなかった。その中には福岡の平野国臣の名も見られるが、

その他には、出羽の清川八郎・豊後の小河弥右衛門・肥後の松村深蔵・轟武兵衛・薩摩の有馬新七・橋口壮助・柴山愛次郎などの志士が密かに訪ね来て国事を談じた。

また、他の一人幼名敏功、成人しての名、「荘山」は真木和泉と田中久重を結び付ける数少ない人物の一人であるが、彼は「荘山舎人勤皇事蹟」を残している。それによると、荘山は“からくり儀右衛門”こと田中久重の甥にあたり、天保１１年（１８４０）水田村に生まれ、理兵衛および和泉について国学・漢学を修め、下記する和泉の脱藩から鹿児島への脱出に際しては水田に残留、藩吏に捕らえられたが、文久３年（１８６３）上京して三条実美の守衛兵となる。八・一八政変後帰国し因禁され、慶応３年（１８６７）１１月まで在獄、維新後戸長・村長・郡会議員などを歴任し、明治４０年６８歳をもって没した人で、田中久重より真木和泉に師事し一生を終えた人といえる。

文久元年(１８６１)年、和泉は平野国臣、田中河内介、清河八郎らの薦めにより、翌文久２(１８６２)年２月、二男菊四郎、門人２名をともない白昼堂々と、寓居山梔窩（クチナシの家）を脱出、脱藩して鹿児島に走り、島津久光の上京に加わろうとする。しかし、これを嫌う薩摩藩によって薩摩での拘留一ヶ月あまりに及ぶ。４月、上京し大坂で田中河内介らと倒幕の兵を挙げようとしたが、伏見寺田屋の変で挫折、捕らえられて７月久留米に護送幽閉された。

文久３(１８６３)年２月朝廷の沙汰により赦免され、瀬下の水天宮の自宅に帰ったが、水田幽因以来１２年目の帰宅であった。４月藩是を尊攘一途とすべきことを藩主慶頼（頼咸）に建言、親兵頭取となったが、４月１３日、保守佐幕派の反撃で藩論急変し、「和泉捕り」により、同志２８人ことごとく三度目の幽因となり、その生命さえ危うくなった。この急変は、京都ならびに長州にも急報され、５月１７日、公卿中山忠光、長州藩関係者の奔走で釈放され、同志２８人は朝廷の親兵隊として京都へ向うことになった。途中、長州では毛利敬親父子に謁見して同藩の同志と時局を論じ、攘夷親征、討幕を説き、6月上京し三条実美の信任を得て学習院御用掛となった。

当時、薩摩藩は姉小路卿暗殺の責任を問われ、御所の警備を解かれ、長州毛利公父子が政局の主導権を握っていた。久留米藩の志士は、長州藩と親しく結んでいて、上京活動していた久留米藩士は約２００名、その指導は無論、和泉であった。

そして、長州藩を足がかりに攘夷親征、大和行幸計画を名目とする討幕を目指すが、文久３年８月１８日、会津藩と薩摩が結託して長州藩を追放した政変で挫折（八月十八日政変）、長州藩の御所警備は解かれて、薩摩・会津がこれに代わり、三条実美ら七卿は長州に落ちた。和泉も七卿に従い、日夜その対策に参加した。和泉はしばしば建言して武力をもって上京し、君側の奸を除き、８月１８日以前に返すべきことを力説した。それを著したのが１０月に著した「出師三策」で軍事力による朝廷奪回を主張している。

ついに、長州藩主は国老福原越後、国司信濃をして兵を率いて上京させ、哀訴すること

にした。和泉は浜忠太夫または甲斐真翁と変名し、各藩浪士で組織した清側義軍３００名を久坂玄瑞とともに総管して、ともに上京した。

元治元年（１８６４）６月２４日、清側義軍は山崎に到着し、天王山に陣営を構え、久坂玄瑞・中村円太などと連署して七卿復帰・長州公の入朝・攘夷の発令の哀願書を閣老稲葉美濃守に託したが上に通じなかった。元治元年７月の禁門の変では久坂玄瑞、来島又兵衛らとともに浪士隊清側義軍の総管として長州軍に参加、７月１９日、堺町御門を目指して進軍したが、福井藩兵などに阻まれて敗北。天王山に退却、長州へ敗走することを拒否して和泉は２１日、天王山において、挙兵の責を痛感して自刃した。このとき、弟直人・息子菊四郎はともに死を願ったが、和泉はこれを止め、後日の再挙に託して、ここを去らせた。そして同志１７人とともに、「大山の峰の岩根に埋めにけりわが年月の大和魂」の辞世を遺し、割腹した。時に５２歳であった。

和泉以下１７人の屍は宝寺塔前に埋められたが、その墓はいつしか「残念さん」と言われて参詣するものが後を絶たなくなった。幕府はこれを忌んで、衆人の登山を禁じ、その屍を宝寺山下の竹林に転埋した。明治元年９月、和泉の嗣子の佐忠が久留米藩の命により、１７士の遺骨を竹林の中から収集して、割腹の地に改葬した。

真木和泉の暦年事蹟と田中久重関連

（青字は田中久重関係、赤字で示した項目ごとに本文を記す）

寛政１１（１７９９）　田中久重久留米通町櫛原（五穀神社近く）べっこう細工師の家に生まれる。井上伝の家近く。彼女の方が１１才年上。

文化５（１８０８）８月　フェートン号事件。イギリス軍艦、長崎港へ虚偽侵入。

文化１０年（１８１３）３月７日、筑後国久留米城下瀬下町にある水天宮神官真木左門の長男として和泉誕生

天保５（１８３４）　久重、大坂上町に移り住む（京都を含め上方には２０年在住）。無尽灯の製作開始。

天保８（１８３７）

２月１９日、　大塩平八郎の乱。この時、大坂の久重の自宅類焼。伏見へ移る

天保１３（１８４２）　久重、戸田東三郎に天文学を学ぶ。４３才から７年間

天保１３（１８４２）　清国、イギリスとのアヘン戦争で敗北、清国は五港を開かされる。

引化１（１８４４）

４月１４日、和泉、水戸学遊学に出発（一）。３２歳。９月２３日久留米帰着。

６月　有馬頼永、久留米藩十代藩主に就任

７月　オランダ軍艦が長崎に入港、アメリカのペリー来航を予告

引化３（１８４６）

３月、和泉、久留米藩主頼永に藩政改革意見上書。この頃天保学連は外連と内連に分裂

７月３日、藩主頼永没（２５歳）１０月に頼咸藩主襲封、１２月将軍家慶女精姫と婚儀

９月、　朝廷は幕府に対し、海岸防備を要望しかつ海外情勢についての報告も要請した。

弘化４（１８４７）和泉、孝明天皇即位式のため、上洛（二）

嘉永３（１８５０）広瀬元恭の「時習堂」で物理・化学のほか開国論など学ぶ。広瀬３０才、久重５２才。この時、広瀬門人佐野常民・中村奇輔に出会う。

６月３０日、久留米江戸藩邸にて村上が参政馬渕に刀傷、その場で惨殺さる。

嘉永５（１８５２）

２月２７日、和泉は稲次因幡・木村三郎らと藩執行部の人事刷新による藩政改革を企て失敗“嘉永の大獄”（三）となる。筑後水田に幽因となる。１８６２年まで約１１年間をここで過ごす。

久重蒸気船雛形を作る。鷹司関白は、久重に「日本一細工師」を授ける。

１１月、佐賀藩は精煉方を高岸村に設置。佐野常民の推挙により久重同精煉方に入り（単身赴任）、慶応２年ごろまで銃砲製造、造船などに関与する。

嘉永６（１８５３）

６月３日、ペリー浦賀来航（四）。７月１８日、ロシア使節プチャーチン長崎来航

８月１５日、幕府、大砲５０門の鋳造を佐賀藩に注文する。品川お台場用。

９月１５日、幕府大船製造解禁

安政１（１８５４）

１月１６日、ペリー再来航。３月３日、日米和親条約締結

４月、　田中久重一家、佐賀へ転居（京都から佐賀へ）（五）

安政２（１８５５）６月、幕府はオランダよりスームビング号（観光丸）贈与受け、長崎海軍伝習所開設、その練習船とする。

８月、久重、佐賀藩精煉方にて蒸気船と蒸気機関車の模型を制作展示

安政４（１８５７）、アームストロング６ポンド元込砲製造

安政５（１８５８）、日米通商条約締結。安政の大獄

安政７（１８６０）、３月３日、井伊大老暗殺さる（桜田門外の変）

万延１（１８６０）

９月２６日、平野国臣来訪あり（和泉、くちなし庵に塾居中）

文久１（１８６１）

長崎造船所（当時は“製鉄所”）落成

１２月１２日、和泉、「義挙三策」を草して討幕の具体策を述べる

久重、佐賀藩にて「凌風丸」建造に関わる（竣工は１８６５）（六）

文久２（１８６２）

２月１６日、和泉、水田を脱出、鹿児島へ向う（脱藩から寺田屋の変まで（七））

３月５日、和泉、西郷隆盛との面会を乞うも果たせず

４月２３日、伏見寺田屋に至る。和泉「寺田屋の変」により京都薩摩藩邸に拘置さる。後、久留米藩へ移送さる。

６月１３日、真木和泉、田中久重を国老有馬河内（監物）に推挙し、７月４日、藩主頼咸にも推挙する。

８月２１日、生麦事件（八）

１１月２１日、朝廷、藩主頼咸に対し和泉以下の赦免を沙汰。

文久３（１８６３）

２月４日、和泉ら解因

３月１８日、天皇の親兵創設が布告さる。

４月５日、藩主頼咸に面会して藩の方針を尊攘に一決すべきを切言。前の「嘉永大獄」以来幽因中の水野丹後・木村三郎を赦免して藩要路へ登用を建言。

４月１３日、“和泉捕り”となり真木は再び拘禁される。

５月１０日　長州藩、攘夷期限が来たとして、軍艦２隻で田ノ浦に停泊中のアメリカ商船ペムブローグを砲撃する。

５月１７日、朝廷（公卿中山忠光）と長州・津和野藩の尽力で和泉一族・門人とともに解因され、その多くは「天皇親兵」として上京することとなる。

５月２３日、長州藩砲台、フランス軍艦キンシャンを砲撃

５月２６日、和泉一行、馬関において長州藩のオランダ船砲撃を見る。毛利敬親父子に謁見して攘夷親政、討幕を説く。

６月１日、長州藩、アメリカ軍艦ワイオミングと交戦し敗北する

６月５日、フランス東洋艦隊、長州藩砲台を攻撃し、陸戦隊を上陸させ前田・壇の浦両砲台を占領。

６月、和泉、上京し学習院御用掛となる。

７月、　薩英戦争（イギリス艦隊が生麦事件の賠償を要求し鹿児島に来襲）

８月１８日、「八・一八政変」（九）となり、大和行幸中止、三条実美らとともに和泉も長州へ下る。

１０月、「出師三策」を著して軍事力による朝廷奪還を主張。

元治１（１８６４）

１月　　久留米藩汽船雄飛丸を購入

田中久重、久留米へ帰る。（十）

６月５日、池田屋事件（新撰組、尊攘派志士を襲う）。

７月１１日、佐久間象山暗殺さる（５４歳）

７月１９日、幕府、在京諸藩に長州藩追討を令し、禁門の変（十一）。和泉・福原・来島軍ともに敗れ、和泉、天王山にしりぞく。

７月２０日、平野国臣（３７歳）ら京都六角の獄中で斬られる

７月２１日、和泉、同志２１名とともに自刃

８月２日、第一次長州征伐発令

８月５日、四国（イギリス・フランス・アメリカ・オランダ）下関攻撃

９月１２日、久重の婿養子岩吉と孫の岩次郎、長崎で殺害さる。

慶応１（１８６５）

３月２２日、薩摩藩士１９人がイギリス留学のため、長崎を出発。
神戸練習所閉鎖、勝海舟の薩摩への依頼で坂本一団は長崎で世話を受く。
亀山社中を興す。

５月２４日、坂本龍馬、大宰府の三条実美を訪問し、薩長同盟案を示す。

慶応２（１８６６）

１月２２日、薩長同盟成立

１月２４日、坂本龍馬と三吉慎蔵、寺田屋で伏見奉行所の捕方に襲撃され負傷
久留米藩の大砲完成、鑓水古飯田から飛岳への試射成功。

６月７日、第二次長州征伐の戦闘開始

８月２５日、開成方今井栄に随行し久重上海に密航、９月２１日に長崎に帰着

慶応３（１８６７）

４月　　亀山社中は土佐藩海援隊へ発展的解消

６月　　坂本竜馬「船中八策」を記す

６月２２日、薩土同盟なる

１０月８日、久重、今井栄他と公使パークスの通訳アーネスト・サトウと会見。

１０月１５日、大政奉還

１１月１５日、坂本龍馬、中岡慎太郎が近江屋（醤油屋）で襲われ絶命。

１２月９日、王政復古の大号令（大久保利通、岩倉の策略成功）

慶応４（１８６８）明治元年

１月３日、鳥羽・伏見の戦い。鳥羽、伏見で旧幕府軍と新政府軍が交戦。
旧幕府軍が敗退

１月２６日、不破美作（参政）勤皇党若輩に暗殺さる。

３月７日、久留米藩に京都新政府から関東出兵の命下る。

３月２６日、大阪湾にて、明治天皇の艦閲式に佐賀藩電流丸（久重親子がボイラー製作に関わった）が旗艦となり、久留米藩千歳丸など６隻が参加。

４月１０日、久留米藩家老、有馬監物憤死。

５月１５日、久留米兵、旧幕府方の彰義隊と上野で戦争。

明治２（１８６９）１月、版籍奉還実施（十二）

１月２９日、今井栄切腹を命ぜらる。これが久重の久留米離反の遠因となる。

明治４（１８７１）

７月１４日、廃藩置県、両替町（今の市庁）に三潴県庁を置く。

明治６（１８７３）

１月１４日、佐野常民の推薦で田中久重上京。（十三）。

西郷隆盛、征韓の意見書を提出

明治天皇、朝鮮遣使を却下する。西郷隆盛、辞任し鹿児島へ帰郷する

明治７（１８７４）　佐賀の乱。佐賀で不平士族が挙兵

芝西久保神谷町に久重の新工場、モールス通信機製造に成功。

明治８（１８７５）　銀座煉瓦街の店舗に移る。田中製造所開業（十四）。

明治９（１８７６）　秋月の乱。宮崎車之助ら、秋月で挙兵

明治１０（１８７７）　西南戦争勃発。西郷隆盛、一万五千の兵を率いて北上

明治１１（１８７８）　内務卿・大久保利通、東京紀尾井坂で暗殺される

田中工場全部買い上げらる。逓信省電信灯台用品製造所の起源

明治１４（１８８１）　田中久重死去。８４歳

明治２６（１８９３）　芝浦製作所、田中製作所の事業を継承。

昭和１４（１９３９）　芝浦製作所と東京電気が合併し東京芝浦電気（東芝）となる。

一．和泉と水戸学

吉田松陰と並んで真木和泉の名は幕末志士の中でも傑出した位置を占めている。その歴史的意義を一言で述べるならば、徳川将軍家を頂点とする支配秩序維持のための最大のよりどころを尊皇攘夷に求めるというそれまでの維新運動の指導理念の論理的停滞乃至不徹底を打ち破って現体制打破のエネルギーを果敢にもえたたせ、討幕への道をきりひらいたことにある。

水戸学そのものが、「幕藩体制が絶対唯一のものである」とはせず、天皇をその上に戴く「委任された統治体制」という二重構造の自己矛盾を含みながらスタートしており、そのレールの上を走り続けることは、結局は破局に向うことを和泉は身をもって示したことである。

いいかえるならば、天保学（水戸学）の影響下に自らの思想を形づくりながら、和泉が水戸藩ないし水戸学のもつ“御三家”なるが故の宿命的矛盾に突き当たり、その壁を大きく乗り越えて明治維新への展望に立ったことを意味する。３２歳で初めて水戸に「新論」（下記注参照）の著者会沢正志斎を尋ね従学、“天保学三尊”の一人として久留米藩に水戸学を将来・振起するため努力した和泉であるが、その水戸学ないし水戸学派の人々とは幕末維新史の渦の中で袂を分かっていく姿を見出すことになる。

（注）

水戸藩は創設以来尊王の強い所で光圀の奥方、斉昭の奥方も天皇に近い縁戚関係にある。従って幕府と天皇家、どちらを取るかの選択の場合、心情的に天皇家を取る家風でもあった。

具体的に尊王攘夷が始まるのは平潟の浜にイギリスの捕鯨船の船員が上陸した事に始まる（１８２４年５月２８日、北茨城平潟の浜）。水戸藩の会沢正志斎がオランダ語を使って尋問したが言葉が通じず幕府の通事(英語)を呼びやっと彼等の上陸の目的が分かり問題は解決した(内容は水と野菜の供給であった)。しかしこの事を会沢正志斎は「新論」として論文を書き時の八代城主斉脩に提出した。これは当時の中国の情勢や、アジアに於ける西欧諸国の植民地政策に至る内容と日本の置かれている立場を含めた当時としては余りにも斬新な論文で水戸藩はこれを門外不出とし、公になる迄実に３０年の月日が必要であった。

然しこの論文は密かに広がり尊王攘夷運動のバイブル的存在となり、あの有名な吉田松陰も読み会沢正志斎を５度も尋ねている。彼に当時、国と言えば藩を意味していたがそれを日本国の存在を知らしめたと言わせる程の論文であった。

斉昭の藩主時代、会沢正志斎の他、藤田東湖、戸田忠敞、武田正生(耕雲斉)が中

枢として活躍していたが斉昭が仏教弾圧、弘道館から軍事訓練等の問題で幕府の詰問を受け蟄居、藩主隠居を命じられ長く続いた改革派政権も終わり門閥派政権が誕生する。この時斉昭を救済すべく水戸の士民は雪冤運動を起こし水戸から江戸に大量のデモンストレーションが行われた。都合５回有り、最大時４０００人からの人達が江戸に行き幕府その他各所に実力行使を行っている。その後斉昭、及び重役達も解放され其々の要職に付いて行った。藤田東湖、戸田忠敞等は時の尊皇攘夷の中心的人物で西郷隆盛等も良く水戸藩邸に出這入りしていた事も明らかである。改革派政権が誕生した時斉昭は門閥派の中心人物、結城寅寿一族を投獄しているが安政の大地震の時改革派の中心人物藤田東湖と戸田忠敞が圧死し門閥派の中心人物結城寅寿の政権復活を恐れた改革派の一部から水戸牢内に於いて斬殺されている。

ここに水戸藩は改革派の藤田東湖、戸田忠敞、門閥派の結城寅寿を失って藩自体の方向性迄失ってしまった。斉昭は隠居、十代藩主は未だ若く難しい局面を統制出来る状態ではなかった。

そもそも水戸学とは、その成立過程はすでに「真木和泉の生い立ち」のところで述べたが、それが全国に流布していく経過は次に通りである。

会沢正志斎の「新論」が次第に人々の間に広まり、各地から反響が起こる。初めは「無名氏」ということで匿名出版したが、水戸の会沢正志斎の著書であるということが天下に広まる。遂に、会沢先生に会って直接教えを乞いたいという気運が起り、次第に水戸を訪れる人が増えて来た。会沢正志斎の名をもって出版できたのは、初版から３０年後の安政４年になってからである。

水戸藩が諸藩に注目された一番始めは攘夷論ではなかった。最初は民生で、天保の飢饉の時一人の餓死者も出さなかったという事で注目を浴びた。水戸ではどのような政治をやっているのだ。これが諸藩が水戸を注目する一番始めの理由であった。水戸の藩情を更に調べて見ると民生ばかりではない、教育も充実している、検地もやっている、学校も造ろうとしている。攘夷論が展開されている。軍事教練も実施している。大砲も作り軍艦もつくろうとしている。時の学問的最高水準としてまさに「先進の学」であり、これを学ばずしては時代の流れについていけないと考え、諸藩の人々が遊学してくることになった。

いわゆる「水府の風」がこれを後押しした。「水府の風」とは、他国の人の来訪を悦び、接し認めるや歓待優遇し、心胸を吐露して隠す所がないというもてなし術を云う。なお、水戸学は、必ず有用なものは書記し、書きとどめて置くだけではなくそれを分析して検討を加えるという作法を確立していた。この性質により、吉田松陰並びに真木和泉守、西郷隆盛など有能の士が全国各地から訪れている。これにより、天下の事情に通じる事となっ

た。

天保年間以後水戸学が他藩から注目されるようになり、「天保学」・「水府の学」などと呼ばれた。明治以後になって「水戸学」というようになった。「水戸学」は、幕藩体制の揺らぎに応じて、幕末の喧騒に関わりながら、極めてイデオロギッシュな学問となり、明治維新の原動力に成長していくという数奇な足跡を見せている。

吉田松陰の「東北遊日記」が水戸学との交わりを伝えている。それによれば、松陰は、嘉永４年１２月から翌年にかけて東北遊学の途上に水戸を訪れ、特に会沢正志斎から多大な感化を受けている。吉田松陰は水戸から帰り、すぐに手紙に、「身皇国に生まれて皇国の皇国たる所以を知らず、急ぎ帰りて六国史を読む」と書いている。六国史は、天子が一系であって連綿と続いているという国体論と共に、天皇を中心にして外国に対して処した事例を明らかにしていた。松陰は、このことに理論的衝撃を受けたと言われる。その他、水戸に人材が多く輩出していること、宗教政策が徹底していること、教育に見るべきものがあることに注目している。これらの事を水戸から学んで帰り、それを長州藩の政治に採り入れようと努力をし、自らも松下村塾を作って教育に当たる事になる。

真木和泉守の水戸学事情は次の通り。久留米藩の木村士遠という武士が水戸に出向き会沢正志斎の塾に学ぶ。そのときに「新論」を写し持ち帰る。真木は、その「新論」を読み非常に驚き即刻水戸参りを決意する。天保１５年（１８４４）、水戸へ行く。真木は、水戸学に影響を受け、久留米藩に水戸学・天保学を導入し、久留米藩を大いに改革しようとする。その「信長論」という一文には政治理念として、「礼楽刑政が一つに統一され、天下萬民其の所を得べき」、と書かれている。

水戸学に込められている「尊王」思想の提唱者は烈公徳川斉昭であるが、その持つ意味は天保５年（１８３４）１１月１７日老中大久保忠真へ宛てた書簡の中で、徳川斉昭公の次の文章が如実にしめしている。曰く、

> 「世の中に京都の衰候を嘆き、甚だしきに至候ては王室家杯と唱え候類も有之よし。拙者存意は京都之儀上様御始御尊敬被遊候事に候得ば天下一統仰ぎ奉るべきは勿論に候へ共、第一その身分身分に応じ候事にて、士民は其領主を尊敬いたし領主領主は上様を尊敬奉り、上様にては京都を御尊敬被遊候御儀に被為在候を、其身分を忘れ手ごしの仕末有之候では乱民とも可申、以之外可悪事に存候段は毎々家中共へも申諭し置候事」と述べている。（水戸藩史料）

すなわち尊王を以ってわが国最高の道徳であり、君臣関係を律する至上規範として高く掲げながら、誰でもが現実に等しく尊王を行うことを許さず、将軍・大名・藩士・庶民の各階層に応じた尊王の秩序を厳しく要求したのである。

しかし現実に尊王が可能なのは将軍ただ一人であり、それ以外は、大名は将軍へ、藩士は大名へ、庶民は武士階級へそれぞれの順を追って直接の統帥者へ忠節を尽すことが正しい尊王のあり方であり、この秩序を飛び越え大名以下が直接に尊王を行おうとするのは反乱の所行にほかならないと決め付けていることに典型的に表れている。

斉昭にとって皇室の尊厳性をたかくかかげ、尊王の威儀を唱えることと、現実において幕府が天下の大政を握っていることとは決して矛盾しなかった。すなわち尊王＝反幕ではなく、幕府の支配秩序のもとで将軍が先頭に立ち尊王の名分を正すことを考え、それを以って幕府の天下統治に合理的根拠を与えようとしたのである。したがって将軍はおのれにのみ許された直接尊王の執行権を絶対に他の者に譲ってはならなかった。

この斉昭を補佐し水戸学の形成に力あったのが会沢正志斎である。藤田東湖と並んで後期水戸学派（徳川光圀を中心に「大日本史」編集に参加した一団を前期水戸学派といい、斉昭を中心に集まった会沢・藤田らを後期水戸学派という）の代表的思想家であり、「新論」などの著作を通じて尊王攘夷論を高唱し幕末思想界に強い影響を与えた会沢の名は衆人に知られ、つとに著名である。文政年間水戸八代藩主斉脩の継嗣決定にあたり将軍家斉の子清水恒之丞を迎えようとする守旧門閥派に対抗し、会沢は藤田東湖らとともに藩主の弟斉昭の擁立を図って奔走し初志を達成、斉昭が藩政刷新に着手することになると、これを補佐し改革を推進した。

しかし、その後の具体的な事象に対する彼の反応を見ると、御三家水戸藩の忠篤な家臣たる会沢の態度がありありと浮かび上がる。そしてかって会沢がとなえた尊王敬幕の名分としての攘夷が安政大獄以後の中央政局の展開の中で薩長両藩の指導のもと、討幕のための攘夷にすりかえられつつあることと敵対する考えであったようである。数多くの著作の上で儒学の理念と論理にしたがい整然と述べられてきたその国体観・尊王論も、結局は書物の上で現実の秩序と矛盾しないように説かれた封建教学の主張にはほかならなかったのである。攘夷・開国を巡って朝廷・幕府の対立があらわになり、天下の政治の動向に勅錠（天皇の命令）が重大なかかわりを持つようになると会沢は、将軍家の藩屏なる水戸家の家臣として主家の安泰に心を砕く忠篤なる藩士の姿勢に立たざるを得なかったのである。

しかるにこれに反して引化元年（１８４４）初対面以来会沢との間にしばしば書簡を往復、「意気投合し、肝胆合照ら」し、「師友の情溢るるが如きもの」があり、幽居中会沢との会見を夢見るほどであった和泉は、江戸城を攻略し親王を安東大将軍とするというように反徳川体制の意志を大胆にぶっつけ、水戸学派の説いた尊王敬幕的限界を乗り越えて討幕への道の可能性を提唱したのである。

その背景にあったものは朝廷からじきじきに官位を授けられる神官の家に生まれ、天皇の直臣意識を持ったこと、したがって将軍―大名―藩士という封建制の階層秩序感から一応自由であったこと、幼児期に「絵本楠公記」を呼んで朝廷敬慕の志を抱き、和学・国学・

欧学といったわが国伝統の教養・学問を身に付けたこと、などが考えられる。

さらに推論を広めれば、九州、それも久留米周辺には懐良親王に纏わる事蹟が今でもいたるところに残っており、一般人でも天皇崇敬の気持ちが強い地域の一つであったようであり、和泉は神官の家、それも安徳天皇とともに滅亡した平家の落人に縁起をもつ水天宮に生まれたことなども、天皇を唯一絶対とする思想に陥る可能性があったのだと考えられる。

さらに、尊王思想を説く先人の影響も和泉に見られる点である。高山彦九郎や有馬守居主膳などである。両人の経歴は次の通りである。

高山彦九郎

幕末の尊王攘夷論に大きな影響を与えた高山彦九郎は上野国（こうずけ）新田郡細谷村（現群馬県太田市細山町）に延享３年（１７４６）に生まれ、１３歳のときに太平記を読み、楠公崇拝し、後醍醐天皇の南朝が王朝を打ち立てるのが出来なかったことに憤りを感じたと言われる。その後、京に上り、垂加神道の山崎闇斎門学派に傾倒して行き、いろんな学者との交流も持っていた。寛政年（１７９０）に蝦夷地を訪れ、宗谷岬より北を望み、露国の脅威を感じ取り、海上防衛の必要性を強く考えていた。しかし幕府にはこの危機感はなく、かえって彦九郎を変人扱いした。そのために京都に急ぎ帰って王政復古と国防の大切さを岩倉卿や西洞院殿に奏上し持論を展開していくが、幕府の知るところとなり、このことから幕府の厳重な追跡を受け、寛政３年７月２０日皇居の地を辞し、山陽道各地を経て馬関より小倉に上陸。これより彦九郎は英彦山に登り、日田に出て広瀬淡窓と会い、船筏で筑後川をくだり、宮の陣浜に上陸して久留米の城下に入る。

その日は新町一丁目の萬屋金兵衛方に泊まり翌朝櫛原村の森嘉善（かぜん）を訪れる。嘉善とは京都において相知の間柄であったので、しばらく滞在することになったのである。そして久留米藩を拠点として九州各地を暦遊し自論を展開させていった。寛政５年（１７９３）６月１９日、彦九郎４７才、三度、森嘉善のところに落ち着くが、この時の彦九郎の姿を見て嘉善は不審に思っていた。６月２６日に自筆の日記を細かく寸断し、これを水盤に投じてしまう。そして嘉善らが目を放した隙に切腹をしてしまったのである。何故そのようなことをするのかと問うと今までの自分が忠と思っていたことが不忠で、義と思っていたことが不義であったと答えたという。

しかし彦九郎が提唱した尊皇倒幕、国防論が南北朝時代に最後まで残った懐良親王、良成親王、菊池一族が戦ったこの久留米の地で最後まで自論を展開し、自刃したのは偶然ではなかったのであろう、なにか運命的なものを感

じるが、このことが明治維新への起爆剤の一つになったといえるのではなかろうか。現在高山彦九郎は久留米市寺町の遍照院に眠っている。

高山彦九郎を取り巻く勤王運動の背景には、「『敬』（つつしみ）による神との合一」という「垂加神道」の真理の調べが常に響いている。高山が引き継いだ勤王運動の先人たちは、垂加神道の系譜ときれいに重なり合っていることでもわかる。

高山彦九郎が若い時期に影響を受けた垂加神道の山崎闇斎は、朱子学の敬慎説を中心に据え、吉田神道と伊勢神道などの要素を加えた独自の神道として垂加神道を唱えた。吉田神道は吉川惟足から、伊勢神道は度会延佳から、それぞれ伝授されている。こうして、闇斎は天地開闢の神の道と天皇の徳とが唯一無二なるものと主張した。

有馬守居主膳

高山彦九郎と親交のあった人の中に有馬守居という人がいた。有馬藩の国家老で垂加神道を学び、皇室尊崇の志篤く、即似庵という別邸をもっていた。何時も同士者の会合所として尊王倒幕の議を凝らしていた。高山彦九郎や唐崎常陸介が久留米にくると、守居は喜んで彼らを厚遇し、同志の会談場として提供していたようである。

唐崎常陸介は東の高山、西の唐崎と言われた神道派の学者で高山が死んだのを聞いて森嘉膳に詳細を尋ね、後に自分も切腹して果てた。そして久留米は尊王倒幕に傾いていったのである。

和泉思想の限界

限界の第一は、民衆に対する積極的な思慮がないこと、彼の建白や論説が、天皇を中心とした国家構想の志向に重点がおかれ、民衆の占めるべき位置ないし民衆の果たすべき意義・役割についての評価の姿勢が希薄なことである。

筑後地方の尊信を集める水天宮神官をつとめたこと、また水田において１１年間の蟄居生活を送ったことは在地農民―とくに指導的な地主・豪農層との接触の機会を多分にもたらしたはずである。事実彼の周囲には初めて剣術の稽古をするという身分の若者たちが多く参集して従学し、彼の指示の元国事に挺身した。和泉の妻睦子の母順は御原郡井上村（現小郡市井上）の大地主樋口家の出であり、娘小棹は後々井上村の大地主樋口敬吉の次男で尊王党の一員となって活動した樋口胖四郎に嫁したことから分かるように、和泉の周囲には被支配者・農民層の息吹きや、変革を求めるエネルギーに接触する機会は多くあったはずである。

正規の武士ではない志士和泉は、むしろ彼ら被支配者と同じ世界の中で彼らの変革への意欲をかきたてていく立場であったはずである。しかしそれにも関わらず和泉は強い武士精神のゆえに現体制における支配階級からの意識を抜け出すことが出来ず、封建制に代わるところの国民国家創設の方向を正しく見通すことが出来なかったといえるのではなかろうか。

和泉にとって民衆とは、彼の意図する討幕達成後の新しい国家像の中に有用不可欠の正員として組み込まれていくのではなく、「千の内五百人義士にて、五百人は農民あるいは力士盗賊の類にても可」というように盗賊と並称される価値しか持たされておらず、僅かに「義士」兵力の足しとなるに留まり、しかもその農兵軍の総督・組頭は城下より派遣された「恩威を兼ねたる」正規武士によって厳しく統率されねばならないとしていた。

結局、和泉の目指したものは封建制を超克した近代国家の樹立ではなく、あくまで現権力体制のもとにおける支配階級としての武士の意識を抜け出すことができなかったのである。この意味において倒幕論の唱始者であり、討幕運動の全国的指導者であった和泉は、必ずしも近代日本の出発点としての明治国家の創設へ直結する意義をもったとは言いがたい。かって寺田屋の変の前、薩州藩に合流し決起を希求する和泉を冷たく突き放したのは、のち“典型的な絶対主義政治家”に上昇した大久保利通であったが、この事実は大久保と和泉との明治維新における歴史的意義の相違を暗示しているのではなかろうか。

第二に、これは上述第一とも関連するが、和泉は同時代の橋本佐内・横井小楠といった開明派ブループ、ないしは高杉晋作・坂本竜馬・大久保利通ら近代国家への展望に立つ討幕派グループに比べて西洋事情に対する洞察が弱く、また西洋近代文化に対する知見が不十分であった点である。

一般的に、幕末志士の多くはペリー来航を機としてわが国を取り巻く世界情勢に目を開かされ、開国可否を巡る論争を体験し、また激しくうごく内外政情の展開の中で自らの思想・論策を肉付けていった。嘉永６年（１８５３）当時、異国船との戦いも近い頃の話として、「夷狄の首を土産に帰国する」とうような攘夷論をのべていた１９歳の坂本竜馬は、文久２年（１８６２）開国論者勝海舟から海外情勢の推移とわが国の進むべき道について懇々とさとされ、一転して開国の意義を理解するに至ったという有名な話は、このことを象徴しているといえる。

これに反して和泉の場合、その１１年間の幽因中の情報蒐集簿たる「異聞漫録」がペリー来航に刺激されて筆を起こし、異国船の図に色彩を附して克明に描いていること、またシーボルトについて西洋医学を学んだ豊後杵築出身の蘭方医工藤謙同と親しい交友関係を結んだという事実があるものの、彼の政策論の中には海外情勢・西洋近代学術への知見に支えられた具体的方策は、ほとんど示されてはいない。

安政元年（１８５４）８月和泉がしたためた「魁殿物語」は、彼の海外への知見を伺うに足る数少ない資料のひとつであるが、国内限りの騒乱は一家内の争いにひとしく、解決

すれば元通りになるのに反し、外国に敗れることあれば再び陽光を仰ぐことも出来ないであろうという認識の下、当時一般的に存在したロシア＝仁義の国説を批判して「かのあめりかを皇国の助けとし侍らんぞよき」とする親米論を述べた。

しかしそれはアメリカが遠隔の地にあり、共和国であるため、遠からず滅亡するであろうとの薄弱な理由からであった。しかも外圧への対抗策として和泉が挙げたものは、政教を正し、神ながらの道を高め、仏寺を破却して兵を養う用とし、財政を引き締め、身分制を正し、衣食住および吉凶の制をたて、服装の制を厳しくする、といった点に過ぎなかった。勿論一方で和泉は、キリスト教により政教一致、人心安定しているため外国は強力であり、第一等の人物２－３人が国王を補佐して日々論議し、国是を立てるに速やかで国の隅々まで威令が浸透し、なかんずく西洋では庶民のうち強壮なるものを徴集して兵士とするという兵制をとっているため強力であるとの指摘をしており、その着眼点は並々ならぬものがある。

しかし、それにしても安政初年吉田松陰が兵学的にみて無為無策のものに過ぎぬと痛撃した会沢正志斎の「新論」を、和泉は文久３年１月の段階でもなお三田尻招賢閣における志士たちの日課に掲示したことや、西洋近代技術に対する無理解・無見識は、近代的世界への展開・連結の可能性をほとんど持たなかったことを物語るとともに、彼の論策・思考の根底にあるところの古さのゆえんではなかろうか。

二．孝明天皇即位と外夷の脅威（和泉上洛）

アジアの、否世界の強大国と信じていた清国が、イギリスとのアヘン戦争で敗北（１８４２年）し、南京条約を強要され上海など五港を開港したという報に接したとき、冷静に考えることが出来る日本人は、外国との武力対決は日本の軍事力の現状では無理であること、したがって鎖国体制を維持することも、きわめて困難であることを自覚せざるを得なかったはずでる。

外国船は、以前から日本近海に頻繁に出没するようになっていた。オランダ船以外の事例を辿っていくと次のようなものがある。

１８０８年８月、イギリスの軍艦フェートン号、長崎に虚偽入港（オランダの国旗を掲げ入港）。

１８１６年１０月、イギリス船琉球に来り貿易を求める

１８１７年９月、イギリス船浦賀来航

１８１８年５月１３日、イギリス人ゴルドン浦賀来航、貿易を求める

１８２０年１２月、幕府は浦賀奉行に相模沿岸警備を命ずる

１８２２年４月６日、イギリス船浦賀来航、薪水を求める。

１８２４年５月２８日、イギリス捕鯨船員、常陸大津平潟浜上陸、薪水を求め、水戸藩に捕らえられる。会沢正志斎がこれを尋問、「新論」を著す。

７月９日、イギリスの捕鯨船員、薩摩宝島に上陸し略奪する。

１８２５年２月１５日、幕府、異国船打払い令を発布。

５月２６日、イギリス船陸奥沖へ来航

１８３１年２月、外国船、東蝦夷を侵す。

１０月２９日、幕府、松前章広に命じ辺境警備を厳にせしむる

１８３２年７月２７日、イギリス船、琉球漂着

１８３６年７月２５日、ロシア船、エトロフ島に漂流民を護送する

１８３７年６月６日、アメリカ船モリソン号音吉を含む漂流民を日本に送り届けるため浦賀に来航したが、異国船打払令に基づき日本側砲台が砲撃した。この事件後、異国船打払令に対する批判が強まった。

１８４２年、モリソン号事件を契機に批判が高まった上に、本年（１８４２）、アヘン戦争で敗北した清の南京条約締結に驚愕した幕府は政策を転換し、遭難した船に限り給与を認める天保の薪水給与令を発令した。

１８４４年２月、フランス船琉球来航、貿易を要求

７月２日、オランダ軍艦長崎来航、使節コープス、幕府に国書を呈して開国をすすめる。

１８４５年５月１５日、イギリス船琉球来航、貿易要求
６月１日、幕府、オランダ国王の開国勧告を拒否
７月、イギリス軍艦長崎来航、測量許可を願い薪水を求める。
１８４６年２月６日、仁孝天皇崩御、孝明天皇践祚（２月１３日）

孝明天皇即位のこの年（１８４６年）の８月２９日、朝廷は幕府に対して、近年異国船が近海に出没しているから、海岸防備を怠らぬようにと要望し、かつ海外情勢についての情報も要請した。

これを受けて幕府は、ビッドル（アメリカ）、セシュ（フランス）らの来航など、この年に起こった対外関係事件を朝廷に報告した。この時、満１５歳の孝明天皇が、対外関係にどれくらい関心があったのかはっきりしないが、朝廷全体としては、対外関係に並々ならぬ関心と、危機感を抱く、そのような時代となっていたのである。

真木和泉が尊王思想を固めるキッカケは、幼児から接した楠公の書物であったといわれるが、攘夷思想はその勤王思想から派生した可能性もないことはないが、より直接的には、孝明天皇の攘夷の言動に接したことによるものとも思われる。その後彼の攘夷思想は討幕思想へ変質していくことになる。

孝明天皇が政治にかかわる発言を始めたのは、日米修好通商条約の締結に反対した、安政５年（１８５８）１月で、満２６歳のときである。しかし天皇はそれ以前から、攘夷の思想を持っていたようで、安政４年(１８４７年)９月、孝明天皇の即位式拝観のため和泉は上洛し三条実万、東坊城聡長、野宮定功ら公卿、小林良典ら堂上諸大夫の知遇、面識を得たが、このとき既に、孝明天皇の考えは、それらの公卿から和泉の耳に入っていたようである。

少し時代は下るが、攘夷の成功を祈願するため、文久３（１８６３）年３月１１日、孝明天皇が賀茂別雷神社と賀茂御祖神社に行幸した。天皇が御所の外に行幸するのは、江戸初期の寛永３（１６２６）年に後水尾天皇が、上洛した将軍家光が待つ二条城に行幸して以来の、２３７年振りのことであった。近世の天皇は２００年以上の長い間、御所の外の世界を知らずに生活していたのである。

天皇の御所の外への行幸は、幕府が許さなかったのである。幕府は天皇の相談役の任にある関白を優遇し、歴代の関白を通じて天皇を監視して、天皇の行動に制約を加えてきていた。しかし孝明天皇の賀茂社行幸は、この幕府による天皇・朝廷統制体制が、今や崩壊してしまったことをはっきりと示していた。

行幸は人々に鮮烈な印象を与えた。関白を始として有力公卿が天皇に付き添っていたのは当然として、天皇の鳳輦（ほうれん、屋根の上に金色の鳳凰の飾りのつけた輿）の前に、岡山藩主池田重正、熊本藩主細川慶順、徳島藩主峰巣賀斉裕、仙台藩主伊達慶邦、米沢藩主上杉斉憲、秋田藩主佐竹義堯、其の他の有力大名が連なって先陣を勤め、鳳輦の後ろには馬上の将軍家茂が従い、そして将軍後見職一橋慶喜と水戸藩主徳川敬篤および老中らが

後陣として続いていた。すなわちこの行列は、孝明天皇が将軍と有力武家を従者としていたことを現していたのである。

日本の近世社会では、天皇・朝廷は幕府の政治的支配下に置かれている、というのが一般的な通念となっていた。しかしこの行幸は、そうした通念を吹き飛ばすものであった。なぜなら攘夷祈願の行幸という、このとき日本が直面していた国家的課題を達成する事を目的とした、極めて重要な政治的行為の場において、天皇は将軍・武家を従えて、政治的に国家の最上位に位置するものであることを誇示していたのである。

２３７年ぶりに群衆の前に姿を現した天皇は、攘夷のために積極的に行動する将軍・武家の上に立つ政治的存在として表れたのである。そしてこの行幸の風景は、錦絵などの刷物によって日本全国に広く伝えられていった。こうして、天皇は将軍より政治的に上位の存在であること、天皇と将軍、朝廷と幕府の政治的位置関係の逆転したことが、広く同時代の人々に共有されることになったのである。

和泉の「尊王攘夷」思想は後年に入ると「尊王討幕」へ急展開する。討幕思想は早い時期に芽生えていたことは先に述べたとおりであるが、現実問題として既に下田、函館といった主要港を開港してしまった以上、孝明天皇の主張される「和親通商条約破棄」は、もはや実行不可能な願望であることを認めた上でのことであろう。「尊王」中心の和泉の思想にとって、「攘夷」を放棄し開国した幕府は、もはや信頼に値しない体制であることを意味し、そのことから「尊王攘夷」ではなく「尊王討幕」へ転向したのであろう。

一方、和泉の考え方に対し、ワンクッションおく「尊王開明」の考え方をとった人々も多くいた。とくに幕藩体制の要である藩主にそれが多かった。それはペリー艦隊が示した破壊力の凄さを見て、その力の根源になっている技術力を自分のものにすることから対処しようと考えた人たちである。その一例を以下佐賀藩主鍋島閑叟にとってみる。佐賀藩のこの動きが後に田中久重を世に送り出す重要な契機となったからである。真木和泉を尊王討幕派と見れば、鍋島閑叟はその対極の開国開明派に仕分けすることができ、田中久重と和泉はこれ以降１８０度違う方向へ進みだすことになるからである。多少長くなりますが、その経緯を辿る横道にそれます。

長崎・出島の起爆力（開国開明への足がかり）

明治維新は、日本人の歴史における最大の社会変革であった。この社会を根底から変えた明治維新には「西洋の衝撃」つまり黒船の脅威が根底にある。より具体的には何よりも先ず製鉄大砲と蒸気機関である。この二品は、１８・１９世紀西洋産業革命の産物だが、それを手にした西洋諸国はみるみる強大となり、全世界に覇を唱えるにいたった。非欧米地域は次々に植民地化され、資本主義世界市場が形成された。この荒波に見舞われたとき、

日本の先覚者は、民族の生存を賭して、「夷の術を以って夷を制す」。西洋文明に学んで自己強化に努め、外圧に対抗しようと図った。「夷の術」の中身は、理の当然として、何はともあれ鉄製大砲と蒸気機関、なかんずく前者だった。その営みの延長線上に、士農工商の世から四民平等の世への大転換が起きる。これが明治維新の本因である。

ペリー艦隊が来航したとき、世は上へ下への大騒ぎとなったが、この時点で日本に大砲がなかったわけではない。

日本最初の大砲は、天正年間(１５７３～１５９１)に豊後の大友宋麟が南蛮船から火砲数門を買い入れ、実戦に使用したのが最初とされる。宋麟はそれを「国崩し」と名づけて隣国薩摩の島津氏との戦闘などに使用した。古い記録に当時の石火矢（大砲）について「昇竜の雲のごとき黒煙を奔流し、その鳴るさまは驚雷のとどろくごとく、聞くものその耳を被わないものなし」とある。確かに轟音による威嚇と破壊の威力はあったようだが、大量の火薬を消費するわりには殺傷力もなく差し引きすれば無駄が多い、と当時の戦国武将には考えられたようである。

次に、国産大砲の製造を手がけたのは幕府自体のほか数藩あったが、もっとも進んでいたのが佐賀藩であった。薩摩藩も比較的早く完成に結び付けるが、佐賀藩に比べると４年ないし５年出遅れていた。

佐賀藩の経緯は後で詳しく述べるが、嘉永３年（１８５０）、佐賀城下の築地(現在の佐賀市長瀬町日新小学校付近)に大銃製造方という役所をおき、日本最初の洋式反射炉を完成させ、国内で始めて鉄の大砲の鋳造に成功している。それはペリー来航の一年前１８５２年のことであった。その技術の入手先は蘭学である。佐賀十代藩主鍋島閑叟の命により、オランダの技術書を翻訳し、理論や仕組みを学んだのである。その後、嘉永６年（１８５３）新たに多布施反射炉も増築し、幕府からの大砲注文をこなした。つまりペリー来航以前に佐賀藩は築地で大砲を製造していたのである。

ペリーは翌年の再来を告げ一旦米国に帰るが、その間に東京・品川のお台場には立派な迎撃用大砲が据えつけられた。手品で出現したのではない。佐賀藩が製造据えつけたのである。

後述するように久留米藩も海軍力で他藩に引けをとらない軍備を誇ることになるが、久留米藩の海軍や大砲などの整備も、佐賀藩に比べると時間的に少し後のことで、西洋文明の取り込み度合と速さは格段の遅れをとっていたのである。では、佐賀藩をシャニムニ開明へ突き動かした動機はいったい何だったのか。その辺から論を進めます。

なお、東京お台場の大砲を作ったといわれる反射炉跡が最近佐賀市の多布施で発掘されている。

（1）天領のこと

徳川幕府、第二代将軍徳川秀忠は、元和２（１６１６）年にヨーロッパ商人との貿易地を長崎・平戸の二港に限定して諸大名を海外貿易から締め出し、幕府による貿易利益独占を図った。この傾向は第三代将軍徳川家光の治世にいっそう強化され、寛永１０年（１６３３）から１６年にかけての一連のいわゆる鎖国令によって、日本人の海外往来禁止、キリシタン厳禁、外国船来航制限などの政策が次々に励行された。

その間に「島原の乱」が勃発した。この反乱に甚大な衝撃を受けた幕府は、鎖国政策にますます拍車をかけた。旧教（カトリック）国のポルトガル人を一揆と通牒したと疑って国外追放し、関係を遮断する一方で、新教（プロテスタント）国のオランダ人および非キリスト教国の唐人（中国人）にのみ長崎での貿易を許し、かつ平戸は閉鎖した。なおイギリス人はオランダ人との商売争いに敗れて自発的に日本から撤退した。

締め出されたポルトガルは、過去１世紀にわたって日本との貿易実績があったので関係再開を熱望し、寛永１７年（１６４０）、中国大陸におけるポルトガルの根拠地マカオの総督が使節船を長崎に派遣した。これに対して幕府当局は、拒絶の強固な意思を示すとして、使節以下６１人を斬首し、乗船を焼き払い、下級船員１３人を強制送還した。
まさに暴挙というべきであろう。

この強硬姿勢に対してはポルトガル船による報復が当然予想された。そこで翌寛永１８年、家光は、筑前福岡藩主黒田忠之に長崎港口警備の軍役すなわち「長崎御番」を命じた。しかし福岡一藩では不十分とみたのか、寛永１９年には地理的に隣接する佐賀藩主鍋島勝茂にも長崎御番を命じ、福岡藩と一年交代で勤めさせた。長崎御番の使命は、警備一般の域に留まらず、当初からポルトガル船という具体的脅威を想定したものであり、実戦覚悟の真剣な役目であったのである。

長崎は天領だから、幕府自身が港口に台場（砲台）を築き、石火矢（大砲）・砲弾・火薬を備え付けたが、その運用は御番の藩兵に委ねられた。福岡藩と佐賀藩は、それぞれ当番年には約１０００人の軍勢を長崎へ派遣して番所と主力台場を固め、非番の時も約半数を残して付属台場を守った。おまけに両藩はそれぞれ用船１００艘以上の水軍も配備しなければならなかった。

長崎御番の大任は福岡・佐賀両藩にさまざまな影響を及ぼした。御番は軍役だから当然のこととして動員費用は藩の自弁であり、藩財政に過大な負担を背負わせた。そこで幕府は両藩の参勤交代費用の軽減を図り、通例では一年間となっている藩主江戸滞在期間を１００日間に短縮した。両藩はこの特典を「百日大名」と自慢し、将軍から特別待遇を与えられているとの誇りは、日本国防の第一線を担っているという使命感とあいまって、財政苦を耐える精神的根拠となった。

長崎に入港するオランダ船は年平均５隻程度で、白糸（生糸）・砂糖・絹織物・理化学品などをもたらして、銀・金・銅・手芸品などと交換したが、江戸時代中期以降は１年で２隻に制限された。出島の商館にはオランダ人１０数人が常駐し、うち一人は医者だった。商館長は自国船が入港すると最新の政治経済情勢報告書を長崎奉行所に提出する義務を負い、その翻訳「阿蘭陀風説書」が幕府老中に届けられた。また商館長は毎年江戸参府を行った。

オランダ船以上に国際色をもたらしたのは唐船で、多い年は述べ２００隻に達して旺盛に貿易活動を繰り広げ、白糸・薬種・書籍などを持ち込み銅・水産物などを持ち帰った。なかには唐船と称しながら安南（ベトナム）・呂宋（フィリッピン）・シャムなど東南アジア各地からの船も混在していた。唐人屋敷で生活するものは多いときには５０００人を超え、唐人用の仏寺や道教廟も建てられた。唐船が入港するたびごとに、長崎奉行所の風説定役は船長から必要事項を聴取して「唐船風説書」を作成し、これまた奉行所を経て老中へ伝えられた。「阿蘭陀風説書」「唐船風説書」は幕府の貴重な海外情報源となった。両風説書の内容は勿論部外秘だが、御番方としての長崎奉行所と常時接触している長崎・福岡両藩には洩らされた。このことは総じて海外事情に疎い諸藩とは決定的に違う特権だった。

以上のような背景から、佐賀における蘭学の登場も他藩に比べ早かった。江戸ではオランダ商館長の江戸参府とともに伝わった蘭学が、やがて第八代将軍徳川吉宗の奨励によって盛んになり、安永３年（１７７４）の杉田玄白、前野良沢翻訳「解体新書」が一つの画期となったが、その頃すでに佐賀では長崎で修業した島本良順が蘭方医の看板を掲げ、やがて門下から伊東玄朴・大石良英・山村良哲ら名医が育った。寛政３年には長崎の著名な蘭方医楢林栄哲を藩医に招いている。

（２）フェートン号事件

文化５年（１８０８）８月、イギリスの軍艦フェートン号が、長崎に突然現れた。もっとも軍艦といっても当時はまだ帆船であった。

イギリスは、十六、十七世紀以来、強勢な海軍力を押し立てて七つの海に進出し、各地に植民地を確保して世界強国となった。他方、十八世紀末のフランスでは、かのナポレオン一世が台頭してヨーロッパ大陸を制覇し、イギリスと対峙した。そこでイギリスは、ナポレオンの支配下に入ったオランダを敵国視し、アジア各地のオランダ商館接収やオランダ商船拿捕に乗り出した。その一環としてフェートン号は、長崎オランダ商館を狙って来航したのである。

入港時のフェートン号は、偽装してオランダ国旗を掲げていた。そこで長崎奉行所は、既にオランダ商船渡来の季節が過ぎていたにもかかわらず、検使船を出し、オランダ商館

員２名が同行した。一行が乗船するや、フェートン号はオランダ国旗をイギリス国旗に替えて検使を追い返し、オランダ人を人質に捕らえて飲料水・食料を要求した。イギリス側の武力行使を恐れたオランダ商館長らは、急遽奉行所に保護を求めて避難する騒ぎとなった。

幕府天領長官の長崎奉行松平康英は、イギリス艦の傍若無人な振る舞いに激怒し、長崎御番の当番年の佐賀藩部隊に出動を命じた。ところが、シーズンオフに入っていたので隊員の大部分は既に帰藩し、急場に間に合わなかった。佐賀藩は、長年の平穏無事に油断し手を抜いていたのである。打つ手に窮した奉行所は、オランダ商館長に嘆願されるままに、やむを得ず人質と引き換えに飲料水・食料を供給し、二日後にフェートン号は退去した。

その夜、松平奉行は不始末の責任を取って切腹自殺を遂げた。遺書には佐賀藩の怠慢への抗議も認められていた。

（３）佐賀藩へ与えた影響

奉行松平康英の引責自殺で、事は単発的な外国軍艦騒乱事件の域を超えて重大政治問題へとエスカレートした。江戸の大身旗本から任命される長崎奉行は、将軍の意を受けて西国諸大名を軍事的に指揮命令できる広大な権限を帯びていた。いわば幕府西国支社長格に相当する公儀直参の高官で、並みの大名より上位の権力者だった。それほどの重要地位にある人物が自害に追い込まれたわけだから、事態はすこぶる深刻に受け取られ、責任問題が厳しく追及されるにいたった。

不運にも非難の矢面に立たされたのは、松平の遺書でも警備の手抜かりを指弾された佐賀藩だった。佐賀藩は平身低頭し、長崎派遣の番頭（部隊長）千葉三郎右衛門・蒲原次右衛門の死罪はじめ関係者を厳罰に処して幕府に謝罪した。しかし、それだけではすまなかった。

佐賀藩主鍋島斉直（なりなお）は将軍の叱責を受け、逼塞（謹慎）を命じられた。大藩３５万７０００石の堂々たる国持ち大名ともあろうものが、世間との交際を絶たれて屋敷に閉居させられたのである。佐賀藩士民一同はその厳しさに驚愕した。

藩内には重苦しく沈痛な空気が立ち込め、歌舞音曲の停止はもとより、城内や市中の年中行事や祭礼は取りやめ、役所や学校は門を閉じ、藩士は髭もそらず、商店や行商まで自粛し、藩全体は火が消えたような有様となった。斉直の逼塞は１００日間で解除されたが、フェートン号事件は佐賀藩上下に癒しがたい傷痕を残したのである。

かくて佐賀藩の人士は、対外問題の厳しさ難しさを嫌というほど痛感させられ、この痛切な体験で、改めて長崎御番が重要であることを骨身にしみて思い知らされるとともに、国際感覚もまた研ぎ澄まされたのである。

ちなみに御番相役の福岡藩は、非番年だったので、それほどの衝撃を受けなかったようで、そのことが、以後の両藩の歩みを分けた遠因の一つなのかも知れない。

（４）名君　鍋島閑叟（かんそう）登場

（佐賀藩のことを今しばらく続けます。この頃の久留米藩は、長崎ひいては佐賀藩の動きに強く影響を受けていたからです。ペリー来航までにはもう少し時間があります。）

佐賀藩主鍋島閑叟は１８１４年、斉直の嫡子として佐賀藩江戸屋敷に生まれ、名は貞丸、元服して斉正（なりまさ）（のち直正、号は閑叟（かんそう））と名を改め（本稿では便宜上すべて閑叟と呼ぶことにする）、第十一代将軍徳川家斉の息女盛姫と結婚、天保元年（１８３０）、隠居した斉直の後をついで第十代藩主に就いた。時に１７才（満１５才）であった。

晴れのお国入り行列は美々しく江戸屋敷を繰り出したが、最初の品川宿で止まったまま進まなくなった。早く出かけようと催促する閑叟に対して、言葉を濁していた側近はついにくるしい実情を打ち明けた。江戸屋敷内で生活している藩士たちがたまっている米や味噌・しょうゆなどの代金を支払えないので、市井の商人たちが督促に押しかけてきて出立できず、大名行列の供揃が整えられないというのである。閑叟は愕然として、わが家中はここまで窮迫していたのかと暗澹となった。お金をなんとか工面できて行列が出発したとき、陽は既に西に傾いていた。青年藩主閑叟は、門出早々の屈辱的衝撃に打ちのめされ、藩政建て直し改革の断行を固く心に誓ったのである。

はじめて佐賀の地を踏んだ閑叟は、非常の決意で冗費削減に取り組んだ。まず自ら粗衣粗食に徹して倹約の模範を示し、家中一統にも質素な生活を求め、各役所や江戸屋敷の経費も切り詰めるなど、乱脈財政からの脱却に着手したのである。

以後、藩制改革は精力的に進められた。「均田制」を実施して、地主の土地集積を防ぐとともに、加地子（かじし）（小作料）の取得を制限し、小農民を保護して農業生産の振興と農村社会の安定を計った。他方では、ハゼ蝋・陶磁器・石炭など国産を奨励して特産物輸出に努めた。もともと佐賀平野は気候温暖で肥沃な米どころ、有明海は豊饒で水産物に恵まれ干拓の利もあり、地理的には長崎貿易へのアクセスが容易で特産物輸出に便利であるなど、好条件がそろっていた。ゆえに藩主が本気で先頭に立てば改革の効果は表れやすく、財政事情は着々と好転していった。経済史家の推算では、表高３５万７０００石の佐賀藩の実収高は９０万石をゆうに超えていたという説もある。とにかく有数の富裕藩に大変貌したわけであり、この財力が後述の旺盛な洋式軍事建設事業を支えたのである。

家役（特定の大名家に課せられた軍役）の長崎御番に人一倍の強い使命感を抱いていた閑叟は、天保元年（１８３０）新藩主として初めて佐賀入りするや、その後僅か１０日足らずで待ちかねていたかのように長崎現地へ赴いた。そして親しく台場や番所を視察し、御番勤務中の藩士たちを激励した。

閑叟は次期参勤で江戸へ出るまでに三度も長崎を訪れたが、二度目の６月２７日にはちょうどオランダ船が入港していたので、閑叟は実際に乗ってみたいと強く希望した。天下太平のこのご時世に大名ともあろうものは日本の商船にさえ足を踏み入れることなく、ましてや異国船に立ち入ろうなどとはとんでもない話だった。前例しきたりを重んじる長崎奉行所はいい顔をせず、公儀をはばかる家来達も何とか思い留まっていただきたいと強く袖を引いたが、閑叟は初志を翻さなかった。

奉行所はやむを得ず特別に許可を与え、閑叟ははれてオランダ船の見学に乗り込んだ。彼ほどの貴人が自ら異国船を訪ねるのは異例中の異例だったから、船長は驚きかつ大いに喜び、船内の隅々まで案内してくれた。

閑叟は異国船の頑丈な構造を実見し、また海上から陸地を見渡すことで、改めて海防感覚を磨いたことだろう。若い殿の積極的な解放的態度は佐賀藩士たちを強く感化したに違いない。

以後、閑叟の長崎視察とオランダ船乗り込みは恒例となった。

（５）佐賀藩、高島流砲術を導入

閑叟の藩主就任翌々年の天保３（１８３２）には、西洋式砲術の元祖として名高い高島秋帆の高島流砲術が早くも佐賀藩に伝わった。

フェートン号事件と奉行松平康英引責自殺に衝撃を受けた幕府は、長崎港口の警備を福岡藩と佐賀藩の軍役に任せる方式に加えて、港内７ヶ所に新台場を設けて長崎奉行所の地役人に分担させた。オランダ商館に近接する出島台場の担当を命じられたのは、町年寄高島四郎兵衛だった。町年寄は長崎土着の有力者数家が世襲し、身分は武士と町人の中間で名字帯刀を許され、奉行指揮下に市中行政の貿易会所運営などにあたり貿易利潤に預かるので富裕で、小さな大名並の屋敷を構え家来も抱えていた。四郎兵衛の子四郎太夫は秋帆の号で知られるが、台場備砲が旧式で威力が貧弱なのを痛感し、陸軍士官出身のオランダ商館長スチュルレルから西洋砲術を学んで、在来の和流をも加味した高島流砲術を開き世評を得た。

天保３年、佐賀藩武雄領主鍋島茂義は、家来の平山醇左衛門を高島秋帆の下に入門させた。武雄鍋島家は領地２万１０００石余の佐賀藩名門、長崎にも屋敷を置いていた。茂義は蘭学を好み、夫人は閑叟の姉だった。平山は秋帆の高弟となって高島流の免許皆伝を授けられ、天保５年には茂義自身も秋帆に入門した。翌６年、閑叟は、近臣の坂部三十郎を武雄に派遣して砲術を学ばせた。同年秋には秋帆が武雄を訪れ、秋帆の手元で日本国内最初に鋳造されたばかりの西洋式青銅砲モルチールを持参して試射を行い、同砲を茂義に贈っている。

こうして佐賀藩内には他藩に先駆けて急速に洋式砲術知識が広がった。天保８年（１８３７）には佐賀藩は秋帆を介してオランダに各種新式兵器（鉄製カノン砲・臼砲・剣付銃

など）や兵書を注文するまでにいたった。天保１１年には閑叟自身が高島流砲術の演習を親しく観閲し、同流を佐賀藩軍制に正式採用することに決めて、茂義を砲術師範役に、平山を蘭砲稽古取立に任命した。

時代は天保年間だから幕府や諸藩はいまだ深い眠りの中にまどろみ、この面でも佐賀藩の先進性は突出していたのである。

（６）アヘン戦争

佐賀藩が高島流砲術を正式採用したのが天保１１年（１８４０）、奇しくもその年から翌々天保１３年にかけて繰り広げられたアヘン戦争は、東アジア情勢に一転機を画くした世界史的大事件であった。戦勝したイギリスは東アジア世界に足場を築き、敗北した清国では以後１世紀にわたる半植民地状態への転落が始まった。

その背景にはいわゆる産業革命があった。１８世紀末葉にイギリスで蒸気機関が発見され、産業に機械力が導入されて生産性が飛躍的に向上し、イギリスは「世界の工場」となった。その勢いは西ヨーロッパ・北アメリカへと拡大した。産業革命の産物である蒸気軍艦と鉄製大砲を手に入れた欧米勢力は、みるみる強大となり、商品市場の開拓と拡大を求めて世界各地へ押し出していった。その延長線上にアヘン戦争が勃発したのである。

産業革命に伴って工場労働が普及すると、イギリス人の間で紅茶嗜好が流行した。中国茶への需要の高まりで対清国貿易ではイギリス側が大幅な赤字となり、その穴埋めにイギリスは植民地インド産のアヘンを輸出した。その結果、清国人のアヘン中毒者が激増して貿易収支が逆転、そこで清朝はアヘンの持込を厳禁した。ところがイギリス政府は、自由貿易を阻害したとして艦隊を派遣し、広東・上海などを攻撃した。清朝は屈服し、香港割譲・広州など五港開放・賠償金支払いという屈辱的条約を押し付けられて、半植民地状態への転落が始まった。逆にイギリスは香港を奪取して格好の根拠地を獲得した。かくて東アジア国際環境は激変し、欧米列強の優位状況が出現した。いまや西欧産業革命に発した世界史の荒波が、日本の目前まで打ち寄せてきたのである。

戦況は「阿蘭陀風説書」や「唐船風説書」で刻々と日本に伝えられ、強烈な衝撃を及ぼした。かねて日本知識界では、お隣の「唐」を聖賢（孔子・孟子）を生んだ文化先進国として伝統的に畏敬してきた。その大国がイギリスの凶暴な軍事力で手もなく打ちのめされたのを目のあたりにして、心ある為政者や識者は「明日はわが身」と深刻な恐怖感に襲われた。

長崎で戦争の情報にいち早く接した高島秋帆は、洋式砲術の採用が急務である旨を長崎奉行に上申した。それは老中水野忠邦に伝えられ、天保１２年（１８４１）に幕府当局は高島一門を江戸に招いて郊外徳丸原で高島流砲術の演習を挙行させた。一門中には平山醇左衛門の姿もあった。その結果、幕府は幕臣下曽根金三郎と伊豆韮山代官江川太郎左衛門

に高島流の習得を命じたが、佐賀藩の場合に比べてほぼ１０年遅れだった。

さらに翌天保１３年（１８４２）、アヘン戦争の二の舞を警戒した幕府は、文政８年（１８２５）以来の異国船打払い令を１７年ぶりに撤廃した。異国船との摩擦が不慮の戦争を引き起こすのを避けようとしたのである。代わりに薪水給与令を発して異国船への対応を緩和し、事情をただして穏やかに帰帆を促し、必要な場合には食料・薪水を給与してもいいとした。同時に江戸湾防備の調査に着手するとともに、諸大名には自領の沿岸警備強化を命じた。日本・琉球海域へのフランス・イギリス・アメリカ合衆国など異国船の到来や接岸は、ますます頻繁になっていた。幕府は、佐賀藩・福岡藩に対しても長崎防備強化の方策について改めて諮問した。

アヘン戦争の警報に最も敏感に反応した日本人のひとりは、閑叟だった。とくに閑叟の場合、イギリスという名称はフェートン号事件の忌まわしい記憶と固く結びついていたからである。そのイギリスが長崎を襲うかも知れぬとの強烈な警戒心が生まれたのは当然であろう。彼は、眼前にせまりくる危機への対策に心を砕いた。

天保１５年（１８４４）参勤交代を終えて江戸から佐賀に帰った閑叟を待っていたのは、かねてオランダに発注しておいた鉄製の大モルチール（臼砲）であった。このモルチールの高性能に感銘した閑叟は、洋式砲術と造兵のいっそうの発展を図って、早速藩に「火術方」を新設し、高島流はもとより在来の和流砲術家や洋学者・和算家・刀鍛冶・鋳物師などまで総動員し、火器の開発研究・製造や砲術・銃隊訓練のセンターとした。

火術方開設の翌６月、長崎入港のオランダ船が重要な知らせをもたらした。オランダ国王ウィレム二世から日本皇帝あての国書を奉じた使節コープスが、軍艦パレンバン号に搭乗して近々長崎に来航するというのである。これまでのオランダ船は、ジャワ島など東南アジアのオランダ領植民地から到来した商船だったのに対して、オランダ本国から直航する軍艦を迎えるのは初めてだった。また西洋国元首が正式に派遣した使節の接受も、４０年前のロシア国書の前例以来だった。かくて幕府は緊張した。

そして到着したオランダ国書の内容は、アヘン戦争後の世界情勢に鑑みて日本の鎖国維持は早晩困難になるから、清国の覆轍を教訓にして自発的に開国するのが得策であるという、友邦としての好意ある勧告だった。しかし、幕閣は意思統一できずに逡巡して結局返書を与えることなく、使節退去後の翌年になってあらためて鄭重に謝絶した。

この年の長崎御番は佐賀藩の担当だった。閑叟は警備に万全を期し、オランダ艦の滞留１００日間に５度も長崎に出張した。彼は、この機会に西洋軍艦内部を実見したいと望み、渋る長崎奉行を口説き落として、９月２１日に盛大な威儀を整えて訪艦した。幕府の優柔不断な対応に業を煮やしていた使節コープスは、閑叟の積極的な態度を大歓迎し、艦の装備や水兵の演習などをくまなく見せた。長時間にわたって熱心に見学した閑叟は、これまで幾度も乗り込んで見慣れていたオランダ商船とは桁違いに強力な軍艦ならではの武装を

見せ付けられ、海防の厳しさを改めて痛感した。

（７）長崎沖合砲台設置

アヘン戦争からオランダ軍艦見学にいたる一連の情報に学んで閑叟は、長崎防衛構想を大きく前進させた。これまでの対策の基本は、外敵の侵入を湾口の台場上で食い止めることだった。しかし、強力な軍艦に防衛線を突破されて湾内進入を許せば、守る側はお手あげとなるだろうことは、既にフェートン号の前例が示唆していた。そこで閑叟は、幕府から長崎防衛策強化について諮問を受けたところでもあり、防衛の第一線を沖合へと押し出すべきだと考え、湾口の外側を扼す伊王島と神ノ島に新台場を造築して高性能の洋式製鉄大砲１００門を配備するという壮大な計画を立てた。費用は２０万両の巨費が見積もられた。

閑叟は、この構想を御番相役の福岡藩に持ちかけ、共同で幕府の諮問に答申して賛同を得ようではないかと誘った。しかし閑叟ほどの危機意識に乏しい福岡藩は、離島にまで兵員を派遣させられれば負担が増えると尻込みした。一つには伊王島と神ノ島が天領でなくて佐賀藩領なので、他国領のことに関わりたくないとの縄張り根性も働いたのだろう。

幕府もわざわざ諮問しておきながら、いざ閑叟からの答申に接するや反応は鈍かった。長崎御番は公儀御用で、台場や大砲など基本設備の費用は幕府持ちである。財政難で江戸湾防備の手当てさえ儘ならぬ幕府にとっては、閑叟の大風呂敷には付き合いきれないというのが、本音だっただろう。幕閣は、福岡藩の腰が引けているのにも便乗し、返答を引き伸ばした。弘化５年（１８４８）は２月に改元されて嘉永元年となるが、その１２月になって、結局は在来の防備体制を強化すれば足りるとの理屈で閑叟の新構想を差し戻した。

ここにいたって、既に藩財政力に自身を回復していた閑叟は、伊王島・神ノ島は自領でもあるので、長崎沖合砲台は万難を排して佐賀藩独力で築造しようと決意する。嘉永３年６月には幕閣の了承を取り付けた。アヘン戦争から１０年後、そしてペリーやプチャーチンが来航する３年前だった。

かくて佐賀藩を挙げての一大プロジェクトが始まった。伊王島・神ノ島の台場造成は難工事であり、特に神ノ島と隣接の小島との間２キロの浅瀬埋め立てには苦労したが、とはいえ在来工法の枠内でのことだった。問題は洋式鉄製大砲だが、閑叟は製品輸入にも外国人技術者にも頼らずに、果敢にも佐賀藩自力で開発し製造しようと決意した。それはいまだ日本人だれ一人として成就したことのない難題であり、火術方の総力を傾けた挑戦だった。

第１４次の製造でようやく実用に耐える製品を作り出すことが出来たが、洋書を頼りに独学、手探りで反射炉用の耐火煉瓦製造から第一歩を踏み出して満２年、在来技術をも活

用しての佐賀藩火術方の奮闘は、日本科学技術史上に燦然と輝くものだった。襲封以来２２年、この日のために藩政に苦心没頭してきた３９才の閑叟にとっても、感無量のものがあったであろう。

出来上がった新砲は次々に伊王島と神ノ島の新台場にすえつけられ、長崎の防衛力は一変した。ペリーが江戸湾に第一回目に来航したのが１８５３年７月８日だから、長崎砲台の完成はその１年足らず前のことであった。

（８）黒船来航（ペリー）

嘉永６年６月３日（１８５３年７月８日）、アメリカ合衆国からの黒船４隻は、７ヶ月半に及ぶ長旅の末に江戸湾口の相模国浦賀沖に現れた。うち２隻は蒸気機関を備えていた。ここに幕末激動期の幕が開いた。

その背景にはやはり産業革命があった。だが、アメリカ固有の事情があり、このときアメリカは、日本に直接市場開放を求めてはいない。

イギリスに始まった産業革命の波は、大西洋を越えてアメリカにも及び、特に綿工業が勃興した。ところが綿製品輸出先の清国市場を巡る先進イギリス綿業との競争において、新興のアメリカ製品は大西洋、インド用経由という長距離輸送を余儀なくされるので不利だった。そこで太平洋横断航路による距離短縮が図られたが、当時の航海能力では中継地が必要であり、日本の港が求められたのである。そのためには日本を開国させねばならなかった。

もう一つの理由は、太平洋捕鯨業からの要求だった。産業革命で工場の夜間操業が始まり、照明の光源として鯨油の需要が増大したので、北太平洋なかんずく日本近海での捕鯨業が盛んになった。その結果、捕鯨船の補給・休養・避難などのために、日本の港利用の必要が生じた。アメリカ合衆国政府は、これらの要求に加えて、可能であれば日本市場開放=対日貿易開始をもあわせ期待し、ペリー使節を派遣したのである。これらを総合して考えると、日本開国要求は、やはり産業革命に起因する資本主義世界市場形成という世界史的大潮流の一環だった。

日本開国を求める大統領国書の受領を迫るペリーに対して、浦賀奉行は長崎への回航を指示したが聞き入れられなかった。アメリカ艦隊は、江戸湾内小柴沖まで進入した。示威に屈した幕府は、ついに国禁を枉げて９日に久里浜で国書を受け取り、明年回答すると約束したので、アメリカ側は１２日に退去した。

ペリー来航時の老中首座阿倍正弘は、日本開国を最終的に決断した人物だが、ペリーの第一回来航の時にある注目すべき手をうった。

アメリカ艦隊退去後の２２日、阿倍は佐賀藩江戸留守居の田中善右衛門を緊急に召し出し、「鉄製石火矢二百挺程の鋳立仰付けらるるに差支は之なきや」、すなわち江戸品川台場

配備用の鉄製大砲２００門を佐賀藩で大至急製造してくれないかと尋ねた。文字通り泥縄そのものだったが、幕府はアメリカの脅威に対抗する軍事的手段を大急ぎで整えようとしたのである。

同じ２２日に重態だった第１２代将軍徳川家慶が死去して江戸城中は取り込みの真っ最中だったが、その合間を縫っての佐賀藩への依頼であり、阿倍がこの件をいかに緊要視したかが推測できる。佐賀藩主鍋島斉正（閑叟のこと）は応諾し、取りあえず５０門を至急納品することを約束した。

肥前佐賀３５万７０００石の外様大藩鍋島家は、製鉄大砲を自力で製造し配備している唯一の藩だった。もちろん他に例はなく、進んでいるように見られた薩摩藩や水戸藩といえども青銅砲の試作が関の山で、技術的に難しい鉄製には歯が立たなかった。幕府でも伊豆韮山代官江川太郎左衛門らが開発に手をつけていたものの成功には程遠かったから、阿倍は、ペリーに恫喝されるや見栄や外聞を捨てて佐賀藩に頼ったのである。

それは危険な賭けだった。そもそも武力で天下を制覇した徳川将軍家は、諸大名に軍事奉仕（軍役）を命じることはあっても、いまだかって軍事援助を求めたことはなかった。ところが、いざ黒船危機に直面して「征夷」大将軍の真価を問われたまさにその時に、阿倍老中は田舎の外様大名に頭を下げて「大砲を作ってくれ」と援助を請わざるを得なかったのである（これは軍役でなかった証拠に、幕府は大砲代価数万両を佐賀藩に支払っている）。いかに背に腹は替えられなかったとはいえ、客観的には征夷大将軍の武威に致命的な傷をつけ、実に徳川幕藩体制の崩壊はここに始まったといえるかもしれない。にもかかわらず幕府は、佐賀藩のみが製造できる新鋭大砲の魅力には勝てなかった。

当代きっての開明派名君と謳われた薩摩藩主島津斉彬は、鍋島閑叟より５才年上の親しい仲で、母親はともに鳥取藩主池田家出の姉妹なので両者は従兄弟だった。薩摩藩も鉄製大砲製造を志し、斉彬から技術援助を求められた閑叟は、技術者を派遣したり虎の巻きの蘭書ヒューギューニンの訳書を贈るなど協力を惜しまなかった。とはいえ薩摩藩の事業は難航した。斉彬が、「佐賀においては凡そ１８回ほど改築して後ち鋳砲するにいたれり、此方にては今より数十回試験の労を積まば必ず功を見るべし、西洋人も人なり、佐賀人も人なり、薩摩人も同じく人なり、退屈せず倍々研究すべし」と自藩技術陣を激励したのは有名な挿話である。

薩摩藩が成功したのは、佐賀藩から遅れること４年の安政３年（１８５６）だった。斉彬ほどの見識高い賢者に「西洋人」と並称されたように、「佐賀人」の科学技術力は国内無双で一頭地を抜いていたのである。

佐賀藩へ大砲一件を急ぎ問い合わせた直後の７月１日、阿倍老中は異例にもアメリカ大統領国書の日本語訳文を諸大名に示して対策を諮問し、更に広く幕臣・藩士・民間有志にまで意見を求めた。この諮問行為は、幕府官僚制による国政専管システムに自ら穴をあけ

るに等しい非常の措置だった。また京都の朝廷にも報告した。

当時の日本国統治原則は将軍独裁制であり、国家最高意思は徳川征夷大将軍の一存で決まり、幕藩体制全体を拘束した。その下で日本国政すなわち幕政の実権を独占したのは、老中以下の幕府官僚制であり、それは譜代大名と上級幕臣からなっていた。したがって、アメリカ大統領国書も幕府官僚制の権限と責任において処理すればいいはずだった。ところが幕閣は異例にも、従来の枠を超えて広く対策を諮問したのである。黒船危機に対処するには国力を結集しなければならないと判断したからだろうが、その結果、タブーが破られた形となり、これまで幕政の決定作成過程から制度的に除外されていた家門大名（徳川親族）や外様大名さらには藩士以下の連中までが、幕政にあれこれ口を出し始め、次第に幕府統治体制を侵食するようになるのである。

（９）プチャーチン（ロシア）来航とペリーの再来

ペリー艦隊が退去して１ヶ月余の嘉永６年７月１８日（１８５３年８月２２日）、今度はロシア帝国使節プチャーチンの艦隊４隻（うち２隻は蒸気船）が、長崎に来航した。
ロシア皇帝ニコライ一世は、アメリカのペリー派遣計画と張り合い、側近の侍従武官長プチャーチンに日本開国と樺太・千島方面国境確定の使命を授けたのである。ロシア帝国は、新興のアメリカ合衆国よりも強大国であり、かのレザノフ騒擾事件の怖い記憶ともかさなっていた。総じて日本人にはアメリカよりもいっそう脅威を感じさせる存在だった。もしプチャーチン艦隊が異国船慣れした長崎でなくて直接江戸湾に乗り付けていたら、ペリー以上の大騒ぎとなったであろう。日本にとってはまさに一難去ってまた一難、ペリーが前門の虎ならプチャーチンは後門の狼に他ならなかった。

ペリーが訪れた江戸湾の防備が貧弱だったのとは対照的に、長崎でプチャーチンが目にしたのは閑叟が用意した堅固な対外防衛施設だった。石垣で整然と築かれた台場には、精鋭の鉄製大砲がずらりとならべられて海面を威圧していた。そのこともあってか、プチャーチンは意外に低姿勢を見せた。さらにクリミア戦争の気配濃厚となったので、プチャーチンには敵国イギリス・フランス艦隊の動向を警戒しなければならない弱みがあり、ゆえに１０月から１２月にかけて様子見のために一時長崎を離れたほどだった。

１２月に入って、長崎で日本・ロシア間の交渉が正式に始まった。露使応接係に任命された西丸留守居筒井政憲と勘定奉行川路聖謨は、阿倍老中の懐刀と謳われた有能な幕使だった。彼らは、長崎砲台の威力を背にして強気で談判に臨み、プチャーチンも強く主張することはなかった。ペリーに一方的に押し捲られた江戸とは様変わりで、おおげさにいえば、諺どおりに「江戸の仇を長崎で討った」趣さえあった。

嘉永７年（１８５４）は１１月に改元されて安政元年となるが、敵国艦隊の動向に落ち着けないプチャーチンは、日本側が将来第三国と条約を結んだ場合にはロシアとも同様の

条約を結ぶと約束したのを奇貨として、正月８日に一旦交渉を中断し、再来を予告して退去した。

成功裏に任務から開放されて江戸へ帰還することになった筒井と川路は、１５日に伊王島と神ノ島の台場を現地視察に訪れた。高位の公儀お役人を迎えて張り切った佐賀藩兵は、盛大に実弾演習を披露した。演習はすこぶる好成績であり、なかんずく１５０ポンド砲など巨砲４門から沖合い１５００メートルの遠距離標的に向けて発射された１２発は、１０発が命中して参観者の度肝を抜いた。

筒井や川路が江戸に持ち帰った話によって、佐賀藩の評判はいっそう高まった。将軍徳川家定は、閑叟に褒美として徳川家に伝来する備前長船長光の名刀を親授するとともに５万両を贈り（実体は佐賀藩への貸付金５万両の返済を免除)、功績をたたえた。長崎に限れば対外危機は克服されたという訳だろう。

巨費を投じて築造された閑叟の長崎砲台は、結局一度も実戦に挑むことはなかったが、にもかかわらずその存在自体が、日本の安全と名誉を守るのに立派に役立ったといえるのかもしれない。

プチャーチンが長崎から一時退去してほっとする間もない安政元年（１８５４）正月14日、またもやペリー艦隊が江戸湾頭に現れた。しかも今度は７隻に増えていた。幕閣は、もはや開国は止むを得ないと決断し、３月３日、「日米和親条約」を結んでアメリカ合衆国と国交を開き、伊豆国下田と蝦夷地函館の二港をアメリカ船に解放した。前者は太平洋横断航路の中継地用、後者は捕鯨船用だった。交易は認めなかったが、開港場での飲料水・食料・燃料など必需品の供給は許容し、将来の通商開始への芽を残した。引き続いて幕府は、８月２３日にイギリスと、１２月２１日にロシアと、安政２年１２月２３日にオランダと、それぞれ同種の条約を結んで国交を開いた。
ここに２１０年間続いた徳川幕府のいわゆる鎖国体制は改められ、日本国は１９世紀国際社会参入への歴史的な第一歩を踏み出したのである。

（１０）佐賀藩精煉方と久留米出身「からくり儀右兵衛」

製鉄大砲製造に成功したのと同じ嘉永５年（１８５２），佐賀藩は理化学研究所にあたる「精煉方」（せいれんかた）を開設した。製鉄大砲鋳造の成功に次ぎ、蒸気機関（蒸気船・蒸気汽車）の開発が主目的である。中心人物の佐野常民は、大坂の適塾（緒方洪庵塾）を経て江戸の象先堂（伊東玄木塾）の塾頭になっていたが、藩主閑叟の目にとまって呼び戻された。

佐野は、帰藩に際して物理・化学に通じた中村奇輔、錬達の蘭方科学者石黒寛次、「からくり儀右衛門」とはやされた久留米出身異能の機械師田中久重父子ら天才肌の在野人物４

名を同伴した。

彼らは、精煉方に出仕し、機械・金属・薬品・化成品・ガラス・写真・電信など多方面の技術開発に成果を挙げた。製作された電信機は島津斉彬にも贈られた。ちなみに佐野は、明治維新後に大蔵卿や農商務大臣などを歴任し、日本赤十字社の創立者としても知られる。田中は、東芝の創業につながる人物である。詳しくは後述する。

精煉方の重点課題の一つは、蒸気機関の原理開明と応用の研究だった。蒸気機関こそは、１９世紀産業革命を象徴する最先端技術の精髄と見做されていた。精煉方の面々は、長崎奉行所がオランダ人から購入した小蒸気船を分解して詳細に研究し、蒸気機関の要領を会得した。そこで実際に動く蒸気船（汽船）と蒸気車（汽車）の精巧な模型を製作して、閑叟の手元に差し出した。安政２年（１８５５）８月のことで、これが日本人が独力で作った最初の蒸気船・蒸気車であり、現存している。実用的な蒸気船が建造されたのは、かなり時期が遅れて慶応元年（１８６５）に進水した「凌風丸」だが、佐賀藩が自力で建造したのはこれ一隻だけであり、保有蒸気艦船主力は外国からの購入だった。

長崎港の砲台の構築に輝かしい成果を上げた鍋島閑叟すらも「固定した陸上の砲台では外国船に対抗できない。大船に巨砲を載せて海上で彼らと抗争しなければならない。六十余州の沿岸に砲台を築くのは愚かの極みである」と言い切っている。

日本海岸に近づいてくる外国の蒸気軍艦を海岸砲台で追い払うだけであれば、それは頭上のハエを追い払うようなもので、蒸気軍艦を動く砲台として効果的に利用する必要性に幕末の名君、閑叟や薩摩の斉彬は気がついていたのである。

三．嘉永の大獄と真木和泉の幽因　(久留米有馬藩)

嘉永５年（１８５２）２月、真木党である久留米藩脇家老の稲次因幡正訓は真木和泉らと計らい、藩主頼咸に

「国政が振るわないのは、執政有馬河内（監物）・参政有馬豊前・不破孫一らが権威をほしいままにして、公を補佐することが出来ないためであります。しかも三人は、主君（藩主頼咸）を廃して御舎弟の富之丞様を立てようと企てています」

と頼咸に直訴してその失脚をはかった。頼咸は２５歳の若さのあまり、

「それが本当ならどうしたらよいか」

と尋ねた。因幡は、

「執政河内（監物）・参政の豊前と孫一・奥詰尾関権太・大横目付村上常次郎を退け、水野丹後・馬渕貢・白江市次郎を参政に挙げ、西原湊を大横目付となし、木村三郎を侍読に起用すべきです」

と、真木党の者を推挙した。

自分を廃する企てをなすと聞いた頼咸は、思慮を忘れ激怒し、家老有馬河内（監物）と参政不破孫一は閉門、参政有馬豊前は厳重な監視下におく処理を下した。その後１ヶ月半、裁判が続けられた結果、廃立論の証拠は不十分で、稲次因幡・真木和泉らの謀略であるということがわかり、河内以下３名は無実と判定され、罪を解かれて再び政権の座に戻った。

一方、真木党は５月 17 日、脇家老稲次因幡（正訓）、水野丹後(正名)、真木和泉守・木村三郎は終身禁錮、総計１５人が処分を言い渡された。因幡及び兄の水野正名は家格家禄を没収され永御預け、吉田丹波には、揚屋（牢屋）入りが申し渡され、木村三郎・小森田甚三郎など外同志の処罰は１５人に及んだ。有馬右近宅の座敷牢に収監されていた稲次因幡はクーデターの失敗を呪いながら、翌年悲憤の中で自刃した。２５才だった。

和泉守は水天宮の神職を解かれ、久留米から三里の所払いとなり、八女郡水田村の弟大鳥居敬太の家に蟄居を命ぜられた。文久２年（１８６２）２月 16 日、幽居の「山梔窩」を脱出するまでの、１１ヵ年、ここに蟄居した。

この「嘉永の大獄」事件は、久留米藩の幕末にむけての苦難の始まりとなった。

ここに至る久留米藩の事情を少し遡って辿ってみる。

英邁な十代藩主頼永の登場と財政再建の確立

どちらかといえば苛烈すぎたりで奇嬌な藩主が多かった有馬家で、唯一、十代藩主頼永（よりとう）は、英邁な藩主として伝わっている。頼永を可愛がった水戸藩主徳川斉昭が

宇和島藩主伊達宗城に「親はつまらぬ人故咄も致さず候べき。筑後（頼永）は親と違い、よほど有志に見え申し候。これは懇意なされ候てよろしき人と存知候」と申し送るほどだった。頼永の父は趣味にふけって藩民を顧見なかった頼徳（よりのり）である。

一時期、親子の不和から子の頼永を疑い腹心に命じて毒殺を謀ったこともある非道な父でもあった。この時頼永は次女の半子の機転で命を救われている。

このような頼徳の下、藩財政は困窮を極めて、貧すれば鈍するというが藩政はよどみ、士風は退廃していた。

仁君として藩士や領民から慕われた頼永はこの父の治世を反面教師としたのであろうか。このころ欧米列強が日本へ開国を求めて頻繁に現れ、激動の時代への序曲を奏でていた。弘化元年（１８４４）６月、頼永は十代藩主となった。

７月、オランダ軍艦が長崎に入港、アメリカのペリー来航を予告した。国内に衝撃が走った。江戸にあった頼永は、国家非常時のこのときをかねてから考えていた藩政改革のよき機会だとして赤羽藩邸に二本榎や高輪の下屋敷の在府の家臣を集めると「御勝手向改革」を宣言して、江戸藩邸から改革を始めた。

大倹約令実施を五ヵ年と目標を示し、まず、自ら木綿の着物で奥女中は２４人から１５人に減らし、表台所を廃止して奥女中に食事の支度を命じ、食事は一汁一菜として夫人や弟妹達と一緒にとった。家臣と自らは木綿服としたが６０歳以上のものには絹服を許した。財政再建のための大倹約といっても、「節用愛人」をかかげ、新たな上米など家臣の家禄には手をつけず、領民への酷税もしなかった。無駄を省き不要な出費を抑え、贅沢禁止・倹約実践としただけだった。

この江戸藩邸の理のかなった倹約令は国許にも伝わり、藩士だけでなく領民も感じ入り、倹約に努めた。新藩主の襲封に当たっては幕府に助役金を上納するのが慣例で、その上納金は領民から取り立てていたが、頼永は前代まで打ち続いた酷税に疲弊した領民を思いやり、表向きの経費や藩邸の冗費を削ってこれに当てた。これを知った領民は感泣し、申し訳ないので一生懸命倹約して献納に努めたいと申し出た。頼永は「左様の余力があるなら、周りの貧者を救助せよ。尚余力があるなら蓄えおけ」といって受納しなかった。

米１０００俵の献納を申し出た三潴郡夜明け村の大庄屋河原孫兵衛は、頼永の意思に沿って貧者を救い、余った６５０俵の米を「お救い米」として非常時のために蓄えたが、後年、これが８万俵にもなって貧者を救う事になった。

久留米藩の財政不足は江戸や大坂の借銀で賄い、その返済の為に領民に酷税を強いる繰り返しだったが、頼永はこの積弊を断ち切ることを考えた。

まず、経済に巧みな北川外波を登用して、その献策により、弘化２年、１１月２日、５ヵ年負債借据を布告し、大坂の両替商及び領内の商人たちと折衝させた。この５ヵ年の間は新たな借銀を禁じ、歳出歳入を厳格にしたので、早くも２年後には収支が均衡するし、藩経営の健全化が図られた。こののち、米に頼らない殖産振興に道を拓き、新たな財源を

確保して、久留米藩が２２３年間もなしえなかった財政改革を成功させ久留米藩再興の祖となった。

一方、外国船の襲来を受け動揺する国内にあって、「大名の職分は天下の藩屏なれば国政を修め武備を固くして将軍家の指揮を奉じて皇室の守護たることを寸刻もわすれべからず」として武備の強化を図った。

これからの戦争は鉄砲が中心になると見て、島田丹右衛門・淡河正範・山田猶三郎に兵制改革を命じ、吉見次郎・吉村多門を幕府西洋砲術師範下曽根金三郎に入門させた。

さらに、江戸で鉄砲鍛冶を雇い入れ、ホイッスル砲・モルチール砲などの洋式大砲を製造し、城内に鉄砲鋳造所を設け、富国強兵化を急いだ。

激動する国内政治事情に加え、その震源となる国際事情収集のために専任の「長崎聞き役」をもうけ戸田乾吉をあてた。

頼永の治世に禍根を残した天保学連

久留米藩は毎年年頭には、上杉謙信の肖像・越後流秘伝の兵書・真の一字の三軸を掲げこれを前に藩主一同拝していたが、頼永はこれを廃して、まず伊勢神宮を拝し、次に祖宗を拝するように変えた。武家にあっては上杉謙信より、南朝の功臣・楠正成や菊池武光を信望するほど尊王の心が厚かった。

幕内にあっても、水戸藩の徳川斉昭に可愛がられ、水戸学の影響があった。しかし、これらが後に久留米藩に３０年にわたる災いをもたらし、久留米藩が潰れる原因となるとは想いもよらなかった。

「久留米市史」は、頼永の急死は「久留米藩が維新運動の渦中に乗り出すに当たって、大きな痛手となった。頼永の死を境に大きく動揺し、やがて分裂・内部抗争という悲劇の渦に巻き込まれてしまうのである。このことは同時に久留米藩が維新運動のバスに乗り遅れ、２１万石の大藩が、薩長土肥のはるか後塵を拝せざるを得なくなる結果を生んだ」と惜しんでいる。

頼永が登用し、常にそばに置いた若手に野崎平八・今井栄・村上守太郎があった。そのうちの一人、村上守太郎は幼い頃から神童と呼ばれ、藩命によって昌平黌に学んだ秀才で、１８才で「政論」１０巻を著し藩政についての献策が多かった。

彼は天保１３年（１８４３）、水戸に遊学して会沢正志斎に師事して水戸学を学んだ。水戸学については、先達に木村三郎がいて、この二人の話を聞いて、後に会沢の「新論」を読んで共鳴した水天宮の神官真木和泉もまた、水戸に行き会沢の教えを受けた。三人とも時を同じくして天保の年代に水戸学を学んだことから「天保学」と呼ばれるようになり、彼らの影響を受けたものたちを天保学連と呼ぶようになった。

水戸学は封建を尊び、君臣の秩序を重視するあまり、徳川将軍も天皇から拝命を受けた征夷大将軍という位階でしかなく、君臣の頂点は将軍ではなく天皇であるとした学問である。国家権力の頂点である将軍を否定した水戸学は、封建制の下層階級である下級武士や陪臣・郷士や浪人、農町民などの不平不満分子にあっという間に広がった。そしてその天皇が今日不遇にあるのは、その昔悪臣が取り入れた邪教の仏教思想の所為であり、天皇を政権から追い払った幕府であるという思想が蔓延した。とくに天保１２年、アヘン戦争で巨大な清が英国艦隊に敗れ開国を余儀なくされたことは、それまでの異国船打払い令では鎖国の維持は不可能なことが露見し国内が動揺、更に欧米各国の開国要求に憤激して過激な攘夷思想が高まっていった。しかも、幕府は文化文政に続いた将軍家斉の放漫経済のつけで財政は破綻状態であり、くわえて天保年間は天候不順が相次ぎ、全国的に飢饉が発生していた。頼みの米は積年の苛税で立ち行かなくなった潰れ百姓が続出し、耕作するものがないままに田畑はあれ、年貢の徴収さえ儘ならない事態で社会は一触即発の状態だった。

幕府だけでなく諸藩の経済は、農民を搾取するだけの「勧農抑商策」が完全に行き詰まりを見せ、あらたな「殖産興業策」への革命的な転換が迫られていた。この政策転換は、今までの世襲の門閥ではなしえなかった。諸藩で改革が委ねられたのは有能な中・下級の者達だった。

一方、幕府の建て直しを図ったのは「天保の改革」を行った老中水忠邦だったが、相も変らぬ「勧農抑商」と諸事倹約策ではこの非常事態を切り抜けることは出来なかった。水野の改革は、賛同を得られず混乱を招いたばかりで、僅か二年で頓挫した。

久留米でも村上をはじめ天保学連が藩政幹部に登用され、一気に改革機運が高まったが、幹部になった村上らの改革の動きは慎重で、真木ら急進改革派との乖離が大きくなっていった。

真木和泉ら外同志と内同士の三十年にわたる対立（天保学連の内部抗争）

藩政革新に新風を吹き込んだ頼永だったが、持病を抱えていた。

その頼永に起用され、常に君側にあって、野崎平八、今井栄とともに頼永の大業を補佐した村上守太郎は、真木和泉・木村三郎らと同じく水戸学派で、俗に天保学派と呼ばれた仲間であった。守太郎が頼永の君側に起用されると、和泉以下の天保学同志は、守太郎に大いに期待した。

ところが、為政者としての守太郎の慎重さは、事を急ぐ和泉や木村三郎にはあきたらず、いつしか両者間に間隙が生じ、天保学党は和泉・木村一派と村上派の二派閥形成の様相を現してきた。そしてその分派を決定的にさせたのは、村上と野崎が不用意にも洩らした富之丞擁立の継嗣問題であった。

それは頼永の病気が篤くなった弘化３年７月のことである。主君の生命を心配した村上守太郎は、同月２５日の夜、自宅に和泉・木村三郎・不破孫一・野崎平八・今井栄らを招いて、名医招聘の議を相談した。議終わって酒となり、酔った村上守太郎と野崎平八は人より離れた縁側に座り込んだ。そして、

「もし殿が亡くなられると順位からすると孝五郎君が御家督相続されるのが当然だが、御末弟の富之丞君は、器量・識見たいしたもので名君の器である。でもまだ八歳であるから、一時孝五郎を領主に仰ぎ、富之丞君が十五歳になられたら、先君の遺命といって富之丞君に家督を譲られるようにしたいものだ」

と、ひそかに話した。これをふと耳にした和泉は、

「かかる席で廃立のことなど議するのは、僭上極まることである。守太郎・平八は、これから共にすべき人ではない」

と、木村三郎に語り、これから両派は完全に断絶した。

これ以降、和泉たちは藩幹部の村上らと袂を分かち、同じ天保学連ながら村上らを内同志と呼び、真木らを外同士と呼んで、両者の争いはその後３０年に及ぶものになった。

弘化３年（１８４６）７月３日、頼永は惜しまれながら僅か２５歳で没した。

この年 9 月孝明天皇が即位、幕府に対して海防の任を厳しくするようご沙汰があったことを知って、真木は「天皇に“王政再興”の意思があることを推断して、半生を“聖王中興に捧げることを決心した」のだという。

頼永の跡を継いだのは凡庸な孝五郎（頼咸よりしげ）だった。頼咸は兄の遺り残した事業を受け継ぎ、内同志もそのまま近侍として仕えた。ところが、嘉永３年（１８５０）６月１４日、江戸藩邸において、村上が参政馬渕貢に刃傷におよび、居合わせた家老有馬主膳・有馬飛騨に惨殺されるという事件が起きた。

これは富之丞擁立のささめ言を、和泉・木村三郎が馬渕貢に告げたので、村上守太郎はその露見を恐れて、馬渕の口を閉ざすための凶行とも言われている。

この刃傷沙汰で内同志は藩主の近侍から避けられた。和泉ら外同志は、今度は「われらの出番」と張り切ったが、半年後には、内同志が再び登用され、外同士の焦慮は深まった。

そして先述した「嘉永の大獄」で真木和泉の幽因へとつながる事件となったのである。

家老脇の稲次因幡正訓が、有馬頼咸に讒言し、内同志を引きずりおろす作戦に出たのである。

嘉永５年、富之丞は１４歳になった。このとき村上は亡き人となっていたが、７年前の富之丞擁立の不安は、真木党に残っていた。真木党はこの不安を断ち切るとともに藩政改革を行おうとした。家老脇の稲次因幡正訓は、二回にかわって登城し、藩主頼咸に直接讒

言したのである。
　結果は先に述べたとおりであるが、その結果、真木和泉は水田村に蟄居、その他１５名が刑に服することになった。そして富之丞君は、文久元年１０月２１日に川越藩主松平氏の養子となり、後嗣問題は終止符が打たれた。

　このように、幕末の久留米藩体制は動揺を続けた。その発端は水戸学だった。藩政統一に向う学問のつもりが、藩を割ることになったのである。
　水戸学はその後藩主の思惑を超えて討幕へ進んで藩政を危うくした。天保学連は藩政改革をめぐって対立し、３０年にわたる不毛な争いで人材を蕩尽しただけでなく、廃藩置県をまたず久留米藩崩壊の要因となった。

有馬河内（監物）

（名は昌長、主悦・山和・兵庫･後に河内、監物と改める。字は君寿。郷は蔵焉。)文政４年(１８２１）４月の生まれ。
　国老有馬織部(照長）の長子で、、国老有馬泰賢(嘉永３年６月没）と河内の父有馬照長(嘉永４年７月没）のあと、天保１０年９月、１８歳の時から藩政に与り、久留米藩の実質的指導者として、幕末２０余年間の困難な藩政を執った。
　有馬河内（監物）は当初尊王攘夷を目指したが、今井栄に啓蒙され、のちの有馬河内（監物）政権としては、公武合体・開国主義で、富国強兵を目的とし、前藩主頼永を輔佐。村上守太郎・野崎平八・今井栄、有馬豊前・不破美作等と共に進歩的政策を押し進めたが、尊王攘夷主義の真木党と激突を繰り返した。

不破孫一

　文政元年（１８１８）出生、不破美作の兄で天保１５年９月参政となる。頼永が襲封すると窮乏の際にあった藩財政の立て直しを断行した。量入為出（収入を量って支出を為す）の根本政策を立て、大検令とともに大坂の商人及び藩内の豪商農よりの借入金を５ヵ年借居（かりすえ）を断行し、立派に財政整理をなし、余剰金さえ生じさせた。
　慶頼（頼咸）の時代に嘉永の大獄により閉門となるが、稲次因幡や真木和泉守らの陰謀であるということで公務に復帰したが、安政２年の大地震に遭い江戸で圧死する。

不破美作（ふわみまさか）

美作の名は藩主頼咸より才知特に人（？）に優れているから美作と名乗れということで貰った名前だそうである。孫一の死後参政となり、今井栄、松崎誠蔵らと徹底した富国強兵策を採り、開成方を設けて殖産興業、物産輸出の道を開き汽船を購入して久留米藩新海軍の基礎を作り開化的事業を遂行した。真木党（攘夷勤皇派）の者はこの政策に大いに反発し、慶応３年王政復古の後も、美作は親幕政策をとり、これが攘夷派の反感をかって翌年の正月２６日要撃されて殺害された。襲撃したのは真木党（攘夷勤皇派）の佐々金平、小河真文を中心とする青年志士であった。

今井栄

幕末、尊王か佐幕か、或いは攘夷か開国か、日本が大きく揺れ動いていた時期、開国主義を採り、薩摩・長州といった西南雄藩に次ぐ海軍力を持ったのが久留米藩であった。その指揮を執ったのが今井栄である。今井栄は文政５年（１８２２）、久留米藩江戸詰御用人の子として生まれた。江戸で育った彼は、やがて勝海舟などの開明派の人々と交わって大きな影響を受ける。文久３年８月１８日の政変で、尊王攘夷派公卿と長州藩が公武合体派の薩摩・会津藩などから追放されると、久留米藩ではそれまで尊王攘夷か公武合体かで揺れ動いていた藩の方針を公武合体に定める。この時、藩の方向付けのために指名されたのが開明派今井栄で、文久３年の末、久留米に戻り改革に当たることになった。

今井の改革は西洋の文化や技術を導入して富国強兵を図るというものであった。その資金を得るための経済政策として、特産の茶や和紙、蝋などの殖産興業の活性化と拡大を図る。この改革は成功し、久留米藩は薩摩・長州・肥前といった西南雄藩に次ぐ海軍力を持つようになったのである。

このころ、本稿のもう一人の主人公である田中久重が、今井栄の下で働いていた。これについては後述する。

蟄居中、和泉は討幕思想を固める

水田に移って一年の間はほとんど一室に独居して読書に親しみ謹慎の意を表していたが、嘉永６年（１８５３）ペリーの浦賀来航を聞いて後はひそかに庵を出て知己友人のもとに出向いている。はやくして藩政改革に関係し、水戸に遊んで全日本的な変革期の空気に一旦触れた彼は、ペリー来航以後の時局の展開に歯軋りしていたのかもしれない。

この間にあって水田の小天地に釘付けされた和泉にかわり、その耳目となり手足となっ

て諸国を歩き、情報蒐集につとめ、これを和泉にもたらしのは弟外記と和泉の子主馬であり、また従学していた弟子達であった。彼らによってもたらされた事実を記録したものが今日水天宮に所蔵される「異聞漫録」である。和泉はいながらにして国内・外を巡る諸情勢を把握することができていたのである。

幽閉されてもかれはへこまなかった。逆に、「急務策三条」「国体策」「天命論」あるいは「経緯愚説」「義挙三策」などの書で、明らかに、

「討幕挙兵」

を促す激を飛ばし続けた。

さらに、討幕に関する書として「大夢記」があるが、「大夢記」の趣旨は、「天皇自ら幕府親政の兵をあげて東征の途にのぼり、箱根において幕吏を問責し、大老以下に切腹を命し、幼将軍（家茂）を甲駿の地に移し、親王を安東大将軍として江戸城に居らしめ、大いに更始の政を行う」というものである。

山梔窩。筑後市大字水田２４２－１
和泉は１１年間ここに蟄居した。

四、ペリー来航前後

真木和泉が水田に蟄居し始めた翌年の出来事であるが、ペリー来航という一大事件が発生し、これを境に幕末の日本は揺れに揺れた。蟄居中とはいえ情報網を活かし絶えず外界の動きに気を配っていた和泉は、ペリー事件に対するその後の幕府の処理の仕方に内面怒りと焦燥感で煮えたぎった。そして、藩からの許しを今か今かと、一日千秋の思いで待つこと１０年、精神的な苦痛も加わり、１１年目にとうとう我慢できなくなり暴発、脱走（脱藩）することになる。

攘夷か開国か

黒船来航から和親条約にいたる日本開国の過程は、それなりに目配りの利いた老中阿倍正弘の老練な政治指導のもとで、概して無難に執り行われた。ところが世の攘夷風潮に加えて、阿倍急死（安政４年６月）後の幕閣が、軽率にも冬眠中の朝廷（天皇）という厄介な妖怪を目覚めさせたので、日本の政情は一気に激動期に入ることになる。

開国によって日本社会に直接触れるようになった欧米人は、日本経済の実態が彼らの予想以上に発達しているのを知り、大きな利潤が期待できる対日通商開始を切望した。アメリカ合衆国から派遣された総領事ハリスは、和親条約を通商条約へ格上げしたいと熱心に幕府に働きかけた。幕府の対応も前向きだった。

このような動きは、攘夷派の反感を刺激した。開国まで日本人の大部分は井の中の蛙で、長年の徳川幕府秩序下で日本列島内完結の自給自足経済に安住していたから、総じて対外問題には関心が薄く知識も乏しかった。大方の一般庶民の感覚では、異国人は招かれざる侵入者で平穏な日常生活を外部からかき乱そうとするやからに他ならず、ゆえに開国には不安を感じて歓迎しなかった。社会全般を覆うこのような閉鎖的雰囲気は、勿論武士層にも共有され、彼らの間でも排他的な攘夷論が優勢だった。もっとも攘夷派といえども、和親条約の域までは止むを得ないと観念するものもいたが、通商は外夷の侵略手段だとの先入観が浸透していたから、通商条約にまで深入りするのには強い拒否反応を示した。

尊王敬幕論

世に猛威を振るっている通商条約反対論の中心人物は、御三家水戸の前藩主徳川斉昭だった。斉昭は、家柄が高い上に歯切れのいい海防論や攘夷論で、全国の攘夷派から熱烈な信望を寄せられていた。彼は、外夷と通商すれば先方の無用なぜいたく品を売りつけられ日本の有用な品物を持ち去られると論じ、通商条約に猛反対した。

斉昭が高貴な御三家ご隠居だけに、老中堀田正睦ら幕閣は、その頑固な通商条約拒絶意見をもてあまし、つい禁じ手への誘惑に負けてしまった。つまり京都の天皇に条約締結の承認（勅許）を願い出て、朝廷権威を借りて斉昭の口を封じようと計ったのである。しかし、この姑息な企ては結果的に大失敗であり、幕府の命取りへの道を開いた。

幕閣が勅許さえあれば斉昭を説伏出来ると信じたのは、徳川将軍家による日本国統治を合理化する根本教義が「尊王敬幕論」だったからである。

そもそも徳川家康は、実力で天下人の座を手に入れたにも関わらず、自ら日本国皇帝とか国王を名乗ることなく、天皇から征夷大将軍に任じられて国政を白紙委任されたとの擬制で、日本国を統治し政権を世襲した。すなわち自前の正統性を作り出す代わりに借り物で間にあわせたわけである。このやり方が武家政権の伝統であり、政治権力の維持に不可欠な正当性の入手のために必須は手続きとされてきた。

なぜならば、京都の一隅に細々と命脈を保っていた朝廷（天皇の政庁）は、とっくの昔に国家統治の実権を失っていたにもかかわらず、なお天皇は天祖（天照大神）の子孫（万世一系）と仰がれ、神話的・宗教的な伝統的特殊権威の持ち主として世間から崇敬されてきた。この特殊権威の借用（つまり白紙委任）が、現世政権の正統性獲得の決め手と見做されたのである。ゆえに天皇制は、歴代政権の治乱興亡の荒波をかいくぐって生き延びてきた。

江戸幕府は、天皇特殊権威の独占を図り、天皇と公卿（古代貴族の子孫）の生活を保障しつつも実社会から隔離したが、表面的には朝廷尊崇（尊王）の姿勢を示した。つまり尊い天皇から国政を白紙委任されたのだから将軍もまた尊いという理屈でもって、徳川将軍家の国家支配を権威付けようとしたわけである。これを理論化したのが水戸学の「尊王敬幕」論であり、江戸幕府の公認イデオロギーであった。

この尊王敬幕論方式は、朝廷が幕府の統制下に繋ぎとめられている限りはすこぶる有効だが、もし統制から逸脱すれば逆効果を生じ、幕府の命取りに転化する危険性をはらんでいた。つまり幕府統治には時限爆弾が構造的に組み込まれていたのである。

条約勅許問題

幕閣は、尊王敬幕論の効力から見て、条約勅許の既成事実を作りさえすれば、水戸学本家本元で尊王心に篤い斉昭は通商条約反対論を引っ込めてくれるはずだと楽観視した。ところが斉昭に先手を打たれ、幕閣はかえって窮地に追い込まれたのである。水戸家と公家最高位（摂家）鷹司家とは縁戚関係にあり、斉昭はこの伝手を辿って孝明天皇周辺に通商条約反対論を吹き込んだ。天皇や公家は、長年にわたって実社会から隔離されてきたので世情に暗く、容易に斉昭の主張に取り込まれた。なかんずく孝明天皇は、朕の代に国を外夷に汚されては高祖に対して相済まないと思い詰め、攘夷の信念に凝り固まった。

迂闊にもそうとは気づかなかった幕閣が、朝廷に通商条約締結勅許を申請したところ、意外にも断られて慌てた。元々条約締結は国政白紙委任の範囲内であるはずだから、勿論勅許など不要だった。にもかかわらず幕閣は、斉昭の反対論をかわそうとの不純な動機で余計な勅許を申請して失敗し、藪をつついて蛇を出してしまったのである。ここであっさり手を引いておけばよかったものを、いまさら引っ込みがつかないとあせった幕閣は、愚策にも天皇周辺に金銭をばら撒いて買収をはかり、かえって孝明天皇を頑なにしたしまった。

攘夷派はこの有様を見て、雲の上の天皇の現実的利用価値を発見した。勅許拒否を手段に用いれば、通商条約を阻止できると計算したのである。そこで志士（尊攘浪士）と呼ばれる活動家連中は、京都に馳せのぼり、朝廷内外で盛んに条約勅許反対の政治工作を繰り広げた。これを「京都手入れ」という。

他方では、攘夷を望む天皇の意思を尊重することこそ尊王だと気勢をあげ、世論を煽った。ここに「攘夷論」と「尊王論」とが実践的に結合し、強烈なイデオロギー的伝染力を帯びた「尊王攘夷論」（尊攘論）と化した。尊攘論の流行は、開国後の不安な社会心理の蔓延とあいまって、各地に狂信的な追随者を異常繁殖させた。

このような状況を背景にして、条約成立には勅許が不可欠であるかのような錯覚乃至共同幻想が政界に広がり、元々尊王敬幕論に染まっていた幕府や諸大名もこの異様な雰囲気に巻き込まれた。かくて九重の帳の奥深く鎮座していた天皇は、否応なしに現実政治の場に引き出されたのである。

将軍継嗣問題

天皇の政治化現象は、同時並行的に展開した将軍後嗣問題と相互に作用しあっていっそう進行した。開国後の幕政現場には、条約の適用や解釈、外国使臣の受け入れ、外貨の取り扱いなど、これまでの前例シキタリでは処理しきれない新規の課題が押し寄せた。最終的には将軍の裁断を必要とする案件も少なくなかったが、将軍徳川家定は病弱（篤姫が御台所）でその任に十分に応えられず、また嗣子もなかった。そこで後嗣を早く迎えて将軍を補佐させるべきだとの声が高まった。

将軍の地位は、血統優先の世襲である。後嗣候補には、家定との血縁が最も近い従兄弟の御三家紀伊藩主徳川慶福（よしとみ）が最有力だった。平時であれば慶福にすんなり決まっただろう。伝統に従って慶福に決めよと唱えたのは、譜代大名筆頭の彦根藩主井伊直弼（なおすけ）らだった。

ところが、開国という非常事態には年少１２才の慶福では心もとない。特例だが御三卿一橋慶喜が望ましいとの声が上がった。彼は徳川斉昭の実子で一橋家の養子に入り、２１才で英明という評判だった。慶喜擁立論を主導したのは、越前福井藩主松平慶永（春嶽）で、御三卿田安家に生まれ家門筆頭越前松平家を継いだ徳川一門の有力者だった。慶永に

は開明派外様大名の薩摩藩主島津斉彬や伊予宇和島藩主伊達宗城らいわゆる有志大名が共鳴し、川路聖謨や岩瀬忠震ら気鋭の開明派幕使も同調した。彼らは一橋派と呼ばれて紀伊派と張り合った。

紀伊・一橋両派のつば競り合いは激しくなったが、一橋派に好意的だった老中阿倍正弘が安政４（１８５７）年６月に急死し、一橋派は劣勢に追い込まれた。形勢挽回にあせった一橋派は、「京都手入れ」の非常手段に走った。おぼれるものは藁をもつかむの心境で、条約勅許一件でにわかに浮かびあがってきた天皇の不思議な政治的影響力を利用しようと図ったのである。

橋本佐内や斉彬の片腕となって活躍していた薩摩藩士西郷隆盛らは、こもごも京都に潜行して朝廷関係者に働きかけ、将軍継嗣には一橋が望ましいという天皇の意思表示を引き出そうと暗躍した。

紀伊派も負けじとばかり対抗政治工作を展開した。両派の綱引きによって、浮世離れしていた天皇が帯び始めた現実政治的価値はいよいよ急騰した。いまや天皇の意向は、条約成否の鍵であるばかりでなく、もともとは徳川家の私事である将軍後継者の人選をも左右するかのような錯覚ないし共同幻想がいっそう濃厚になった。

開国後の難局に揺さぶられた幕府は、条約勅許申請という余計な大失策をやらかし、それに将軍継嗣問題が絡まって、冬眠していた朝廷という厄介な妖怪を呼びさましてしまったのである。それとともに政情は複雑化し、幕府の国家統治力は衰弱の途を辿り始めた。

通商条約締結

条約勅許問題と将軍継嗣問題はこんがらがっていよいよ面倒になった。幕政は混迷し、もはや打開には将軍じきじきの裁断を待つほかはなかったが、無論家定には期待できなかった。かくては大老をおくべきだとの声が高まった。大老は幕府官僚制の最高位で平素は欠員、特別非常事態に限って臨時に任命され、老中の上席にあって幕政の最高権限を行使する役職で、家格の高い譜代大名から選任される慣例になっていた。安政５（１８５７）年４月、家定は彦根藩主井伊直弼を大老に任命した。

井伊は期するところがあったようである。まず勅許なしで通商条約締結に踏み切った。同年６月１９日、日米修好通商条約・貿易章程が結ばれ、和親条約後４ヵ年にしてついに日本政府は自由貿易の原則を受け入れて、神奈川・長崎・函館・兵庫・新潟の順次開港と江戸・大坂への商用日帰り立ち入り許可を約束した。また相互に外交使臣を交換し公館を置くことも取り決められた。ただし領事裁判権と協定関税率の二点において日本側に不利ないわゆる不平等条項もあり、その部分では将来に課題を残した。

続けて７月１０日にはオランダと、翌１１日にはロシアと、１８日にはイギリスと、そして９月３にはフランスと、それぞれほぼ同様の通商条約が結ばれた。これらを「安政五

カ国条約」と総称する。ここで日本市場は欧米主要国に解放されて資本主義世界市場の一環に組み込まれるとともに、国際法制面では日本国は条約ネットワークである近代国際社会に全面的に参入する運びとなり、かくて開国は基本的に完成したのである。

井伊大老暗殺

通商条約が締結されるや、尊攘派は激怒して大老が専横だと攻撃し、無勅許締結は「違勅」だから通商条約は無効だと主張、孝明天皇は抗議の譲位さえほのめかしたが、所詮は負け犬の遠吠えだった。

井伊はひるまなかった。条約締結直後の安政５（１８５８）６月２５日、家定将軍の意思として紀伊藩主徳川慶福が将軍世子に決定した旨を公表した。家定は既に重病の床にあり、７月６日に３５才で没した。やがて慶福（よしとみ）は第十四代将軍徳川家茂（いえもち）となる。井伊の勇断で通商条約と将軍継嗣の二大懸案は片付いた。いまや井伊大老を軸に据えて、幕政は軌道を取り戻すかに見えた。

この継嗣決定に一橋派が憤慨したのは言うまでもない。ここにおいて対外方針では水と油だった尊攘派と一橋派との間に、反井伊の奇妙な共闘関係が成立した。同年８月、彼らは攘夷派公家に手を回して井伊弾劾の密勅をつくらせ、その勅諚（ちょくじょう下記注）を幕府の頭越しに水戸藩に降下させて井伊を失脚に追いこもうと画策した。これに対して井伊は、朝幕間の秩序を乱す不法行為と怒って関係者の摘発に乗り出した。「安政の大獄」の始まりである。そして、水戸藩に勅諚を返納せよと圧力をかけ、勅諚工作に関わった水戸藩家老安島帯刀以下を死罪に処した。ところが井伊はやりすぎて一橋派と尊攘派の見境なく処罰の範囲を広げ、橋本佐内や長州藩士吉田松陰らまで処刑して不用意に敵を増やしてしまった。

（注）

水戸藩の危機は安政の日米修好通商条約の締結が実施され斉昭以下攘夷論の大名達が江戸城に押し掛け時の井伊大老を詰問の結果斉昭は永蟄居、十代藩主慶篤差控、一橋慶喜隠居謹慎、江戸家老安島帯刀切腹となった。同じ時期水戸藩に対し戊午の密勅(勅諚)が降りる。

本来朝廷からの勅諚は幕府を通じて降りるものだが、この時は水戸藩に正、幕府に副の勅諚となり更に水戸藩に１日早く降りた為、世情は騒然となり幕府から水戸藩に返却する様強力な申し入れが行われた。

当然水戸藩は二つに割れ更に改革派も激派と穏健派に分かれ激派は水戸の入口、長岡に関所を設け勅諚が持ち出されないよう非常線が張られた。この時期江戸表では安政の大獄が井伊直弼によって行われ日本国中大争乱となった。

この時点で改革激派に対し藩主及び斉昭から改革穏健派及・藩士・弘道館学

生(後に諸生派という)に対し激派追討令が出た。この穏健派の指導者が後の天狗党総師武田正生(耕雲斉)であった。激派は逃亡し彼等が後の桜田門外の変等一連の数々の事件を起こしてゆく。

水戸藩の政治情勢はこれによって改革派から門閥派に変わったが改革派の一部、藤田小四郎、郷校を中心とした勢力が現在の石岡市を中心に潜行し筑波山に集い天狗党の旗揚げとなった。これには長州桂小五郎と藤田小四郎の密約が存在し桂小五郎も現在の水郷地帯から水戸に入り５００両の資金提供もしている。以上が水戸藩を中心とした政治情勢だが水戸藩の争いは郷校を中心とした武士、農民その他全ての領民の争いとなり其々の政権の時、反対に回った領民は住む所も無い骨肉の争いとなっていた事に大きな特徴が有る。天狗党・諸生党共各地の戦いに家族を連れての戦いで家族が残った場合は投獄、斬首と断罪され実に悲惨な結果となっている。諸生党が新政府軍と戦った新潟灰詰の戦場から昭和２０年以降でも２名の女子の遺体が見つかっているし、天狗党の通過点，下仁田では３０名程の女子が確認され敦賀の降伏の時確認された女子は１名のみであった。

この水戸藩の戦いで戦死した氏名は約２０００名、その他確認出来ない員数は少なくとも１０００名以上と推察されるが如何に大きな内部抗争で有ったかがわかる。

橋本左内

越前国に生まれる。嘉永２年（１８４９）、大坂に出て適塾で医者の緒方洪庵・杉田成卿に師事し蘭方医学を学んだ後、水戸藩の藤田東湖・薩摩藩の西郷隆盛（吉之助）と交遊。他に梅田雲浜や横井小楠らと交流する。越前・福井藩主の松平春嶽（慶永）に側近として登用され、藩医や藩校・明道館学監心得となる。

安政４年（１８５７）以降、由利公正らと幕政改革に参加。１４代将軍を巡る安政の将軍継嗣問題では春嶽を助け、一橋慶喜（徳川慶喜）擁立運動を展開した。幕政改革、幕藩体制は維持した上での西欧の先進技術の導入、日本とロシアの提携の必要性を説くなど開国派の思想を持ち、攘夷で揺れる幕末期では危険人物とされた。

安政６年（１８５９）、春嶽が隠居謹慎処分に命ぜられた後、南紀派で大老となった井伊直弼の画策により将軍継嗣問題に介入した事が問われ小塚原刑場にて斬首。（安政の大獄）享年２６。

反動は反動を呼び起こした。安政７（１８６０）年は３月に改元されて万延元年となったが、３月３日、江戸城桜田門の前を登城中の井伊大老の行列に１０数名の刺客が切り込み、井伊を暗殺した。凶行に及んだのは尊攘派水戸浪士を中心とし、薩摩藩士１名が加わ

っていた。井伊は大老在位２年弱だった。

この桜田門事変は、嘉永６年（１８５３）初夏のペリーとプチャーチンの来航から慶応４年（１８６６）４月の江戸開城＝徳川政権閉幕まで満５年間にわたる幕末政治史において時間的にもちょうど中間点にあたるが、ここで国政状況が大きく転換した分水嶺だった。

それまでは幕府が曲がりなりにも国政指導力を保持して日本国の開国＝国際社会参入の過程を取り仕切ってきた。しかし桜田門事変以後は、国政の中心軸がねじれて朝廷・幕府・諸藩間の権力秩序とバランスが崩れ、国政指導力の真の所在があいまいになったので、以後の日本政情は国家統治権の所在確認、さらには争奪を巡って大揺れに揺れることになる。

攘夷実行の約束

大黒柱の井伊大老を思いがけず失って狼狽した幕閣は、度を越して萎縮し、尊王論の威力を過大視した。老中安藤信睦・久世広周は、姑息にも新将軍徳川家茂と孝明天皇の妹和宮との政略結婚で急場をしのごうと策した。朝廷の権威を借りて尊攘派の鋭鋒をやわらげようとの浅知恵である。当初孝明天皇は和宮降嫁承認を渋っていたが、側近岩倉具視の入れ知恵で、早急に条約を破棄して鎖国に戻せ、外交に限らず重要政務は朝廷に奏聞せよ、との条件付で承認することにした。

この条件は幕府の存在理由である国政白紙委任の原理に抵触し、幕府としては到底受け入れられないはずのものであった。ところが目先の政略結婚実現をあせった幕閣は、致命的な失策を犯し、今後７－８年ないし１０年以内に攘夷を実行すると天皇に約束した。それは事実上実行不能であり、幕府に重い足かせを嵌めたが、皮肉なことに期限の１０年後をまたずに当の幕府は消滅したのである。

雄藩登場

幕府が天皇に攘夷実行と重要国事奏聞を約束したので、いまや幕府に対する朝廷の政治的優位はあきらかとなった。かくて京都の朝廷は、江戸の幕府と並立するもう一つの国政核の観を呈するにいたった。いわば国家権力の二元化現象であり、強大な外圧を前にしてのこの異常な危機状況は、新顔の政治主体＝雄藩の登場を刺激した。幕府官僚制の枠外におかれていた外様大藩の中から、藩政改革などで実力を蓄えた「雄藩」が現れたのである。

雄藩が中央政界に進出する手がかりとなったのは、京都の朝廷だった。文久元年（１８６１）に長州藩士長井雅楽が朝廷・幕府間調整を試みたのが雄藩登場の皮切りだった。それに促されたのか、薩摩藩主茂久（藩主就任時忠義ただよし、のち茂久）の実父島津久光（以前はただゆき）が翌文久２年の春に軍勢１０００人を率いて京都へ向った。前藩主島津斉彬は安政５年（１８５８）７月１６日に急死し（５０才）、弟久光の長子茂久が後を継いだが、藩政の実権は久光が握った。

亡兄斉彬の遺志を継ぐと称した久光は、朝廷権威を利用して一橋派を復活させようと志し、参勤交代名代の名目で軍勢を率いて京都に入った。衰勢の幕府は薩摩藩の強引な実力行使を阻止できなかった。久光は朝廷に圧力をかけて、一橋慶喜を将軍後見職に、松平慶永を政事総裁職（大老相当）に登用せよと幕府に命令する勅書を引き出し、勅使を擁して江戸に乗り込んだ。国政運営の自信喪失気味の幕閣は、やむなくこの勅命を受け入れた。

ここに勅命の形をとりながら、実際には外様藩の意向で幕府最高人事が動くという幕藩体制下前代見聞の異常事が出現したのである。公儀としての幕府の面子は地に堕ちた。久光は、主観的には一橋派を復活させて幕政改革強化に資したつもりだったが、実際は逆効果で幕府権力の衰退を促進した。そうとも気づかずに意気揚々と京都へ引き返す久光一行の行列が東海道生麦村に差し掛かったとき、路上で接触した乗馬のイギリス人を無礼打ちした。この事件は翌年の薩英戦争につながる。

薩摩藩の成功は、ライバル長州藩を刺激した。目の前で繰り広げられた薩摩藩の行動は、勅命なるものが幕府に対して信じられないほどの威力を発揮する実物見本だった。そこで長州藩は、勅命の私物化を図って尊攘論に急転向し、孝明天皇に迎合して即時攘夷＝条約破棄の極論を高唱、公家社会の支持を集め、志士連中の人気をさらった。新入りの土佐藩も追随したので、尊攘派の勢いは一気に燃え上がり、逆に開国論の薩摩藩は影が薄くなった。尊攘派はテロの威嚇で天皇周辺から穏健派を排除して過激な同志公家で固め、朝議を自由に操って手前勝手な勅命を乱発できる体制にした。そして幕府にたいして、無理難題な勅命を突きつけた。幕府新首脳の慶喜と慶永には、久光が持ちこんだ命のお陰で復権できた弱みがあったから、内容の如何を問わずに勅命なるものを尊重せざるを得ない立場であり、ゆえに無茶な攘夷勅命にも抵抗できなかった。朝廷の発言力はますます上昇し、幕府の統治力はますます低下した。

文久３年（１８６３）３月、上洛した将軍徳川家茂（いえもち、以前は慶福よしとみ）は、朝廷から攘夷期日の決定を問い詰められ、苦し紛れに同年５月１０日より実行すると答えてしまった。誠に無責任な話で、国家統治者としての自覚と見識はどこかに置き忘れてしまったかのようだった。かくて幕府はますます窮地に追いこめられ、一方で尊攘派の勢威はますます高揚した。

攘夷期日の５月１０日になると、関門海峡に面した長州藩砲台は、通航中のアメリカ商船をいきなり砲撃して遁走させ、攘夷先鋒の気勢をあげた。さらに外国船砲撃を続けたが、６月早々、報復に来襲したアメリカ艦さらにフランス艦の猛攻で下関の砲台を破壊され、藩艦を撃沈された。大損害を被った長州藩は、藩士土屋矢之助・滝弥太郎を筑後久留米藩へ送って救援を求めた。

たまたま久留米城下には、塾居謹慎中のはずの江藤新平が同志大木喬任と連れ立って真

木和泉に会いに訪れていた。土屋らは、和泉の弟真木外記の紹介で、江藤・大木と会い、佐賀藩から大砲を供給してもらえないかと相談した。江藤・大木は、土屋らを佐賀に伴って話を藩当局に継いだ。佐賀藩主は、長州藩の苦境に同情し、ひそかに大砲若干を提供したようである。

７月にはイギリス艦隊が、生麦事件の賠償を要求して鹿児島湾に来襲した。薩摩藩は、尊攘論とは一線を画していたにもかかわらず、武門の維持で交戦せざるを得ず、善戦したが城下を焼き払われ、砲台を壊され、藩船を沈められた。

他方で、時流に乗った京都の尊攘派はますます暴走し、理論的指導者真木和泉は、攘夷親政討伐計画を立案、着々と準備を進めた。天皇を攘夷祈願の名目で大和へ行幸させ、随行の将軍に攘夷即行の勅令を直接下して有無を言わせずに履行を迫り、従わなければ諸大名に討幕を命じる、という大胆な筋書きだった。尊攘派の勢威は頂点に達したかに見えた。

なお、水田に蟄居していた和泉がいきなり京都で討幕の動きに加担できるわけがなく、そこには文久２年（１８６２）２月、しびれを切らした和泉の久留米脱藩から文久３年８月「八・一八政変」頃まで、約１年半の月日が流れていた。その間の経緯については「第七、和泉の久留米脱藩から寺田屋の変まで」で後述する。

五、田中久重の世界（京都から佐賀へ）

儀右衛門こと田中久重は、寛政１１年（１７９９）に久留米藩城下の通町で生まれた。幼少のころから器用で、成長すると、いろいろなからくりを造って大きな祭礼で演じ、高い評判を得ると全国を興行して行った。とくに、矢を指でつまんで弓にかけて弦を引いて矢を放つ「弓曳童子」や、机にある硯の墨を筆につけ正面の紙に文字を書く「文字書き人形」は、現代ロボット工学をしても簡単にはできない優れたからくり人形であった。

「弓曳き童子」は、現在二体の現存が確認されている。一体はトヨタテクノミュージアム（徳川家旧蔵）、他の一体が久留米教育委員会（前川家旧蔵）である。

平成２年に徳川家から、平成３年に前川家から続けて発見された。

また、「文字書き人形」は，１８４０～１８５０年に田中久重が制作したものだが，実は最近まで，その存在は国内で知られていなかった。１９９２年，米国のマジシャンのコレクションに含まれていることが分かり，それから日本からくり研究会が約１２年をかけて返還を交渉。２００４年１１月に里帰りを果たした。その時は，内部機構の状態があまり良くなく，文字を書かせても，何を書いているのか分からないほどだったようである。

文字書き人形
“実演中”

日本からくり研究会の会長である東野進氏によると「意図的に改造したか

もしれない」。つまり，からくり技術が海外に流出しないように，わざと内部を変えた可能性がある，とのこと。ただ，カムに「寿」「松」（木の下に公を書く，古文書に見られる書体）「竹」「梅」（木の下に毎）と書いてあったため，何を書くのかは分かったとのこと。そこから約１年間，調整が続けられた。

「寿」１文字しか書けなかった人形は「松」「竹」「梅」の３文字が書けるまでに修復されている。

「梅」の文字、流麗な筆遣い、文字バランスなどは、ひとかどの書家並みの腕前を持っている。

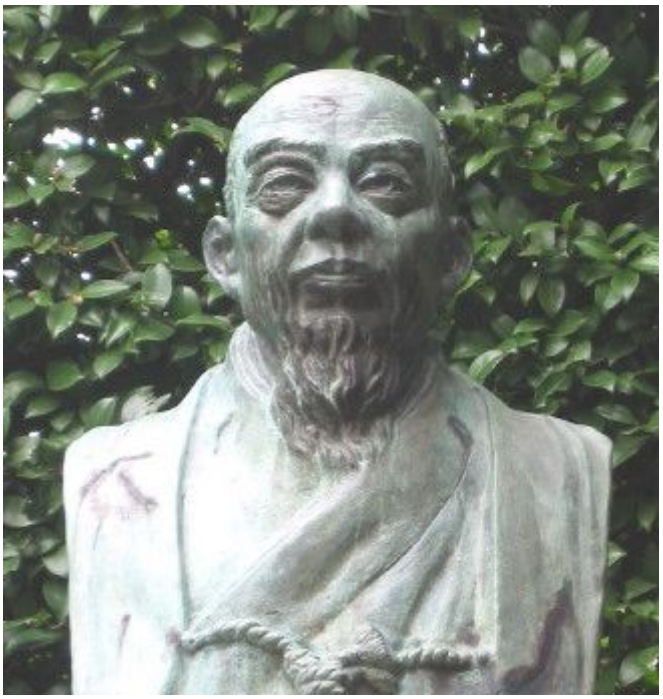
からくり人形はお茶運び、と貧弱なイメージを抱いて江戸東京博物館（東京・両国）で開催された「夢大からくり展２００７」を観て、改心させられた人が多かったようである。

展示を見たある人は、

「人形が自ら　筆に墨をつけ、文字を書くのですよ！！
目の前で　”梅、松、竹”　そして”寿”を披露してくれました。
鳥肌がたつほどの感動でした。」

と、感想を述べている。

久留米藩の財政難によって贅沢禁止令が発令され、祭礼が禁止されると、久重は興行の場を失い、３５歳で大坂に住まいを移した。さらに、大塩平八郎の乱で家を焼かれ、京都伏見に移住する。この間、天文・教理・暦・医学・蘭学などの学問を学び、和時計の最高傑作といわれる「万年時計」をはじめ、「懐中燭台」「無尽灯」「雲龍水」など生活に役立つものを次々に製作していった。



久留米・五穀神社卿学の森にある田中久重の銅像。神社祭神は豊饒の神、豊宇気比売姫で相殿に稲次因幡正誠を祀るが、正誠は和泉とともに活躍した稲次因幡正訓の縁戚にあたる。

５１歳の嘉永２年には天文学を修めて嵯峨御所大覚寺宮から印可を受け、年頭および八朔には宮中参殿を許される栄誉を得ている。それ以前に、複雑な機械の考案には、西洋科学の必要なことを痛感し、広瀬玄恭について蘭学を修め、西洋科学の原理を教わっている。

彼は、当時としてはそろそろ隠居に入る年頃から老年にかけて都合三回、寺子屋に通っている。「寺子屋通い」というのは久重が冗談めかしくしゃべったことであるが、第一回は４３歳の時、京都で戸田東三郎に天文数理を学んだこと。麻田剛立という学者が自分で天体観測器械などを開発して西洋天文学を確立し、戸田東三郎はその学派に属する学者であった。

この戸田東三郎のもとへ通って天文、数理を勉強すること７年、麻田流のおおよそを学び終えた後、久重は戸田の推薦で、同じ京都の土御門家に入門した。二ヶ月通ったが、ここで彼は「田中久重」といいう名前をもらっている。彼本来の名前は「儀右衛門」である。

二回目は、久重が京都で「機巧堂」（からくりどう）を開いた弘化４年（１８４７）、４９歳のとき、広瀬元恭が開いていた「時習堂」へ入学した。時習堂へ通っているうち、しっかりした信念をもって励んでいる元恭の人物にすっかり惚れ込んでしまった久重は、自分の末の妹「いね子」を元恭に嫁がせている。つまり、義兄弟の仲になっている。時習堂では同門の佐野常民、中村奇輔、石黒寛二と親友になる機会を得ることになる。

この時習堂の時、「蒸気罐」の原理を修得している。

「これからはストームマシーネ（オランダ語で蒸気機関）の時代だ。」

と、口ぐせのように言っていた元恭から、たぶんに刺激されたせいもある。蒸気機関というのは、蒸気力を使って汽船を動かし、汽車を走らせ、大砲の弾丸をとばす、大変なマシーネ（機械）なのだ。

元恭が、蘭書から得た知識を基にして、蒸気機関の設計図を作ったのは、久重が万年時計を完成した翌年――寛永５年（１８５２）である。ただし、これは本格的なものではなく、蒸気をつくる蒸気罐、水を蓄える水槽、蒸気を送る蒸気筒、そしてこの蒸気で動く喞子（しょくし、ピストンのこと）など、ごく単純で原理的な機械だった。

この設計図をもとに、久重は時計つくりの技術を生かして、蒸気機関の模型を作った。そして、これを長さ５－６０センチほどの船体にとりつけた。本格的な機械だったら燃料には石炭を使うのだが、模型だから燃料はアルコールだ。

元恭と久重は、時習堂の近くにある蓮池で、二人だけの進水式を行った。

三分、五分、十分・・・玩具のようにかわいい船を食い入るように見つめていた二人の目が、急に明るく輝いた。蒸気の船がゆっくりと水の上を滑り出したのである。

「これでわれわれは、世界へ一歩だけ近づいたのですね」

思わず元恭が胸をはると、

「そうですね、これからあと九十九歩つめねばなりませんな」

と、久重はいって、また同じ言葉を口の中でつぶやいた。

三回目は、佐賀藩精煉方にいるころ、幕府が開いた「長崎伝習所」へ入学したことである。５７歳のときで、約半年の講習を立派にこなしている。

田中久重が、上述の「時習堂」に次いで、佐賀で模型の蒸気機関車や蒸気船を作って成功させたのは、安政２（１８５５）年のことで、かれが５６歳の時だった。しかし、彼が佐野栄寿左衛門（佐野常民）の薦めによって、肥前佐賀藩鍋島家の精煉方に籍を置くようになったのは、その前年の安政元年（１８５４）年であった。「翁手記の年譜」に安政元年の欄に「肥前へ下る、五月浦賀行、二人扶持頂戴」とあるのがそれである。

佐賀入りの直前に久重は鷹司関白から、

「日本第一の細工師」

の称号を受けている。これより、田中久重の名声は江戸まで宣伝された。前に嵯峨御所から「近江大掾」の栄誉を受けたのと同じように久重を喜ばせた。いってみれば、

「何の資格もない自分が佐賀藩入りの箔をつけることが出来た」

と感じられたからであろう。

それにしても長年住んだ京都から佐賀への移住には相当の抵抗を感じたはずである。かれは長年営々として自らの力で歩いてきた末にようやくの思いでたどり着いた京都の中心地で、「機功堂」なる店を構え、万年時計をはじめ数々の優れた作品を製作し、最先端の技術を極めたことに誇りと自信を持っていたに違いない。それをすっかり店を閉じて佐賀の地に移ることは彼の人生にとっては一大転機で、容易に踏み切れなかったものと思われる。

佐賀行きの話は、佐野常民がふいにやってきて持ち出した。

「佐賀へ来て、一緒に働いてくれませんか」

と誘われた。

当時、佐賀藩は非常に積極的に西洋の新知識を吸収しようと努力していた。もとはといえば佐賀藩は「葉隠武士」などで知られているように、もっとも頑固な精神主義をとなえて西洋の文化を排斥する気風が強かった。しかし、鍋島閑叟が藩主になってから、だいぶ様子が変わってきた。

西洋の科学を取り入れた新しい国造りをめざした閑叟は、昔のしきたりばかりを大事にする古い考えに凝り固まった連中を退け、世界に目を向けた新しい考えを持った人材を積極的に起用した。そのひとりが、若い佐野常民だったのである。

閑叟はすでに反射炉（溶鉱炉）を築いて鉄の製造に成功していたが、今度はその鉄を使って蒸気機関を作るという計画を立てた。とろこら、藩内には、物理や化学の専門家もいなければ機械を扱う技術者もいなかった。

「さような夷狄の学問など、武士には無用じゃ」
などという人間が多かったから、人材がいないのは当たり前だった。
藩内にいなければ、藩外に人を求めるより外はない。しかしこれがまた難問だった。
「他国の者を起用するのは、わが藩の名誉を傷つけるものだ」
こんな反対論が飛び出した。いつまでも槍や刀を振り回して自慢しているほうがよほど不名誉なことなのに、彼らはそうした狭い考え方しか出来なかった。
しかし、結局は閑叟の英断で反対論を押し切り、藩外に人を求めることになったのである。
「蒸気機関を作るためには、大工場を建設しなければんりません。工場を作って機械をすえて、その機械を動かす――つまり何から何までやるわけです。こういう大事業を起こすには、どうしてもあなたが必要です。ぜひ力をかしていただきたいのです」
常民は佐賀藩の事情を詳しく打ち明けて、久重の來藩を懇願した。
久重はすっかり考え込んでしまった。とてもすぐに返事の出来る問題ではなかった。今のかれは、昔と違って、すっかり京都に根を下ろしてしまっている。それに５４歳という年のこともある。
「しばらく考えさせてくれませんか。これは私だけの問題でなく、家族や雇人たちのことを考えなければなりませんので」
と、久重はいった。彼は心の中で、実際、大変な問題を持ち込まれたものだと思った。
伏見へ移ってから１６年、四条烏丸で「機巧堂」を開いてからでもすでに６年だっている。その間に門弟、職人の数は増え続けて、今では３０人近くの大所帯になっていた。製作する商品の種類も多く、各種の照明器具から和時計、西洋時計の類、雲竜水と呼ばれる消火器、水を噴き上げて杯などを洗う雲盃洗、さらに火薬を利用した仕掛け花火等々、開発したそばから新商品は、飛ぶような売れ行きを示した。
しかも、機巧堂の名は、京、大坂以外の地にも広く聞こえているので、注文の切れ目がなく、店は繁盛の一途を辿っていたのである。久重は、仕事を弟子たちに任せて、好きな研究に日を送る理想的な暮らしをしていたのだ。佐賀へ行くことは、今まで苦労の限りを尽くしてやっと築き上げた地位と財産をすべて捨てて、出発点に逆戻りするようなものだった。
――断るか、それとも・・・・・
来る日も来る日も自分の意思を確かめようとするのだが、どうしても決心がつかない。思い余った末に、彼はとうとう元恭のもとへ行って意見を求めた。
「中村奇輔と石黒寛二の両君が、先日同じような悩みで相談にやって参りました」
と、元恭は言った。
奇輔も寛二も、やはり常民に協力を懇望されたらしい。奇輔は化学を得意とし寛二は物理を得意としていた。ふたりとも元恭の秘蔵弟子である。
「で、先生のご意見は」

「佐賀行きを奨めました」
少しのためらいもなく元恭が答えたので、久重は黙り込んでしまった。彼らと自分とでは大いに事情が違うのだからという言い訳めいた考えが、チラチラと頭に浮かんだ。
しばらくしてふと顔を上げると、元恭の澄んだ瞳とぶつかった。
「久重さん、九十八歩、いやいっぺんに五十歩ぐらいにつまるかもしれません」
と、元恭が言った。
「なんのお話ですか」
出し抜けに言われたので、久重は意味を取りかねた。
「先日、蓮池で蒸気船の模型の試運転をやったときのことを覚えていますか。あの時、私がこれで世界へやっと一歩だけ近づいたといったら、あなたは何といわれましたか」
「あと九十九歩つめなければと言いました」
「そうでしたね。久重さん、佐賀へ行けば、世界との差を確実にちぢめることが出来ます。京都にいては、残念ながらその差はほとんど縮まらないと思います」
「しかし、私でなくても、だけかがやるでしょう」
「あなたは、蒸気船の模型作りに成功しました。今度は本物を作りたいと思いませんか」
「それはぜひとも造ってみたい。自分の造った蒸気船に乗って海を走る夢を見たことがありますよ」
「佐賀へ行けば、その夢が実現するのです。今まで日本人の誰もが見たこともない素晴らしい夢を、あなたが始めて見ることが出来るのです」
熱っぽい元恭の言葉が、徐々に久重の胸の置くまで染みこんだ。そういえば、俺は幼い自分からずっと夢を見つづけてきた人間だ。彼は思った。
「そうですね、ひとつ、誰も見たことのない大きな夢を見に出かけますかな」
ぽつりとつぶやいて、久重は一つ大きく息を吐いた。彼の覚悟は決まったのである。

いったん決心をしたら後へ引かない久重だ。店の後始末は結婚したばかりの娘の美津と婿養子の岩吉（久重の姉「げん」の長男）に任せ、門弟の田中精助ひとりを連れて、その年嘉永５年（１８５２）１１月のうちに佐賀へ単身旅たった。家族を佐賀へ呼び寄せるのは安政元年（１８５４）４月となるが、このことについては後述する。

彼の佐賀での新しい住まいは、筑後川の河口、早津江川西岸に面した三重津という土地だった。藩主鍋島閑叟はここに４５００坪という広大な敷地を求めて、生まれたばかりの精煉方をおいたのである。精煉方の門を入ると、すぐ右手に久重の家と石黒寛二の家があり、ほそい小川をはさんで向かい側に中村奇輔の家がある。
彼らの住まいからそれほど隔たっていない場所に、蒸気罐（ボイラー）製造場、鋳物工場、鍛冶細工物工場、木挽工場、船渠（ドック）、石炭庫等々の大きな建物が、続々と建てられつつあった。

三重津へうつり住んだ久重は、旅の疲れを癒す暇もなく、数百人の工事人たちを指揮して工場の建設を急ぎ、機械器具の整備に力を注いだ。

ペリーの来航でようやく目を覚ました幕府は、それまで禁止していた大型船の建造を許すと同時に、幕府みずからも浦賀で大型船の建造を始めた。

いったい幕府がどんな船を造るのか、藩主閑叟は知りたかった。もしそれが蒸気船であれば、ぜひとも技術を探り出す必要がある。そこで彼は、一番信頼のおける久重を呼んで、浦賀行きを命じた。

ペリー来航の翌年――安政元年（１８５４）４月、久重は佐賀を発ち、５月に浦賀についた。しかし、この長い旅は無駄骨に終わった。幕府が造っていた船は、ただの洋式帆船であった。かれはがっかりした反面、ほっとした。幕府にもまだまだ蒸気の機関を製造する能力がないことを見届けたからである。

――やっぱり、おれが一番乗りをして見せるぞ。

そんな思いを胸に満たして、彼は浦賀の港を後にした。

久重は、途中京都に立ち寄った。京都には、まだ妻の与志子と、岩吉・美津の娘夫婦が残っていた。孫の岩次郎がおぼつかない格好でよちよち歩くのを見たとたん、久重はぼろぼろと涙をこぼした。しかし、京都から九州までの旅は、孫を入れて総勢五人のにぎやかな旅となった。三重津へ帰れば、当然岩吉と一緒に働くことになるので、それを思うと、久重の足取りは自然と軽くなった。

久重は京都を離れるにあたって、弟子の田中儀左衛門に京都長刀鉾町の店を譲り、時計店を営ませた。この田中儀左衛門は田中久重（田中儀右衛門）或いは養子である田中儀右衛門（岩吉）としばしば混同されるが、田中儀左衛門は田中久重が京都に居た頃の弟子の一人である。

久重が大塩平八郎の乱にあい伏見に移り住むようになって、久重について修業に励むことになった。田中精助の記録によれば、久重と同じ丹波橋通りの近傍に住んでいた木細工師の長男で名を弥助といったという。

三重津へ帰った彼は、また蒸気機関の研究に取り組んだが、その間、閑叟の供をして何度か長崎に赴いた。そのころ長崎には、オランダ軍艦が二隻来ていたので、ちょうどいい機会とばかりこれに乗り込み、艦内各部に取り付けてあるさまざまな機械器具を見学して歩いた。彼は、長い間精巧な時計をつくり続けてきたので、一つ一つの機械の性能についてはそれほど驚かなかったが、種類の多いのには驚かされた。操舵機、羅針盤、起重機、錨巻き上げ機、それに施錠砲など、軍艦の中はまるで西洋時計の中身のように、機械だらけであった。

オランダ軍艦の見学は大変貴重だった。蘭書にのっている図版だけでしか見ることのできなかった機械類が、実際に目で確かめられた上に、手でじかに触れることも出来たから

である。そして、このような体験学習は、翌安政２年（１８５５）の長崎伝習所で大いに役立った。

佐賀藩に於ける「国防の為の軍事近代化」は、
徳川幕府がようやくグローバリズムの視点に立ち、従来の鎖国体制を解く為に全大名に対し
「方今の時勢は大船必要に付自今諸大名製造いたす儀御免」
と令した嘉永６（１８５３）年９月１５日前後のことである。
鍋島斉正（閑叟）は待ってましたとばかり佐賀藩は、安政２（１８５５）年には伊万里と深堀に船舶繋留所、安政４年には海軍取調方、そして安政５年には船手稽古所、そして安政６年には三重津に造船所を建設するというようにすばやく行動に移した。したがって、幕府の
「大船建造令の禁」
が解かれた時も、そこから泥縄式に慌てて準備に入るというようなみっともない真似はしなかった。鍋島閑叟は、
「ようやく私の先を見る能力が発揮できる時代が来た」
と喜んだ。
嘉永６年６月には、例のペリーがアメリカからやってきて日本に開国を迫った。そして、翌年には幕府はまず米国と和親条約を結び、続いてイギリス、ロシアとも同様な条約を結んだ。
ロシアの提督プチャーチンがパルラダ号以下四隻の軍艦を率いて長崎にやってきたとき、プチャーチンは、軍艦の甲板にレールをしいて、模型の汽車を走らせてみせた。この時招待されていたのは、長崎奉行はじめその近くの諸藩の主だった人々であったが、その中に精煉方の中村奇輔も混じっていた。
彼は、アルコール燃料で蒸気を吐きながらレールの上を快走する汽車をじっくりと観察し、それを精密な絵図にして三重津に戻ってきた。そのときから久重は、蒸気船の上にもう一つ、汽車を作る仕事が加わることになる。

一方、遅れをとったのはオランダだ。オランダは日本が鎖国体制に入った後も長崎港において日本とは交流を続けてきた。したがって、このように次々と日本が諸列強と和親条約を結んでいる状況は知っていたはずである。
しかしオランダはばたばたしなかった。かなり紳士的にこの状況を見守り、自国なりの行動に出た。安政２年に、軍艦スームビング号およびゲーテ号を派遣してようやく日蘭和親条約を懇請した。
このときスームビング号の艦長グハービスはオランダ国王ウィルヘルム三世の好意により、乗ってきたスームビング号を幕府に贈呈した。これが安政２年６月に長崎において受

理された。

この軍艦は嘉永３（１８５０）年オランダ本国で造られた木製外輪式蒸気船であった。長さ百七十尺（約５２メートル）、幅三十尺（約９メートル）、百五十馬力の性能を持っていた。幕府はこの軍艦を受理した後「観光丸」と改称し、佐賀藩に管理させることにした。

オランダはスームビング号（観光丸）の贈与とともに、オランダの海軍士官や水兵を多数派遣し、長崎の地で日本人に対して海軍の創設に必要な教育を実施した。旧日本海軍の発端をここに見ることが出来る。これは明治政府によって本格化するお雇い外国人による技術導入の発端を成すものであった。それまでの散発的な、或いは偶発的な西洋文化との接触ではなく、組織的・制度的な教育という形態をとったことは画期的であった。

「長崎海軍伝習」には幕府をはじめ諸藩の有志が多数参加した。彼らは蘭学者、天文方の面々、洋式砲術家などからなっていた。当時のわが国の科学技術上の蓄積と、蘭学の域が全て尽されていたようなものであった。蒸気軍艦を満足に動かすためには、少なく大洋航海術や蒸気機関に関する知識、それに砲術はぜひとも心得ていなければならなかった。それはヨーロッパ海洋国の航海学校に相当するものであった。ただ日本の場合はいきなり最初から蒸気機関が課題となるという大きな相違があった。その基礎知識を成すものは、天文学、数学、物理学、化学などの基礎科学の素養であり、さらに機械学、測量術、造船学などの知識も必要であった。当時の日本でこれらの知識に尤も接近しているものを求めるとすれば、蘭学者、天文家、砲術家などがそれに相当するものであった。

幕府天文方の俊秀で、足立佐内の弟子であった小野五郎、伊能忠敬の協力者であった箱田良助を父に持つ榎本武揚、それに伊東玄朴門下の肥田浜五郎などがそれである。田中久重のような職人層にも長崎海軍伝習への参加の機会が与えられ、啓発されることが多大であったはずである。

ここで新知識を身に付けた人々の多くは幕府や諸藩の海軍の創設に尽力したばかりでなく、やがて彼らはその能力をかわれ、海軍のみならず近代的諸制度の創設に向って指導的役割を果たすことになる。さらに近代的統一国家として出現した明治政府の革新的な諸制度の整備に多角的な活躍をすることがかれらに期待された。前記の人々以外にも勝海舟、佐野常民、五代友厚、井上勝、赤松則良、沢太郎左衛門、石丸安世などがいた。かれらの業績は日本の近代化の各方面に及び、軍事、外交、行財政、交通・通信、貿易・産業、教育・文化、医療などの近代社会の各分野を網羅していたといっても過言ではなかった。

長崎海軍伝習の成果は咸臨丸による太平洋横断として実った。また長崎海軍伝習に参加した人々を中心に、文久２年（１８６２）幕府によって内田恒次郎を長とするオランダ留学生の派遣がなされた。榎本武揚、赤松則良、沢太郎左衛門などがそれで、その他にも西周、津田真道、林研海などがいた。

さらに長崎海軍伝習の俊英であった小野友五郎、肥田浜五郎、赤松則良などの人々は、長崎造船所の技師ハルデスの指導を受けながら、蒸気機関の製造から蒸気船の建造へと進

んでいった。彼らの成果は維新直前の時期に、十分実用に耐える蒸気軍艦千代田型として実ることになる。

安政２年６月１８日、喜んだ鍋島閑叟は間髪を入れず、精煉方の佐野常民・田中久重・儀右衛門父子・中村奇輔・石黒寛二・福谷啓吉・火術方本島藤太夫・石田善太夫・田中源右衛門・島内栄之助・伊東兵左衛門・馬場磯吉谷たちに水夫十人を加えて、「第一回伝習員」として長崎に派遣した。出島にあるオランダ商館において、オランダ士官から造船・砲術などについて詳しく教習を受けた。翌７月には、観光丸を練習船とし、佐賀・薩摩・肥後・筑前・長州・津・福山等各藩から選ばれた伝修生を乗り込ませて、オランダ士官から更に実地に教習を受けた。

この時の状況を勝海舟はその著（海軍歴史）の中で、

「伝修生の進退、船舶のこと、佐野栄寿左衛門頭取となって周旋す。ゆえに列藩に冠し其習熟最（も）速かなりき」

と書いている。幕府内において、

「日本海軍の創設」

を志していた勝海舟から見ても、当時の佐賀藩鍋島家の海軍力の進み方は、他の大名を断然引き離していた。というよりも、幕府よりも前に進んでいた。負け惜しみの強い海舟にすれば、目を丸くしてこういう記述を行ったのに違いない。半分は羨ましく、半分は優柔不断な幕府に腹を立てていた。

しかし鍋島閑叟にすれば何も昨日今日慌ててこういう事業をはじめたわけではない。数年も前から着々と準備怠りなかった。親幕派の閑叟は、幕府の禁令を犯してまでいきなり大船建造には乗り出さなかった。が、閑叟の鋭い先見力は、

「すぐわが藩の準備が役立つ時が来る」

と信じて疑わなかった。したがってこの頃の閑叟は得意満面だったに違いない。

海岸に近い長崎奉行所内に開設された海軍伝習所の第一回入学生は、全部で１２９名、そのうち佐賀藩が４７名で断然トップだった。精煉方から選ばれた中に、久重・岩吉親子も入っていた。

「おれはまた寺子屋行きだよ」

家へ帰って久重が伝習所入りを告げると、

「こんどの寺子屋は厳しいらしいから、あまり無理をしないでください」

と、与志子が夫の体を気づかった。

伝習所では船乗りの訓練をするようだと、岩吉が言っていたからだ。

「なに、まだまだ若い者には負けるものか。マストにも登るしバッテラ（ボート）だって漕ぐぞ。」

久重は、少しはしゃいで言った。養子の岩吉と一緒に机を並べるのがうれしいのである。

伝習生は２０歳前後が多く、年をおとっていてもせいぜい３０歳位だった。その中に、白髪の多い５７歳の久重が入っているのだから、オランダ人教官の目につかぬはずはない。

「かれは本当に生徒か」

と、教官の一人が奉行所の係役人に尋ねた。

「その通りである。彼は佐賀藩の武士で、オランダ語に通じ、機械にも詳しい。特にホルローゼ（時計）については専門家である」

役人が、あらかじめ調べてある久重の履歴をかいつまんで紹介すると、その教官は、まだ信じられない様子で、

「途中で音を上げなければいいが」

と、つぶやいた。

伝習所の日課は、座学と実習とに分かれていた。座学は朝９時から夕方４時前、昼食時の休みを除いてびっしり組まれていた。その内容は、オランダ語、算数、代数、天文地理、物理、化学、医学、蒸気学などで、曜日によりオランダ軍艦による海上での実習がこれに加わった。実習は、航海術、造船学、船具の取り扱い方、修理の方法、測量術、砲術訓練、船体掃除などであった。

授業の時には一応通訳がつくが、進み方が早いので、オランダ語がある程度わからないと理解できなくなる。そのため、２～３ヶ月たつうちに、ついていけなくなってやめるものも出てきた。しかし、オランダ人教官がもっとも心配していた久重は、およそ半年にわたる伝習を立派にやり通したのであった。

長崎から帰った彼は、同じ伝習所卒業の仲間たちとともに、蒸気船の雛形を作った。長さは約１メートル。積み込んだ蒸気罐は、京都で作ったものよりはるかに精巧にできている。この船を実物大にすれば海を走れるわけだ。

久重は、蒸気船の雛形と同時に、蒸気車の模型も作ってみた。こちらは長さ３０センチという小型のもの、貨車二輌をつけてレールの上を走らせた。船も車も、走る原理は同じなのである。

もう一つ、彼が長崎から学んで帰ったものがある。それは電信機であった。学んだと言っても、誰かが教えてくれた訳ではない。

あるとき長崎奉行所の時計が故障したことがあって、彼が呼ばれた。時計のある部屋へ行ってみると、その部屋の床の間にうやうやしく飾ってあったのが電信機だった。

電信機の渡来は前の年――安政元年（１８５４）ペリーが再び日本へやってきたとき、横浜で実験して見せたのが最初で、その翌年、つまり久重たちが伝習所へ入所する少し前に、二台目の電信機が、オランダ人から長崎奉行所へ贈られたのである。

それから久重は、修理をわざと遅らせて、毎日時計部屋へ通い、電信機の構造や使われいる材料などを、細かく調べてしまったのだった。

電信機は、発信機と受信機とから出来ている。二つの機械の間は電線で結ばれている。

まず発信機のつまみを押すと、電池からの電流が受信機に流れる。受信機には電線（コイル）を巻きつけた鉄芯があって、電流が流れるとそれが磁石となり、上部にある鉄片を吸い付ける。すると、その作用で音が出る。発信機のつまみを押す時間（電流の流れる時間）を長くしたり短くしたりすれば、いろいろな音が変化するから、これを文字に移し変えれば通信が出来るのである。

原理がわかれば、機械を作るのは蒸気機関などよりずっと簡単だ。久重は、それほど苦労せずに、図面どおりの電信機を作り上げた。だが、いざ実験してみると、電気の流れが悪いらしく、音が余りよくなかった。どうすればもっと強い音が出るようになるのだろうか。彼の研究課題がまた一つ生まれたのだった。

安政２年、久重は佐賀藩主閑叟の前でミニチュアの蒸気船と機関車展示の大イベントを敢行した。

田中久重は“からくり儀右衛門”と呼ばれていた。多くのからくり人形を作って人を楽しませ、やがてその技術が発展して蒸気船や蒸気機関車、或いは大砲・銃なとの作品を次々と作った。

そしてその多くが、

「日本で始めての製品」

と言われた。

しかし久重にとって、そういう発展ができたのもすべて、

「人との出会い」

である。

その最大の出会いが、すでに述べてきた肥前佐賀藩士佐野栄寿左衛門（のちの佐野常民）と知り合ったことであり、さらに佐野を通して佐賀藩主鍋島斉正（なりまさ・後に直正・号は閑叟かんそう）の知己を得たことである。

佐野常民と鍋島閑叟藩主に出会わなかったら、そしてもう一人その後に、真木和泉の推薦を受けなかったら、久重は死ぬまで、“からくり儀右衛門”で終ったかもしれない。佐野常民は先に述べたように、藩主閑叟の薦めにより早くからオランダ学に志し、緒方洪庵の適塾で学んだ。後の明治政府の功臣で元老院議長、明治１０年西南の役には博愛社を組織して赤十字活動をし、赤十字社長となる。伯爵となった人である。

卓越した技術でからくり人形を作り、多くの庶民を楽しませることもこの世にとって大事な仕事である。しかしその技術をさらに発展させて、「国家や藩のために役立つ製品」をつくりだすことは、いわば私的な仕事が公共の用に供されるまで高まったことを意味する。

安政２年（１８５５）８月初旬に行われた模型実験は、場所は佐賀の城下町の一角多布

施（たぶせ）にある佐賀藩精煉方の庭においてであった。

この日、精煉方の庭では、田中久重たちが作った蒸気船と蒸気機関車の模型を実際に走らせるという実験が行われることになっていた。藩主の鍋島閑叟をはじめ、重役人や主だった藩士、及び藩校引道館の学生達が出席した。精煉方の庭に集まった連中は、

「精煉方の物好きが造った蒸気船と蒸気車は本当に走るのだろうか？」

と囁きあった。

池に浮かべられた蒸気船の模型は、船体の長さが三尺余り、外輪式で煙突のほかに二本の帆柱を備えていた。また蒸気機関車は、長さ一尺一寸、高さ一尺で、さらに長さ六寸、高さ八寸の貨車の模型二輌を連結していた。この蒸気機関車の模型は、直系二間（約３．６メートル）の円形を描いたレールの上に載せられていた。それぞれ動力を生む燃料にはアルコールが使われた。

精煉方の主任は藩士の佐野常民である。この日３４歳だった。直接蒸気船や蒸気機関車を造ったのは、田中久重・儀右衛門父子と、中村奇輔・石黒寛二たちである。いずれも、京都のオランダ学者広瀬元恭の門人だった連中である。佐野常民も広瀬元恭に学んでいる。

佐野はいつも、

「これからは、佐賀藩のことだけではなく日本全体のことを考えなければならない。そして日本国を国際社会に確とした位置づけを行うことが大切だ」

と考えていた。今で言えば完全なグローバリズムである。逆に言えば、

「世界の中の日本はどうあるべきか、その日本の中で佐賀藩はどうあるべきか」

と、川の上流から下流へ思考が流れるような方法をとっていたのである。

そしてその佐野常民は、佐賀藩主鍋島閑叟の大のお気に入りだった。若いときから日本諸国の有名な学者の下に入門して、漢学だけではなくオランダ学まで学びえたのは、全て閑叟の一方ならぬ庇護によった。

帰国した佐野に、閑叟は精煉方の設立とその仕切りを命じた。佐野は張り切った。そして、

「佐賀藩士は、相対的に保守的だからこういう洋式な仕事に対しては冷淡だ。むしろ、障害になる。外部の力によって、古い壁をぶち破ろう」

と思い立ち、かって学んだ広瀬元恭の門人の中から、親しくまた頼りになる田中久重・中村奇輔・石黒寛二たちを誘ったのである。

当然、佐賀城内の保守的な武士達の反発を食らった。藩主の閑叟が裁断を下した。が、これに不満な藩庁の人事・財政担当者たちは、久重たちの扱いを低身分とし、その給与も薄くした。

しかし久重たちは技術者だ。身分がどうだろうとまた給与が少なかろうとそんなことは意に介さなかった。ひたすらに閑叟の意に沿うような洋式工具を次々と造った。閑叟はいずれは、海洋に乗り出せる艦船や敵襲来のときに応戦できる大砲や銃の製作も、この精煉

方で行わせようと考えていた。

この日の実験は大成功だった。蒸気船は大きな池の中を生き生きと動き回ったし、また蒸気機関車も立派にレールの上を走りまくった。始は斜めに視ていた城の保守派たちも、思わず声を上げた。

この日の光景を、実質的に主宰した佐野常民は、「佐賀藩海軍史」の中で、次のように書いている。

「また別に蒸気船製造の一局を興し予をして其の事に任ぜしむ。閑叟公大いに此新事業を督励し、其の成功の速ならんことを望む。日夜製造の方法を考究し、先ず蒸気船、蒸気車の最小なる模型を製して、蒸気車は是を盤台上に、また蒸気船は之を池上に浮かべ、共に運転を試む。今日を以って回顧すれば宛も児戯に類すと雖も、当時未だ蒸気器械の開けざる時世に於いて、運転の実施を試むるや、人々見て以って奇と称せざるなし」

おそらくこの通りだったのだろう。若い引道館の学生達も目を丸くした。

その中に、単なる驚き以上のむしろ狂気に近いような熱っぽい目で、動き回る蒸気船や蒸気機関車を凝視する若者がいた。名を大隈八太郎（のちの重信）といった。この日、１８歳である。

佐野常民はさすがに得意満面で、見学者達の間を、

「どうだ？　感想は」

と聞き歩いた。たまたま大隈八太郎の前にやってきた。佐野は大隈をよく知っている。大隈は引道館の教育方針が気に入らず、何時も文句を言っていた。

「藩校引道館は、まるで生きた葉隠です」

と公言してはばからない。

「葉隠」

というのは、別名“佐賀論語”と、言われ

「鍋島精神」

の地下水脈になっている。

「葉隠」が完成したのは、鍋島家三代目の藩主光茂がなくなった後のことだが、光茂に殉死しようとしてとめられ、生き残った藩士山本常朝が口述し、それを田代陣基という武士が筆記したものである。門外不出の書とされ、そのため藩校引道館でもこの本を正式にはカリキュラムには組み込まなかった。しかし、

「葉隠は佐賀武士必読の書」

といわれたので、その伝統は古く永く、藩校引道館の教授たちも教える学問の底には葉隠精神を陰に陽に流した。

引道館の創設に大いに貢献したのが、古賀精里・穀堂父子である。ともに朱子学者だ。特に古賀精里は、やがて幕府に召しだされ、昌平坂学問所の教授になった。同じ幕儒の尾藤二州・柴野栗山とともに、

「寛政の三博士」
と呼ばれるほどの存在だった。しかしコチコチの朱子学者で、寛政の改革を展開していた、時の老中松平定信に対し、
「異学の禁」
を進言した。つまり、
「幕校である招聘坂学問所においては、朱子学以外教えてはならない」
という内容だった。特に対立する学問である王陽明の陽明学を禁ずることが直接の狙いだった。したがって、古賀精里と息子の穀堂が主宰する佐賀の藩校引道館においても、
「朱子学一辺倒」
の教育が行われた。そしてこの朱子学教授の底に、伝統的な葉隠精神が脈々と伝えられたのである。
そういう古い学問教授に若い大隈八太郎は我慢できなかった。学生だけでなく教授の中にも異端分子が出た。枝吉南濠はその代表だ。南濠は、異学の禁を破ってひそかに陽明学を教えた。さすがに藩の上士層はこれに乗らなかったが、若い学生達は陽明学の、
「知行合一（言行一致）」
の行動主義に大いに乗った。
南濠の子神陽は、これをさらに尊皇論に高め、
「義祭同盟」
を組織した。南朝の中心であった楠正成を崇め、この木造を作って、折々祭りを行い、勤皇精神を高めるグループである。久留米藩の「天保学派」に一脈通づる一派である。これが佐賀勤皇党のハシリとなり、枝吉神陽の弟で副島家に養子に行った種臣、江藤晋平、島義勇などが参加した。大隈八太郎も熱烈な党員だった。
かれらは、藩主の閑叟も引きずり込みたかったが、閑叟は中々簡単には節を曲げない。というのは、閑叟の妻は第十一代将軍家斉（いえなり）の娘だったからである。いわば将軍家と親戚なのだから、簡単に徳川家や幕府を否定するような尊皇論には賛同するわけには行かない。
しかし閑叟という人物は、海のように広い深さを持った人物だったので、保守的な佐賀藩の中でしきりにこれに反するような学説が湧き上がっても、処罰をしたり或いはこれを止めるようなことはしなかった。高い立場で許容していた。胸の幅が広く、また奥行きが深かったのである。この点、「義祭同盟」の連中もぶつぶつ文句を言いながらも、閑叟に直接反抗したり文句を言うようなことはしなかった。閑叟の人柄がふくよかだったからである。
普段から引道館批判ばかりしている大隈八太郎をよく知っていたので、佐野常民は大隈の前に立つとからかうように聞いた。
「どうだ？楠正成公の感想は」
大隈八太郎はからかわれてキッと佐野を睨み返した。しかし、再び池の中を走り回る蒸気

船や、レールの上をグルグル廻る蒸気機関車に目を止めるとこう呟いた。
「模型ではもったいない。実際に日本国中を走らせるべきです」
「なに！」
大隈の言葉に佐野は目を見張った。それは大隈八太郎が普段の批判癖を捨てて、素直に今日の実験光景を感嘆の目で受け止めたと思えたからである。
「すると、おまえはあの蒸気船や蒸気車に感動したのか？」
「しました。こんな凄いものを造る人物が佐賀藩にいたことを誇りに思います。ですから、単に模型で終らせるのはもったいないと思ったのです。是非、蒸気車は日本国内の陸上を走らせ、蒸気船は周囲の海を航行させるべきです」
「なるほど、いいことを言うな、楠正成公は」
洒脱な佐野は、冗談を交えながらそう告げた。嬉しかった。大隈たちは普段から保守派の尊敬の的である藩主閑叟や、そのお気に入りの佐野に対しても批判的な感情を持っていることがよくわかったので、今日のように素直な感動をするとは思わなかったからである。
佐野は、
（大隈のような反応があるのなら、引道館の学生を見学させたのは決して間違いではなかった）
と感じた。
コチコチの勤皇論者である大隈八太郎がコロリと感動するくらいなら、大隈ほど先鋭的な思想を持っていない若者達は、もっと感激したに違いないと判断できたからである。佐野常民は精煉方の主任として大いに勇気づけられた。大隈に言った。
「蒸気船と蒸気機関車を実際に造ったのは、あそこにいる人物だよ」
そう言って、レールの脇に立って、事故を起こしたらすぐ手を出そうと構えている田中久重を指差した。
この日、田中久重は５７歳である。脇に、養子に迎えた二代目の儀右衛門が寄り添っていた。二代目儀右衛門は本名を岩吉、後に弥三郎といった。浜崎大吉の長男で、小さいときから久重のところに出入りして、久重に大いに気に入られ、久重は長女の美津と娶わせた。そして、かって“からくり儀右衛門”と呼ばれていた自分の通称を、そのまま岩吉に与えたのである。岩吉改め弥三郎は、現在は儀右衛門と名乗っている。だから、“からくり儀右衛門”の事績を知る人々は、時々混乱する。そこで久重は、かって優れた技術者に朝廷から与えられる、
「近江大掾」
という官名を貰っていたので、自分を「田中近江」と名乗ることが多かった。
久重にすれば、
「最早、おれは単にからくり人形を作る儀右衛門ではない」
という思いがあった。したがって二代目の儀右衛門に対しても、
「おまえは“からくり儀右衛門ではないぞ。新しい儀右衛門として誇りを持て」

と告げていた。だからといって久重は、からくり人形を作ってきたことを決して卑下したり、あるいは過去を忘れようなどと思ってはいない。
むしろ、
「あの時代は楽しかった。おれの作るからくり人形を見て、人々は無垢に喜んでくれた」
という幸福感は依然として噛みしめている。そんなことを言えば、今は佐賀藩主を始め、佐賀城の重役や引道館の学生達を含めて、鍋島家の武士達が喜んでみている蒸気船や蒸気機関車にしても、結局はからくり人形と変わらない。子供のおもちゃである。いや、今は大人のおもちゃだ。何とも微笑ましい。
精煉方の庭に漂っているのは、微笑ましい和やかな雰囲気だった。佐野常民は田中久重のそばに行った。そして、大隈八太郎のほうへ視線を飛ばしながら、久重に今大隈と交わした会話の内容を伝えた。
「ほう」
久重は目を上げて大隈八太郎を見た。大隈も佐野の動きを追っていたので、二人がこっちを見ていることを知っていた。にらむように見返したが、しかし久重に対しては軽く頭を下げた。久重は丁寧に礼を返した。佐野の話で、コチコチの尊王論者である大隈八太郎も、素直に蒸気船や蒸気機関車の走行に目を見張ったと聞いたからである。
佐野は久重にしみじみと告げた。
「成功しましたな」
「佐野様のおかげです」
「いや、田中さんの卓抜した技術の賜物ですよ。わたしは到底田中さんには及ばない」
「いや。からくり人形つくりをこのように優遇してくださったのは、何といっても佐野様のおかげです」
「わたしではありません。藩公ですよ」
まだ、池を走る蒸気船に目をとめている鍋島閑叟のほうを見てそう告げた。ポツンとこう言った。
「今日は、金食い虫の精煉方が大いに名をあげました。精煉方の宣伝の為にもあの蒸気船と蒸気車の実験は、大いに役立ちました」
「それはよろしゅうございましたな」
久重はそう告げた。

六、久重、「凌風丸」建造に関わる

この頃の久重の仕事振りを垣間見ることの出来る資料に「翁手記の年譜」がある。それによると、蒸気船や蒸気機関車の模型を製作した翌年の安政３年（１８５６）には「大砲方機械製造かかる」、そして安政４年「ピーチング製造かかる」、安政５年「アルムストロング六ポンド筒」と続く。作業の内容については明らかでないが、佐賀藩の大砲製造にも関与したことを示している。

その頃、佐賀藩では模型の製作に続いて実用的な蒸気船を手がけようと、必要な機械類をかねてからオランダ側に発注していた。しかしこの機械類が到着してみると意外に高価なもので、最初の予定はまったく狂い、佐賀藩の財政規模ではとても手が出なかった。ついにこの計画は諦めることにし、その機械はそっくり幕府に引き取ってもらうことにした。この機械設備は創業期の長崎造船所のそれに匹敵するほどの、或いはそれを凌ぐほどの本格的なものであった。その後この機械の運命は猫の目のように変わる終焉を迎えた幕府の政策に翻弄されながら、転々として定まるところを知らず、長崎、横須賀、横浜とたらい回しにされ、結局明治政府の手によって工部省赤羽工作分局に落ち着くことになった。

また、筑後川の河口にほど近い佐賀藩の三重津軍港では、文久３年（１８６１）から小規模な造船所の建設が進んでいた。ここでは田中久重をいわば主任技師にして、まず蒸気軍艦の取替え用ボイラーの製造からはじめることになった。佐賀県佐賀郡川副町早津江に属するこの地は、佐野常民の出生地でもあり、近くに彼の生誕碑を見ることが出来る。また、この地には公民館に併設して佐野記念館があり関係の資料が展示されている。かって軍港のあったあたりは、佐賀藩海軍の軍艦がしばしば出入りした盛時をしのぶよすがもないまでに、一面に芦の生い茂る川端の湿地と化している。しかし少し注意してみると草むらの間に廃墟と化したかってのドックの跡が入り江となっているのをはきりと認めることができる。この地で久重が立ち働いていた姿が思い浮かぶようである。

この地は軍港、造船所、兵学校などを含めると、初期の長崎造船所の規模を凌いで、ゆうに一万坪を越す広大な敷地である。しかし造船所の設備そのものは小規模のものであったと思われる。ボイラー程度ものであれば、蒸気機関本体と違って、それほど高度の製作技術を要するわけではないので、一応の機械設備があれば鍛冶屋の腕前に頼りながら、その製造や修理は可能であったであろう。それにボイラーは本来損傷の激しいもので、これをいちいちヨーロッパに運んで修理したり発注したりしていたのでは大変で、ぜひとも早く国内で修理・製造する必要に迫られていた。

ちょうどこの頃、長崎港にオランダ製の小型の蒸気船が繋留されていた。佐野常民がこれに眼をつけた。すぐ鍋島閑叟のところに行って、

「オランダの蒸気船を買い取りたいと思います」
と申し出た。
「どうする？」
「あの船を解体して、オランダの造船技術を学びます。わが藩が自力で軍艦を建造するよいきっかけになると思います」
と言った。閑叟は微笑んで頷いた。
閑叟は常民に自分の心を読まれていると感じた。「鍋島藩独自で軍艦を造りたい」と考えていることを常民は見抜いていたのである。一方で常民は「実際にそれが出来るのは田中久重父子以外ない」と思っていた。以心伝心で、閑叟にも佐野の気持ちがよくわかった。そこで、
「よい、買い取れ」
と命じた。佐賀城の重役連が又ぶうぶう文句を言ったが、閑叟の鶴の一声で収まった。オランダ船は買い取られ、深堀のドックに繋留された。
佐野はすぐ田中久重・儀右衛門父子や、中村奇輔・石黒寛二たちに命じて解体させた。
この時、オランダ学の素養のある中村・石黒は、造船に関するオランダの原書をめくりながら、久重父子が手際よく解体する船の部品を原書と照らし合わせた。
久重自身、京都に於いて蒸気船の模型を造った経験があるから、汽船に関する知識は一通りある。しかしそれを中村・石黒のオランダ語に強い同輩が、綿密に照合してくれる作業はありがたかった。久重自身も大変勉強になった。
この辺はちょうど「蘭学事始」を書いた杉田玄白たちが、江戸小塚原の刑場で刑死した罪人の人体解剖を行い、オランダからわたってきた解剖書と照合したことによく似ている。
人間と船と一緒にするわけにはいかないが、いずれにしても江戸末期の日本の知識人たちの、オランダ学を基礎にした事物の実態を知ろうとする意欲と情熱には、頭の下がる思いがする。久重・儀右衛門父子は、そういう雰囲気の中で着々とオランダ船を解体し続けた。

佐野は更に一歩を進めた。安政５（１８５８）年９月、
「蒸気船建造工事予算書」
を提出した。いよいよ本格的に本物の船を造ろうという計画である。

鉄製蒸気船の場合	一金	三千両也（内訳付）
木造船の場合	一金	千百両也（内訳付）

しかしさすがの藩も三千両の金は出せない。そこで千百両の木造船が許可された。佐野にしても、
「駄目元」
と思っていたから喜んだ。たとえ木造にしても、「佐賀藩鍋島家で最初に造る大船」建造の許可が出たのだからみんな目を輝かせて喜んだ。責任者の人選が行われた。これが文久

３（１８６３）年３月６日のことである。

御船方掛り合　　佐野栄寿左衛門（常民）外六名

製造掛り合　　田中近江・田中儀右衛門・福谷啓吉・馬場磯吉

そして船が造られるドックは三重津ということになった。三重津は先述の通り筑後川の下流で大詫間島の西側を分流している早津江川沿いの河港である。佐賀城から二里（約８キロ）余の距離にある。

蛇足ながら、現在大詫間島を抱いて「早津江川」と「筑後川」の二本の川が流れ、佐賀県と福岡県の県境ははじめ「早津江川」沿い、そして島の南半分に達したところで横切り、後半は「筑後川」沿いとなっているが、元来の筑後川の本流は今の県境が示すように「早津江川」を流れていたという。つまり、こちらの方が流れ速い大川で、造船所として適していたようである。早津江川流域の三重津に佐賀県が造船所を造った後、久留米藩もその上流に藩の港を設置する。その場所が早津江川と筑後川の分流地「若津港」であった。

佐野常民を核として、田中久重たち関係者は早速準備に取り掛かり次のような手はずを立てた。

- 御船製造（造船所）見斗の事
- 蒸気器械（蒸気機関すなわち汽械）製造を海軍取調べ方へ嘱託の事
- 銅板注文の事
- 蒸気罐用鉄板其の他長崎にて購入の事
- 石炭囲場用鉄板買入の事

このほか樫木・樟板・硝子板などの材料を買い集める為の会合をなんども開き、着々と準備を進めた。

この大船建造の火蓋が切られた文久３年という年は、国内的にはいろいろな事件があった。

瀬戸内海の入り口である馬関（下関）海峡で、幕府が攘夷期限を文久３年５月１０日と告示したので、これを真に受けて長州藩が航行中の米国船・フランス船・オランダ船に砲撃を加えた。更に薩摩藩は、前年に国父（藩主の父）島津久光の行列を横切ったという理由で、イギリス人たちを殺傷する「生麦事件」を起こした。外国諸列強は怒り、長州藩と薩摩藩を攻撃しに、連合艦隊を組んだり、或いは単独で鹿児島湾に乗り込んだりしていた。

しかし佐賀藩鍋島家では、そういう事件とは関わりなく着々と大船建造の努力を続けていた。約２年の後、すなわち慶応元年（１８６５）に竣工した。完成した船は、長さ６０尺（約１８メートル）・幅１１尺（約３メートル）の木製外輪船で、１０馬力だった。

文久３年３月命を受け、工事二ヵ年を費やし慶応元年に竣工したが、藩主鍋島閑叟は大いに喜び、自らこの船に、

「凌風丸」

と命名した。そして、慶応３年２月１日には閑叟自ら船に乗り込み、午前９時、三重津港を出港して、近くの海を航行した。船の建造には、多くの技術者が集まってその知識と技を惜しみなく注いだ。したがって、この時田中久重・儀右衛門父子の果たした役割は、全体から見ればあるシェアを占めるのみであって、すべてを田中父子が行ったわけではない。

ところが船に乗り込んだ閑叟は特別に田中父子を呼んで、そして、

「よくここまで精を尽してくれた。礼を言う。私も日本国内において鼻が高い」

ろ褒めた。久重は感泣に咽んだ。

そうでなくても、鍋島閑叟は時々久重が住んでいる三重津の公舎にやって来る。それも夜分が多かった。とんとんと戸を叩く、

（こんな深夜にどなただろう）

と思って、

「どなたでしょうか」

と聞くと外から

「わたしだ」

という声がする。その声を聞いただけで久重には相手が誰だかわかった。びっくりして戸を開ける。すると閑叟がにこにこ笑いながら中に入ってくる。そして、

「疲れて寝ているところを起こしてすまなかった」

供も連れずに一人でやってきた閑叟は、久重に詫びた。

「夢中で本を読んでいるうち、つい寝そびれてしまった。電気学の本だが、エレキテルというのはまことに不思議な働きをするものだ」

という。まだ４０歳にならない閑叟の知識欲はきわめて旺盛で、すでに電気についてかなりの関心を持っていた。

久重も、元恭から電気について多くの知識を学んでいたから、閑叟の話はよく理解できた。二人の話は雷雲や磁石のことなどに広がっていった。気がつくとあたりはすっかり明るくなっていた。

「そのほうの話は、非常に面白かった。また勉強に来るぞ」

そう言って閑叟は帰っていった。しばらくぼんやりしていた久重は、

「水力の次は蒸気力、蒸気力の次は電気かもしれないな」

と、独り言をつぶやいた。

凌風丸が完成したとき久重は６７歳になっていた。

この凌風丸起工と同じ文久元年（１８６１）、久重父子は佐賀藩が安政３年（１８５６）オランダから１０万ドルで買った「電流丸」という蒸気船の汽罐（ボイラー）の取替え作業を行っていた。日本における最初の汽罐製造である。これが幕府の耳に入った。幕府はちょうど江戸前の石川島で軍艦千代田艦を建造中だったが、汽罐の関係がどうも思わしく

ない。そこで、

「佐賀藩に優れた西洋技術者がいる」

ということを聞き、佐賀藩に、

「千代田艦据付の汽罐と其の他二基の汽罐製造を依頼する」

という注文をだした。当然この注文はそのまま田中父子に下命された。京都の蓮池で走らせた模型蒸気船の汽罐から始まり、ようやく実物の製造にかかったのである。田中父子の技術は佐賀藩を通して、中央政府である幕府のために役立つようになったのだ。

なお、佐賀藩「電流丸」のその後は、明治元年（慶応４年）３月２６日（１８６８年４月１８日）に大阪天保山沖で日本で初めての観艦式が行われた。この時は観兵式の名称で行われ、本船はその旗艦として参加した。

そして明治４年（１８７１年）に国軍への献納の申し出があったが老朽艦のため砲のみ受け取られ、同年６月に伊万里で売却解体された。

この頃の精煉方の１０余年を振り返って、成し遂げた主要事業を列挙すると次の通りであるが、精煉方の事業は、中村奇輔・石黒寛二・田中久重三人の協力によってなされている。鍋島閑叟伝に「三人集まりて或物を成すや、中村これを草創し、石黒之を討論し、田中父子之を修飾潤色すというべき概あり」とあり、中村・石黒らの考案が機械化するのは、全く一に久重父子の技能手腕に由ったことがわかる。

嘉永５年（１８５２）１１月、（５４歳）佐賀藩は精煉方を高岸村に設置する。佐野常民の推挙により久重は同精煉方に入り、慶応２年ごろまで１３年間ほど同精煉方にあって鉄砲鋳造、造船等に関与する。

嘉永６年（１８５３）（５５歳）

８月１５日、幕府、大砲５０門の鋳造を佐賀藩に注文する。

９月１５日、幕府大船製造解禁。

１０月２日、佐賀藩さらに反射炉を多布施河岸に築造。

安政元年（１８５４）、（５６歳）久重一家佐賀へ転住。

３月２７日、多施施にて初めて大砲鋳造。

８月５日、儀右衛門事田中弥三郎（岩吉）、中村奇輔ら数名、オランダ蒸気船に乗り込み見学を命ぜられる。

１２月、１５０ポンド巨砲鋳造のため、築地土井筋に鋳造局建設、および洋式反射炉築造に着手し、水車を用いて錘鑽台木を装置する。

１２月、蒸気船製造の命くだり、三重津船屋脇に造船所建設。

安政２年６月８日、（５７歳）幕府注文の大砲２５門竣工。

６月１８日、オランダ汽船渡来につき、諸術伝習のため、本島藤太夫・佐野常民・中村奇輔・石黒寛二・田中久重・田中弥三郎ら１３名、および水夫１０人、長崎出張を命ぜられる。

８月、汽船・汽車雛形製造に関与し成功。（多布施にてデモ）

安政３年（１８５６）（５８歳）大砲方機械製造に着手。

３・４年ごろ幕府注文の大砲全部竣工、また電信機製作に関与し成功。

安政４年（１８５７）アームストロング６ポンド元込砲を製造。

文久元年（１８６１）７月、（６３歳）田中久重父子に電流丸ボイラー製造の命くだり、三重津にて起工。

文久２年、（６４歳）幕府注文のボイラー三基製造を、三重津にて起工し、翌３年１０月１１日に完成した。このボイラーは幕府が石川島にて造った軍艦千代田丸に据付られた。また、「電流丸」ボイラーも据え付けられた。

６月１３日、真木和泉、久重を久留米藩国老有馬河内に推挙し、７月４日、久留米藩主にも推挙する。

文久３年３月６日、（６５歳）蒸気船「俊風丸」建造を、田中久重父子に命ぜられる。この月、三重津に造船所を設け、蒸気船製造に着手。

慶応元年（１８６５）、（６７歳）「俊風丸」竣工。

維新の風

このほか佐賀藩精煉方に籍を置いていた頃の田中久重・儀右衛門父子の功績は、まだまだ沢山ある。電信機の製作・鋳砲技術の発揮・そのための反射炉の建設補助・蒸気機関砲の模型製作などである。

一連のこういう事業によって、閑叟率いる肥前佐賀藩はついに、

「日本一の海軍力を持つ大名家」

の名をほしいままにするようになった。

鍋島閑叟はその功績の大半が田中久重父子にあると公言していた。閑叟にすれば、

「身内のもの（佐賀藩士）の功績はいつでも褒められる。しかし他国者である田中久重たちの功は、声を大にして広く知らしめる必要がある」

という公正な評価基準を持っていた。やはり閑叟公は名君だった。

しかし、閑叟の妻は将軍家の出であり、その意味では閑叟は現将軍の親戚だ。したがって、長州藩や薩摩藩のように公然、

「幕府を叩き潰せ」

と叫ぶわけにはいかないし、またその企てに加わるわけにもいかない。とうじの風潮からすれば、もはや尊王攘夷は世論として結晶しつつあり、その中であくまでも、

「親幕の態度」

をとるのは、激流の中に立つ一本の杭に近い。しかし閑叟は退かなかった。

「大義は重んじなければならん」

といい続けた。

これに不満を持つ義祭同盟の連中は、次々と脱藩していった。そして尊王討幕運動に加わっていく。その名を書けば、枝吉神陽の元で学んだ神陽の弟副島種臣・江藤新平・大隈八太郎（重信）・島義勇などである。

はっきり言って、幕末ぎりぎりの段階における肥前佐賀藩の政事姿勢は、西南雄藩に遅れをとった。これはあげて鍋島閑叟の姿勢による。そのため、脱藩して行った義祭同盟の面々が、今で言えば駆け込み乗車のような形で、辛うじて討幕戦線に参加した。それも鳥羽伏見の戦いではない。江戸へ上った新政府軍が、江戸内における幕府軍最後の拠点として上野の山に籠もった彰義隊を攻撃したときである。この時義祭同盟の面々は、ヨーロッパ式の機関砲を持って猛攻撃を加え、大いに武勲を立てた。

新政府が編まれたのちに、

「藩閥政府だ」

と言われる。藩閥というのは、薩摩藩・長州藩・土佐藩・肥前佐賀藩を言う。つまり、鳥羽伏見の戦いまでは、討幕派としての存在意義をまったく認められなかった佐賀藩が、彰義隊攻撃によって武功を現し、強引に藩閥政府の仲間入りをしたということである。

副島・江藤・大隈たちはそれぞれ政府閣僚に登用された。島義勇は北海道開発の恩人になる。現在も、札幌市役所の一階フロアには、島義勇の銅像が飾られている。

島義勇は後に江藤新平とともに“佐賀の乱”を起こす。いわば国家反乱人になる。敗れて梟首刑（きょうしゅけい・さらし首）に処される。後の時代になって人に次のように聞かれた札幌市長は、

「国家反乱人と言われる島義勇の銅像を何故市役所の一階フロアに飾ってあるのですか」

次のように答えている。

「歴史上の人物には、それぞれ生まれてから死ぬまでの過程がある。したがって、ある時期だけをとらえてその人物を全面的に否定するのは間違いだ。島義勇にも年齢に応じた功績があり、特に若い頃はこの札幌市開発の大恩人だった。国家反乱人になったのは後半のことで、札幌市とはかかわりがない。したがって、札幌市民には島義勇さんの功績を顕彰して、大いにその功績をたたえているのです」

この歴史間は正しいと思う。

「ある事件だけで、その人物を全面的に否定しない。後半どんなことをしようとも、その人物がその地域に大なる功績をもたらしたことは評価しなければならない」

という考え方は大事である。

ところで、新政府の閣僚になった大隈重信は、

「日本国内の交通やコミュニケーション回路の設定」

に大いに力を尽す。鉄道・通信・郵便などのいわば、

「日本近代化のための大動脈」

の建設を急いだ。つまり、

「鉄道・郵便などは人体にたとえれば血管だ。したがって汽車や郵便は血液といっていい。血液がスムーズに流れなければ、人体も健康を保てない」

という。

しかしこの大隈の発言のルーツは、なんと言っても安政２（１８５５）年に故郷の佐賀多布施において見学した、あの蒸気船と蒸気機関車の模型が原点になっている。実際に池を走り回り、或いは陸路のレールの上を走り回った光景が焼きついていたからに他ならない。

そういえば、上野彰義隊を攻撃したときに使った機関砲も、佐賀精煉方で造られたものであった。造ったのは主として田中久重や義右衛門父子だ。そうなると、あの日に精煉方の庭で見た蒸気機関車と蒸気船の模型の印象は、大隈八太郎にとって相当強烈なものであったに違いない。この日の光景が何時までも頭の中に刻みつけられていたので、明治日本も近代化のためには、

「国内に蒸気機関車や蒸気船を走らせるべきだ」

と思い立ったのである。

事実あの日、大隈は佐野常民に向って、

「こういう機械は模型だけではもったいない。実際の車や船を日本国中に走らせるべきです」

と言い切った。それを新政府閣僚になって実行したのである。ということは、田中久重と義右衛門父子の技術が、佐賀藩から大きく飛び立って日本国のために活用されたと見ても差し支えないことになる。

七．和泉の久留米脱藩から寺田屋の変まで

真木和泉の脱藩と討幕運動

和泉の水田村での蟄居は１０年におよび５０才になった。この間に安政・万延・文久と時代が替わり世相は激動の嵐の中にあった。和泉が蟄居を始めた翌年、浦賀にペリー艦隊が襲来して、国内は騒然となった。嘉永７年（１８５４）にはペリーが再来し、幕府はアメリカと和親条約を結び、長崎のほかに函館と下田に港を開いた。

これを知った和泉は憤激し、水田に幽閉されたわが身を嘆いて歯軋りするばかりだった。

このころ、諸侯の間では、これまでの譜代大名による老中制度では欧米列強の進出など激変する政治に対応できないとして外様を含めた雄藩大名が参加した新しい政治制度に改革すべきであるという声が高まっていた。

両派の政争は将軍継嗣と条約勅許を巡って激しくなっていた。譜代派は紀州徳川家の慶福を推し、雄藩大名は一橋家の慶喜を推した。また、京は、水戸学に洗脳された者たちが、全国から京都を目指し、尊皇攘夷を声高に叫んで騒然となりはじめていた。安政５年（１８５８）４月、老中井伊直弼が大老に就任すると時代は大きく動きだした。井伊は一橋派を抑えるために弾圧を開始した。

世に言う安政の大獄の始まりである。ところが安政７年３月３日、雪の降りしきる桜田門外で、その大老井伊直弼が水戸浪士に襲撃され落命、全国が震撼した。文久２年（１８６２）１月１６日、急激な時代のうねりに焦慮していた和泉は薩摩の藩主島津久光が上京することを知ると、薩摩が討幕に向うと勘違いして「いざ討幕」と脱藩を決行して薩摩に向おうとした。しかし、２月１日、上府途上の薩摩藩士柴山愛次郎・橋口壮助の二人と平野国臣が水田を訪ね、久光に討幕の意思がないことを知らされる。久光は公武合体論者であることを知らされて失望する。それでも和泉は、久光を途中で要し、勅命を仰ぎ水戸浪士らと呼応して老中安藤信正以下を殺し、一気に討幕＝王政復古を実現する武力討幕に命をかけることにしたのだった。

このとき和泉は京都より鹿児島へ帰国途中の大久保利通が近日中に羽犬塚（現筑後市）を通過することを知った。和泉は大久保と会って薩摩藩の奮起を促すため、門人淵上郁太郎・吉武助左衛門および平野とともに吉武の家で２月４日夜、大久保と会見した。ところが大久保は和泉の呼びかけには積極的な反応はみせず、むしろ諌める態度であったという。

こうしたことがあった後の２月１６日、三男菅吉と甥宮崎土太郎を連れ、降りしきる雪の中を出発した。

この時、和泉に従い脱藩した者達の多くは水田近隣の農民や神官で、維新の夢を見ること

なく非業に倒れている。脱藩した和泉一行は薩摩を目指したが、薩摩では一顧だにされなかった。傷心のうちに薩摩を離れ ４ 月２１日、大坂天保山に着き、攘夷派が集まる京都伏見寺田屋に向った。寺田屋には田中河内之介ら七人を筆頭に土州吉村寅太郎・宮地宣蔵、岡藩小河弥右衛門ほか１９人、久留米藩鶴田陶治ほか６人、薩摩藩有馬新七ほか総勢４０余人の草莽（民間・在野の人、そうもう）が迎えた。この人数で幽閉中の青蓮院宮を救出し、勅命を出させ、討幕を決行する手立てだった。

メンバーには士分は少なく、郷士や農町民などいわゆる社会の底辺の草莽で、雄藩を動かすことなどまったく不可能なことだったが、和泉は「人材と時機の宣を得た」として決行に踏み切ることにした。

真木和泉の尊皇攘夷の実行計画は、いきなり結論に到達するような過激なものであった。つまり、物事を成すには、

「天の時（運）・地の利（状況と条件）・人の和（人間関係）」

の三つが備わって初めて完成する。ところが、真木の場合にはこの三条件をまったく無視して、

「正しいことを主張すれば、それは必ず実現できる」

という思い込みが激しかった。しかし、何事を成すにも、最初はこういういわば、

「勇往邁進する猪突型の唱え手」

がいなければ、ものごとは成功しない。その意味では、真木和泉は、

「尊皇討幕のパイオニア」

と言っていい。

寺田屋騒動

（有名な坂本龍馬襲撃事件も場所は寺田屋であるが、それは慶応２年（１８６６）に発生した襲撃事件のことで、本件和泉の寺田屋騒動はその４年前のことである。なお、坂本龍馬が暗殺された事件は慶応３年１８６７年「近江屋」で発生した）

寺田屋騒動とは、文久２年４月２３日（１８６２年）に薩摩藩尊皇派が薩摩藩主茂久の父で事実上の指導者・島津久光によって粛清された事件である。

藩兵千名弱を率い上洛した久光は日本中の尊王派の希望をその身に背負った。しかし久光にはこの当時は倒幕の意志はなく、公武合体がその路線であった。このことに不満を持った薩摩藩の過激派、有馬新七らは同じく尊王派の志士、真木和泉・田中河内介らと共謀して関白九条尚忠・京都所司代酒井忠義邸を襲撃することを決定し、伏見の船宿寺田屋に集ったのである。当時寺田屋は薩摩藩の定宿であり、このような謀議に関しての集結場所としては格好の場所だったようである。

島津久光は３月１６日に京都に到着していたが、彼の狙いは先述の通り朝廷・幕府・雄藩の政治的提携を図ることであり、討幕などという過激派が考えていたこととはまったく次元の違うことであった。

京都滞在中の４月２３日、伏見の寺田屋に集結した有馬新七ら自藩の尊攘派過激分子を粛清する。これが寺田屋事件である。

久光は当初大久保一蔵等を派遣しこの騒ぎを抑えようと試みたが失敗したため、彼らの同志である尊王派藩士を派遣して藩邸に呼び戻し、自ら説得しようとした。ただし万が一を考え、鎮撫使には特に剣術に優れた藩士を選んだ（大山綱良・奈良原繁・道島五郎兵衛・鈴木勇右衛門・鈴木昌之助・山口金之進・江夏仲左衛門・森岡善助。さらに上床源助が志願して加わり計９名）。

大山綱良らは新七に藩邸に同行するように求めたが新七はこれを拒否し、“同士討ち”の激しい斬りあいが始まった。この戦闘によって討手１人（道島五郎兵衛）と新七ら６名（有馬新七・柴山愛次郎・橋口壮介・西田直五郎・弟子丸龍助・橋口伝蔵）が死亡、２名（田中謙助・森山新五左衛門）が重傷を負った。また２階には多数の尊王派（大山巌・西郷従道・三島通庸・篠原国幹・永山弥一郎など）がいたが、大山綱良らが刀を捨てて飛び込み必死の説得を行った結果、残りの尊王派志士たちは投降した。

同宿に居た和泉らも捕らえられ、和泉らは久留米藩大坂屋敷に引き渡された。負傷者 2 名は切腹させられ、尊王派の諸藩浪士は諸藩に引き渡された。引き取り手のない田中河内介らは薩摩藩に引き取ると称して船に連れ込み、船内で斬殺され海へ投げ捨てられた。斬った柴山矢吉は後に発狂したという話がある。彼だけでなく、鎮撫使側の人間は不幸な末路をたどったものが多い。一方で、尊皇派の生き残りは多くが明治政府で要路に立った。この事件によって朝廷の久光に対する信望は大いに高まり、久光は公武合体政策の実現（文久の改革）のため江戸へと向かっていった。

なお、この事件が発生する前の４月１６日に、久光は近衛忠房らに公武合体を説いた意見書を提出し、朝廷から浪士鎮撫の勅命を受けていた。

事件後、久光は予定通り、公武合体の企画を推進する。そして、朝廷に対する久光の働きかけにより５月９日、幕政改革を要求するため勅使を江戸へ派遣することが決定され、久光自身が勅使随従を命じられる。 幕府への要求事項として、以下の「三事策」（1.は長州藩、2.は岩倉具視、3.は薩摩藩の各意見を採用したもの）が決められた。

１．将軍徳川家茂の上洛
２．沿海５大藩（薩摩藩・長州藩・土佐藩・仙台藩・加賀藩）で構成される五大老の設置
３．一橋慶喜の将軍後見職、前福井藩主松平春嶽の大老職就任。

久光は５月２１日に勅使大原重徳に随従して京都を出発、６月７日に江戸へ到着する。

当地において勅使とともに幕閣との交渉に当たり、７月６日に慶喜の将軍後見職、９日に春嶽の政事総裁職の就任を実現させる（文久の改革）。

勅使東下の目的を達成したことで、８月２１日に江戸を出発、東海道を帰京の途上、武蔵国橘樹郡生麦村（現神奈川県横浜市鶴見区）でイギリス民間人４名と遭遇し、久光一行の行列の通行を妨害したという理由で随伴の薩摩藩士がイギリス人を殺傷する生麦事件が起こる。 閏８月６日に京都へ到着、９日に参内して幕政改革の成功を復命した後、２３日に京都を発し帰藩する（9 月 7 日鹿児島着）。 イギリス人殺傷の一件は結果的に、翌文久３年（１８６３）７月の薩英戦争へと発展することになる。

寺田屋騒動の後始末（久留米藩）

和泉は久留米に連れ戻されると、天下の大罪人として荘島小路の揚屋（牢屋）に収監された。捕り手の手を逃れた池尻茂左衛門たちが和泉の助命を願って立ち働き、議奏正親町三条実愛より久留米藩主頼咸に和泉解因の命が下された。

翌文久３年２月に赦されると、和泉は早速、藩主有馬慶頼（後の頼咸・よりしげ）に対し「急務三十条」を書いて献上した。

そして２月１６日、和泉に、朝廷の御用により上京するよう達しがあった。この頃長州藩急進派は三条実美と手を組んで朝廷を操っていて、3 月１８日、天皇の親兵創設を布告した。久留米藩は和泉を親兵頭取に任じ、真木党２２名をこれにあて出立させることにした。

これに対して藩士の間から、久留米藩を代表する親兵に神職や農町民など軽輩の者ばかりで藩士が居ないことに久留米藩の一大恥辱との批判が出た。和泉ら真木党はこの批判を封じ、さらに藩の方針を尊攘の一途にすべく国家老有馬監物の襲撃を謀ったため、監物側は一族郎党が屋敷に立て籠もって完全武装で対峙するという騒ぎがあった。

４月１２日、これを憂いた吉村武兵衛・本庄仲太・梯譲平・石野道衛らがひそかに登城して藩主頼咸に謁見し、和泉らの非を説き、捕縛について許可を得た。

翌１３日に「和泉捕り」といわれる弾圧がおこなわれ、真木党２８人は逮捕され尋問が始められた。これで藩内の尊攘派は一掃されたのである。公武合体派は死刑に処せよと藩庁に迫った。和泉らの命は風前の灯となった。

これを知った在京の長州藩の尊攘派は、三条実美・姉小路公知を動かし久留米藩京都藩邸に和泉の解因を命じた。５月１１日、頼咸は総登城を命じて和泉らの処分を問うたが、藩士の意見はこの際、久留米藩にただただ災いをもたらすだけしかない獅子身中の虫を取り除くべきだとの意見に決した。１日前の１０日には、長州藩の攘夷が決行され、馬韓で外国船砲撃が行われたばかりだった。馬関に居て和泉の危急を知った公卿の中山忠光が久留米に急行、和泉の解因を藩庁に談判した。相次いで長州藩からも使者が使わされ、和泉

の解因を迫った。頼咸は藩校明善堂に再び藩士を招集し、和泉一統を解因して多くの者を親兵として京都に登らせることを伝えた。

和泉と犬猿の中になっていた家老有馬監物も藩命により家来白井崇太郎以下１８人と真木党の池尻茂左衛門（葛覃）など８人を連行して上京、６月１９日京の頂妙寺に入った。勿論和泉とは別行動で、和泉は半月ほど前に上京していた。監物はこの頃はまだ、攘夷派に理解を示していた。彼が開国派に転ずるのは今井栄の薦めで長崎へ出張してから以降のことである。気に食わない真木党と京都へ同道したのは、藩命であり、致し方なかったのであろう。

上京の途中、６月１１日、攘夷の点で一致していた監物と池尻茂左衛門（葛覃）は、長州藩主毛利敬親親子と家老宍戸備前守等と会談し、（わずか半月ほど前、和泉も上京途中、毛利敬忠父子と面談している）尊攘について論じ、大里に砲台を築き、長州の外国船打ち払いに応援することを約束した。

一方、上京した和泉は学習院に出仕を命じられていた。

この頃、京都に集まった尊攘派は、

将軍の上洛

攘夷期限の約束

を求め、ついに第十四代将軍徳川家茂を上洛させた。この時真木和泉が中心になって、天皇の大和行幸を企てた。これは、

「橿原神宮の前で天皇は攘夷討幕を宣言し、供奉する大名や志士軍を親兵とし、江戸城に向かう」

という凄まじいものであった。つまりその過程を無視して、いきなり結論に到達するような激しい政治論を展開した。

京都に到着した有馬監物も学習院の評議に出席し、真木和泉守に同調し、長州の国老益田らと共に天皇に攘夷決行の大和行幸をすすめた。８月１４日に京を離れて帰途に着いたが、その後間もなく、公武合体派の会津・薩摩のひそかな策動で８月１８日、尊攘派の公卿三条実美以下の七卿が長州に走る政変が突発した。

有馬監物は尊攘派だが、朝廷と幕府の関係ではあくまで公武合体説を持した。参政不破美作も同じく公武合体・攘夷の考えだった。

この両人は、８月１８日の政変で久留米に逃げ帰ってきた真木党の者全部を捕え、さらに久留米に残っていた真木党の木村三郎、池尻茂左衛門、西原湊なども捕らえて獄に投じた(２５名)。後に赦免された 14 名を除き、木村、西原らは慶応３年１１月まで５ヵ年、池尻は

慶応４年(明治元年）まで公武合体派が一掃されるまで幽閉された。

京都や長州にあった真木党の勤皇派はこの弾圧に逃れたとはいえ、８月１８日の政変直後に大和に兵を挙げた天誅組に参加した和泉守門下生の荒巻羊三郎・酒井伝次郎・江頭種八らは幕軍に捕らえられて京の獄中で刑死し、その首領の真木和泉は元治元年７月の蛤御門の戦い（禁門の変）で敗れて天王山で自刃してしまい、水野正名らは大宰府で五卿の警備に当るなどと、久留米に勤皇党の姿はなくなり、久留米藩政府は監物（河内）・美作以下の公武合体派一色になった。

間もなく有馬監物・不破美作は文明開化の進歩思想を抱く今井栄に説かれて、今井の論に共鳴、従来の攘夷思想を捨ててしまい、公武合体、開港開明を藩の政治方針と定め、明治維新まで、この方針のもとに進歩的な藩政を強力に推進した。

翌元治元年（１８６４）１月には、汽船雄飛丸を購入して洋式海軍を創設すると共に、３月には急進尊攘論脱藩の者を厳科にすべき旨を布告し、脱走のものは斬殺すべしと命令して、真木党を押え、進歩的政策をぐんぐん進めた。河内・美作によって幽囚、圧迫を受けた真木党は両人を憎み、これが明治になって真木党が勢力を盛り返すと、明治初年から二年にかけての惨劇をもたらす原因の一つとなった。

八、生麦事件

文久２年（１８６２年)、薩摩藩主島津忠義（当時茂久）の父・島津久光は、幕政改革を志し、７００人にのぼる軍勢を引き連れて江戸へ出向いていたが、ほぼ目的を達し、勅使・大原重徳とともに京都へ帰る運びとなった（久光は都合三回鹿児島より上京しているが、文久２年がその初回である)。久光は大原衛門督の一行より一日早く、８月２１日に江戸を出発したが、率いた軍勢は４００人あまりであったと『薩藩海軍史』は記している。４００人とはいうものの、これは正規の藩士の数であり、荷物を運ぶなど下働きの人数は別で、しかも武器弾薬を多量に携えての大規模な行列だった。

行列が生麦村に差し掛かった折、騎馬のイギリス人と行き会った。横浜でアメリカ人経営の商店に勤めていたウッドソープ・チャールズ・クラーク、横浜在住の生糸商人ウィリアム・マーシャル、マーシャルの従姉妹で香港在住イギリス商人の妻であり、横浜へ観光に来ていたマーガレット・ボロデール夫人、そして、上海で長年商売をしていて、やはり見物のため来日していたチャールズ・レノックス・リチャードソンである。４人はこの日、東海道で乗馬を楽しんでいた。

生麦村住人の届け出書と神奈川奉行所の役人の覚書、そして当時イギリス公使館の通訳見習だったアーネスト・サトウの日記をつきあわせてみると、ほぼ以下のようなこととなる。

行列の先頭の方にいた薩摩藩士たちは、正面から行列に乗り入れてきた騎乗のイギリス人４人に対し、身振り手振りで下馬し道を譲るように説明したが、イギリス人たちは、「わきを通れ」といわれただけだと思いこんだ。「わき」といったところで、行列はほぼ道幅いっぱいにひろがっているので、結局４人は、どんどん行列の中を逆行して進んだ。鉄砲隊もつっきり、ついに久光の乗る駕籠のすぐ近くまで馬を乗り入れたところで、供回りの藩士たちの無礼を咎める声に、さすがに、どうもまずいとは気づいたらしい。しかし、あくまでも下馬して敬意を表するという発想はなく、今度は「引き返せ」といわれたと受け取り、馬首をめぐらそうとして、あたりかまわず無遠慮に動いた。そのとき、数人の藩士が抜刀し、斬りかかった。４人は驚いて逃げようとしたが、すでに遅かった。リチャードソンは、肩から腹へ斬りさげられ、臓腑が出るほどの重傷で、桐屋という料理屋の前から２００メートルほど先で落馬し、追いかけてきた藩士にとどめを刺された。

マーシャルとクラークも深手を負い、ボロデール夫人に、「あなたを助けることができないから、ただ馬をとばして逃げなさい」と叫んだ。夫人も一撃を受けていたが、帽子と髪の一部がとばされただけで、無傷だった。マーシャルとクラークは、血を流しながらも馬をとばし、神奈川のアメリカ領事館（本覚寺）へ駆け込んで助けを求め、ヘボン博士の手当を受けることになった。無傷のボロデール夫人が、まっさきに横浜の居留地へ駆け戻り、救援を訴えた。

『薩藩海軍史』によれば、リチャードソンに最初の一太刀をあびせたのは奈良原喜左衛門であり、さらに逃げる途中で、久木村治休が抜き打ちに斬った。落馬の後、「もはや助からないであろう」と介錯のつもりで止めをさしたのは、海江田信義であったという。なお、当時近習番だった松方正義の直談によれば、駕籠の中の久光は「瞑目して神色自若」であったが、松方が「外国人が行列を犯し、今これを除きつつあります」と報告すると、おもむろに大小の柄袋を脱したという。つまり、いつでも自ら刀が抜けるよう準備をしたのである。

生麦事件は、東禅寺事件など、それまでに起こった攘夷殺傷事件とはちがって個人的な行為ではなく、大名行列の供回りの多数が、無礼を咎めて一斉に抜刀したものであり、たとえ直接久光の命令がなくとも、暗黙の了解のもとに行われていたことは歴然としている。事件直後、各国公使、領事、各国海軍士官、横浜居留民が集まって開かれた対策会議でも、「島津久光、もしくはその高官を捕虜とする」という議題があがっていて、下手をすれば戦争に直結しかねないだけに、イギリス公使館も対処の仕方に苦慮を重ねることとなる。

ボロデール夫人の要請に応えて、最初に動いたのは、イギリス公使館付きの医官だったウィリアム・ウィリスである。騎馬で、まだ続いていた薩摩藩士の行列のわきをすりぬけて生麦に向かううちに、横浜在住の加勢の男たち３人が追いついてきて、やがて、イギリスの神奈川領事・ヴァイス大尉率いる公使館付きの騎馬護衛隊も追いついた。一行は、地元住民の妨害を受けながらも、リチャードソンの遺体を発見し、横浜へ運んで帰った。

実のところ、イギリス代理公使ジョン・ニール中佐は、薩摩との戦闘が起こることを危惧して、騎馬護衛隊の出動を禁じていた。それを無視して、ヴァイス領事が出動したことで、二人の間には確執が生じる。事件当日の夜から翌朝にかけて、横浜居留民の多くが、遺体収容を果たしたヴァイス領事を支持して、武器をとっての報復を叫んでいた。フランス公使デュシェーヌ・ド・ベルクールが、それを応援するようなそぶりを見せていたことも、居留民たちの動きを加速した。しかしニール中佐は冷静で、現実的な戦力不足と、全面戦争に発展した場合の不利を説いて騒動を押さえ込み、幕府との外交交渉を重んじる姿勢を貫いた。

一方、島津久光は、その夜、横浜に近い神奈川宿に宿泊する予定を変更して程ヶ谷宿に宿泊した。一行の中にいた大久保利通の当日の日記によれば、横浜居留地の報復の動きを警戒して、藩士二人が探索に出ている。天領である生麦村の村役人は直ちに事件を神奈川奉行に届け出、これを受けて調査を開始した神奈川奉行は久光一行に対し使者を派遣し事件の報告を求めたが、久光一行は翌日付けで「浪人３、４人が突然出てきて外国人 1 人を討ち果たしてどこかへ消えたもので、薩摩藩とは関係ない」という人をくったような届け出書を出し、神奈川奉行が引き止めるのを無視してそのまま急いで京へ向かった。当時、薩摩藩が幕府を軽視していたことが伺え、すでにこのとき「イギリスが文句があるのならば直接相手をする」という意志を固めていたという見方もある。神奈川奉行からの報告を受けた老中板倉勝静は薩摩藩江戸留守居役に対し事件の詳しい説明を求めたところ、数日

後に「足軽の岡野新助が、行列に馬で乗り込んできた異人を斬って逃げた。探索につとめているが依然行方不明である」という、これまたでたらめな届け出を提出した。神奈川奉行からの詳細な報告を受け事件の概要を把握していた幕府ではこのデタラメな届け出に憤り、薩摩藩江戸留守居役に出頭を求め糾弾したが、薩摩藩側はシラを切り通した。

薩摩のこの態度には、理由がないわけではない。久光が江戸に到着して間もない６月２３日、薩摩藩は幕府に、訴え書きを提出していた。その文面によれば、往路ですでに久光の行列は、騎馬の外国人に遭遇していた。狭い東海道で、日本人の通行にはかまわず、横に並んで広く場所をとり、不作法が見受けられる、というのである。続けて、「久光も少々のことには目をつぶれ、と藩士たちに達してはいるが、先方に目にあまる無礼があった場合は、そのままにするわけにもいかない。各国公使へ不作法はつつしむように達して欲しい」と、訴えている。それに対する幕府の返答は、「そういう達しはすでに出しているが、言葉も通じず、習慣もちがうことから、我慢して穏便にすませて欲しい」というその場しのぎのもので、実のところ幕府は、「大名行列への不作法をつつしんでもらいたい」などという達しは出していなかった。

事件から５０年以上の後、明治４５年（１９１２年）７月２日付けの鹿児島新聞において、久木村治休はインタビューに答え「その時分は異国人となると誰も切って見たい見たいと焦っている時で俺も切ってみたくて腕が鳴って仕様がなかった。切ってみたいもんぢゃナァとは思ったが無闇に切るわけにも行かず」と語っている。はるか後年の回顧なので信頼はおけないが、薩摩から出て、初めて傍若無人に行動する多数の外国人を見て、攘夷気分を昂ぶらせていた藩士も多かったこと、しかも当時、攘夷殺傷は一般に英雄行為として称えられていたことなどは、他の資料からも裏付けられ、事件は起こるべくして起こったともいえるのである。

背景

アーネスト・サトウ（後述）は、後年、イギリス人の知人への書簡にこう書いている。「……あなたの東方問題に関する長文のお手紙は大変私には興味がありましたが、それについて詳細に申し上げ、またリチャードソン事件についての情報を差し上げる時間はありません。あの当時の日記に私は註釈をつけて置きましたが、それらは舞台裏にいなかった１９歳の少年のものであります。私の記憶に最もなまなましく残っている事実は、他の人々全員に先んじてウィリスが単独で東海道を馬に乗って、負傷者が横たわっている米国領事館まで行き、そのうちの何人かが、おそらく襲撃に加わった薩摩藩のサムライたちのなかを切り抜けたことです。彼が危害を加えられなかったという事実は、その場に現れたかも知れないすべての外国人たちを殺傷することが、島津三郎の家来たちの心中にはなかったこと、そしてリチャードソン殺害は双方の不幸な大失策であったということです。当時私が

耳にしたのは、彼が馬の向きを変えたとき、島津三郎の駕籠に近過ぎ、どうかしてそれに触れたか、おそらく棒の先端に触れたかしたということです。しかし、これが実際に起こったとか、そして一行をサムライたちの怒りに曝したなどと私は主張する気はありません」

この手紙を書いたとき、アーネスト・サトウはまだ現役のイギリス外交官（モロッコ駐在特命全権公使）であり、リチャードソンへの非難を明言することはひかえたものと受け取れるが、事件当時の日記にも、リチャードソンに対して、同情的な言及はない。これは、当時の清国北京駐在イギリス公使フレデリック・ブルース（エルギン伯爵ジェイムズ・ブルースの弟）が、リチャードソンに対して、冷ややかな見解をもっていたことにも関係していると思われる。

ブルース公使は、本国の外務大臣ジョン・ラッセル卿への半公信（半ば公の通信）の中で、こう書いている。「リチャードソン氏は慰みに遠乗りに出かけて、大名の行列に行きあった。大名というものは子供のときから周囲から敬意を表されて育つ。もしリチャードソン氏が敬意を表することに反対であったのならば、何故に彼よりも分別のある同行の人々から強く言われたようにして、引き返すか、道路のわきによけるかしなかったのであろうか。私はこの気の毒な男を知っていた。というのは、彼が自分の雇っていた罪のない苦力に対して何の理由もないのにきわめて残虐なる暴行を加えた科で、重い罰金刑を課した上海領事の措置を支持しなければならなかったことがあるからである。彼はスウィフトの時代ならばモウホークであったような連中の一人である。わが国のミドル・クラスの中にきわめてしばしばあるタイプで、騎士道的な本能によっていささかも抑制されることのない、プロ・ボクサーにみられるような蛮勇の持ち主である」

以上に見るように、生麦事件は、リチャードソン一行の現地蔑視からくる礼儀を欠いた行動によって発生したものであり、上海におけるリチャードソンのふるまいにも粗暴なものがあって事件を引き起こしていることから、イギリス外務省も、内々には非を認めていたものと推測できる。ただ、ブルース公使も書いているように、極東に進出していたイギリスのミドル・クラスの人々には、現地の習わしをふみにじる粗暴なタイプも多く、上海の商人仲間におけるリチャードソンの評判は、かならずしも悪くはなかったようだ。イギリス外務省も、その指令を受ける在日イギリス公使館も、横浜居留商人などの強硬論や被害者家族の訴求を、無視することはできなかった。

さらに肝心な点は、日英修好通商条約による治外法権の規定により、日本の側にはイギリス人を裁く権利は存在しなかった事である。つまりイギリス側から言うならば、イギリス人が日本の法律に従う所以はなく、たとえ日本の国内法で無礼討ちが認められていようとも、当然のことながら、それはイギリス側からは認められるものではなかった。一方、薩摩藩側から見るならば、「国内法との整合性がつかない治外法権を含んだ条約は、朝廷の許しも得ず幕府が勝手に結んだもの」ということになるのである。したがってこの事件は、治外法権が日本国内にもたらす矛楯を大きく露呈させたものでもあり、以降、薩摩藩が真剣に、朝廷を中心として条約を結び直すための条件整備について、模索をはじめるきっか

けともなった。

事件直後に現場に駆けつけたウィリス医師は、リチャードソンの遺体の惨状に心を痛め、戦争をも辞すべきでないとする強硬論を持ちながらも、一方で兄への手紙にこう書いている。「取るに足らぬ外国人の官吏が、もしそれが同国人であったならば故国のならわしに従って血闘に価するほどの態度で、各省の次官に相当する日本の高官をののしったりします。また、英国人は威張りちらして下層の人たちを打擲し、上流階級の人々にもけっして敬意を払いません。このような態度の大部分はすべての外国人に共通したものなのですが、とりわけ現地の人々のあいだに非友好的な嫌悪の種をまいたのはわれわれ英国人です。-中略-誇り高い日本人にとって、もっとも凡俗な外国人から自分の面前で人を罵倒するような尊大な態度をとられることは、さぞ耐え難い屈辱であるにちがいありません。先の痛ましい生麦事件によって、あのような外国人の振舞いが危険だということが判明しなかったならば、ブラウンとかジェームズとかロバートソンといった男が、先頭には大君が、しんがりには天皇がいるような行列の中でも平気で馬を走らせるのではないかと、私は強い疑念をいだいているのです」

こういった当時の横浜居留民の常態を考えれば、薩摩藩が、すでに往路で事件が起こりかねなかった状況を訴えていたにもかかわらず、島津久光一行の東海道通行とそれにともなう外国人通行自粛の要請を、幕府が各国公使館に、正式に通告していなかったことの問題は大きい。この不手際は、事件後のイギリスとの外交交渉においても、幕府側の弱みとなり続けた。条約により、居留地を中心として十里四方の外国人の遊歩は自由とされていたことから、幕府の規制要請がない限りにおいては、リチャードソン一行の行動がいかに無礼なものであろうとも、通行の安全を保障すべき幕府の責任を、イギリス側は強硬に追求することができたのである。

余波

事件から二日後の８月２３日、ニール代理公使は、横浜において、外国奉行・津田正路と会談した。この会談で、ニールは、「勅使の通行は連絡があったのに、なぜ島津久光の通行は知らせてこなかったのか」と追求した。これに対して奉行は、「勅使は高貴だが、大名は幕府の下に属するもので達する必要はない。これまでもそれで問題はなかった」と答えて、「勅使より薩摩藩の通行の方が問題が起こる可能性が高いのはわかりきった話だろう」と、ニールに指摘されている。すでに、幕府の統制が及ばないことがはっきりしている薩摩藩を、「大名は幕府の下にあるのであり、さらに島津久光は元藩主でしかない」という幕藩体制の形式的な身分論でのみとらえて、その幕府の本音を外交上の重要な場面で持ち出すというのは、幕府側に政権当事者としての現実認識が欠けている、といわれても仕方がない。

これでは最初から、「大名など身分が低く尊重する必要はないので、無礼をはたらいても

かまわない」と認めてかかっているに等しい。ニールは、本国の外務大臣への報告書に、勅使通行の知らせは受けたが久光通行の知らせはなかったことを明記して、外交上自国に有利な幕府の過失を指摘している。

当然のことながら幕府は、軍勢を率い、勅使をともなって、幕政に口を出しに来た島津久光に対して、敵意をもっていた。そのため、生麦事件の知らせに、「薩摩は幕府を困らせるために、わざと外国人を怒らせる挙に出たのだ」と受け止める幕臣が多数で、薩摩を憎み、イギリスを怖れることに終始し、対策も方針もまったくたてることができないでいたという。

一方、攘夷を歓迎していた東海道筋の庶民は、「さすがは薩州さま」と歓呼して久光の行列を迎えたという。京都の朝廷もまた、久光を称えた。この事件を題材に、山階宮晃親王が作った「薩州老将髪衝冠 天子百官免危難 英気凛々生麦役 海辺十里月光寒」という漢詩は、明治になって愛唱された。

しかし、生麦事件をきっかけとして、朝廷が攘夷一色に染まってしまったことは、久光および薩摩藩の思惑を超えた結果だった。薩摩藩が幕府に対して抱いていた不満は、むしろ、幕府が外国貿易を独占していたことにあったのである。生麦事件のわずか９日前、ジャーディン・マセソン商会横浜支店の S.J.ガウアーが、ヴァイス領事に出していた報告書には、「独立心に富んだ大名は、心底から攘夷を望んでいるのではなく、外国との交易をこそ望んでいるのに、幕府に不当に妨害されている。外国船を購入するだけでも、幕府の役人に邪魔をされる状態だ。先日船を買いに来た強大な大名の代理人は、幕府に介入されることなく取り引きができるよう、イギリスは自分の藩と通商条約を結ばないだろうか、といっていた」というように記されていた。萩原延壽氏は、『遠い崖ーアーネスト・サトウ日記抄』で、このガウアーの報告書を紹介し、同時に「強大な大名の代理人」とは、薩摩藩の小松帯刀ではないかと推測している。この報告書に近い時期（8 月 5 日）に、小松帯刀は実際にジャーディン・マセソン商会に出向いて汽船を購入しているのである。

文久３年（１８６３年）の年明け早々、生麦事件の処理に関するイギリス外務大臣ラッセル卿の指示が、ニール代理公使のもとへ届いた。幕府に対しては「公式の謝罪と罰金１０万ポンド（４０万ドル)」、そして薩摩藩には幕府の統制がおよんでいないらしいとの見極めから、薩摩藩に対して「犯人の処刑と賠償金２万５千ポンド（１０万ドル)」を求めるもので、話し合いでそれを拒んだ場合は、船舶の捕獲や海上封鎖、薩摩に対しては状況によっては砲撃も考えて対処するように、というものだった。「船舶の捕獲や海上封鎖」というのは、戦闘状態への突破口であり、こういった海上兵力による脅しを、自国居留民の安全をはかりながら実行しろ、というのである。その苛酷な内容は、ニール代理公使をたじろがせるものだったが、本国の命令には逆らえない。なんとか実行すべく、イギリス極東艦隊に要請して、可能なかぎりの数の軍艦を横浜に集めた。

当時イギリス外務省にいて、後に日本へ外交官として赴任することになる A.B.ミットフォードは、「ラッセル卿は外務大臣として外交センスに欠けていた。強気に出るべきところ

で出ず、不必要なところで強気の言動を見せすぎて摩擦を引き起こしたりした」というようなことを述べている。実際、生麦事件に関しても、薩摩に対する対処として「砲撃」に関する指示があいまいであったことから、薩英戦争の後に、「城下町砲撃は過剰攻撃だった」とイギリス議会で問題になった。

海軍力を背景としたニール代理公使のねばり強い交渉の結果、幕府は要求に応じたが、薩摩との交渉は決裂し、薩英戦争にいたることとなった。しかし、ニール代理公使が７隻のイギリス軍艦を引き連れて薩摩に出向く以前に、すでにガウアーは、「薩摩は幕府を介して事件を解決することをいやがっているだけで、独立を確保するために、イギリスと友好条約を結びたがっている」という情報を公使館にもたらし、幕府の中でも事情通の若年寄・酒井忠毗は、薩摩とイギリスの接近を怖れて、薩摩行きを取りやめるよう、直接ニールに訴えている。

薩英戦争後の薩摩とイギリス公使館の急接近は、すでにそれ以前から用意されていたもので、戦闘の勃発も、結局それを妨げることがなかった。むしろ薩摩とイギリスが戦争をはさんで直接交渉する機会を与える事となり、接近を促進することになった、ともいえる。結果論ではあるが、生麦の惨劇は、幕藩体制の矛盾を、諸外国に向けて露呈させるきっかけとなった

アーネスト・サトウ

このアーネスト・サトウについて筆者は、日本人とばかり思い込んでいた。ところが、１８４３年ロンドン生まれの生粋のイギリス人であることを知って大変驚いたことがある。１９２９年に亡くなっているが、下記するように日本滞在は２５年に及んでいる。通訳とされているので民間人かと思っていたのであるが、れっきとした外交官で、後に駐清公使も務めている。

生麦事件のとき、彼が薩摩藩との間の通訳として活躍したことは前記したが、「一外交官の見た明治維新」によると、彼の活動の場は相当に広く、当時の日本をくまなく知った数少ない外国人であることがわかる。

明治天皇を始めとした西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允・伊藤俊輔らの薩長の要人たちだけでなく、彼らと対峙する幕府の徳川慶喜・勝海舟とも会見している。特に勝海舟との会見の記述は興味深い。勝は幕府の情報を惜しげもなくサトウに流している。それは幕府を支援しようとするフランスに対する牽制であったことがよくわかる。勝はそれぞれ外国を後ろ盾にした官軍と幕府との内乱を極度に恐れていた。イギリスはそのことを重々承知していた。イギリスは万国公法を遵守しつねに中立を守った。そして他の外国も英国に倣って中立を守ったのである。この外国の中立は勝だけでなく、他の指導者たちが何よりも望んだことである。幕末・明治維新を通して日本が独立国として世界に認知されたのは、欧米の中立政策が大きな要因であったことは疑いない。そのために勝・西郷らは獅子奮迅

の働きをしたのである。

アーネスト・サトウ。
フリー百科事典;ウィキペディアによる。

彼の著書「一外交官の・・・」は回想録であるが、大変貴重な資料である。体験談であることは、歴史的事実を示しており、日本が攘夷から１８０度開国へ大きく舵を切った時の記録である。薩摩が生麦事件後の薩英戦争を機会に、また長州が外国船砲撃後の四国連合艦隊との下関戦争で、攘夷ではなく開国開明政策へ転換した前後の事実を証明した書なのである。

「アーネスト・サトウ（Sir Ernest Mason Satow, 1843 年 6 月 30 日 - 1929 年 8 月 26 日）は、イギリスの外交官。英国公使館の通訳、駐日英国公使、駐清公使を務め、英国における日本学の基礎を築いた。日本名は佐藤 愛之助。

1843 年、ドイツ東部のヴィスマルにルーツを持つソルブ系ドイツ人（当時はスウェーデン領だったため出生時の国籍はスウェーデン）を父、イギリス人を母（旧姓、メイソン）としてロンドンで生まれた。1861 年イギリス外務省に入省、通訳見習として清国に赴き、1862 年 9 月 8 日、英国駐日公使館の通訳見習として来日した。その直後の 9 月 14 日、生麦事件が勃発した。当時、駐日総領事ラザフォード・オールコックは一時帰国していた。1863 年には薩英戦争の現場に立会い、1864 年には四国艦隊下関砲撃事件にも立ち会った。後に正規の通訳官及び書記官に昇進。駐日公使ハリー・パークス（在任、1865 年-1882 年）の下で活躍した。1883 年まで日本に滞在した。

1884 年-1887 年、シャム駐在総領事代理、1889 年-1893 年ウルグアイ駐在領事、1893 年-1895 年、モロッコ駐在領事を経て、1895 年 7 月 28 日、駐日

特命全権公使として日本に戻った（1900 年まで）。

1900 年-1906 年、駐清公使として北京に滞在、義和団事件の後始末を付け、日露戦争を見届けた。1906 年、枢密院顧問官。1907 年、第 2 回ハーグ平和会議に英国代表次席公使。引退後はイングランド南西部デヴォン州に隠居し、著述に従事。キリシタン版研究の先駆けとなって、研究書を刊行するなどし、のちの南蛮ブームに影響を与えた。英国大使館の桜並木は、サトウが植樹を始めたものである。

「サトウ」という姓はスラヴ系の希少姓で、当時スウェーデン領生まれドイツ系人だった父の姓であり、日本の姓とは関係はなかったが、親日家のサトウはこれに漢字を当てて「薩道」または「佐藤」と日本式に姓を名乗った。本人も自らの姓が日本人に親しみやすいものだったため、大きなメリットになったと言っていたらしい。

『一外交官の見た明治維新』の著者としてアーネスト・サトウは現在日本で有名な人物ではあるが、それにとどまらず明治時代前期の外国人キー・パーソンと言っても過言ではない。司馬遼太郎とドナルド・キーンの対談『日本人と日本文化』（1984 年 4 月、中公文庫）P174 によれば、サトウは、1866 年（慶応 2 年）、週刊『ジャパン・タイムス』（横浜で発行）に一文を書いた。日本の将来についてのヴィジョンを述べたもので、これを、誰かが日本語に訳して、それを西郷隆盛らが読んで、「『英国策論』によると」と引いて日本の未来を語ったのだという。明治維新の原型になるような一文なのだという。日本滞在は 1862 年から 1883 年（一時帰国を含む）と、駐日公使としての 1895 年から 1900 年までの間を併せると、計 25 年間になる。

武田兼

私生活は法的には生涯独身であったが、明治中期の日本滞在時に武田兼を内妻とし 3 人の子をもうけた。兼（カネ）とは入籍しなかったものの子供らは認知し経済的援助を与えており、特に次男の武田久吉をロンドンに呼び寄せ植物学者として育て上げる。また、最晩年は孤独に耐えかね「家族」の居る日本に移住しようとしたが、病に倒れ果たせなかった。」

九．八月十八日の政変

島津久光の攘夷強硬論批判

島津久光は前年４月の上京（寺田屋騒動から生麦事件にかけて）に続いて、文久３年（１８６３年）３月に２回目の上京をする。なお３回目は８・１８政変が成功した後の、文久３年の９月１２日鹿児島発、１０月３日京都着である。

孝明天皇の賀茂社行幸の文久３年３月１４日、二回目の上京の折、島津久光は近衛邸に参上した。そこには中川宮や近衛忠熙・権大納言忠房をはじめ、関白鷹司輔熙、朝彦親王、将軍後見職一橋慶喜、京都守護職松平容保、前土佐藩主山内容堂らが集まっていた。

この席で久光は、いま行おうとしている「攘夷拒絶」すなわち破約攘夷の一方的な実行は、決して行うべきではないと強く主張し、かつ「浮浪藩士の暴説」を信用してはならぬこと、その「暴説」を信用する公卿をさけること、浮浪藩士の「暴説家」すなわち攘夷強硬論者を朝廷周辺から排除すべきであることなど、朝廷政治の改革が必要であることを提言した。浮浪とは脱藩士や真木和泉など、武家の主家を持たない身分のものをさしていた。

この提言に対して、一人として意見を述べるものがなく、翌日もなにひとつ反応がなかった。彼らは攘夷強硬論者と対決することを、明らかに恐れていたのである。長州藩を後ろ盾にした尊攘急進派の専横を抑えられず久光は失望のまま、近衛が引き止めるのを振り切って、１８日に京都を発って帰国した。わずか４日間の京都滞在であった。

久光が朝廷政治の中枢から排除すべきであるとした公卿は、名前は出さなかったが議奏三条実美であることは皆分かっていた。しかしそのまだ若い２６歳の三条に逆らいがたいのである。どうして三条は急速にそのような力を持つに至ったのか、その背景のひとつとなったのが朝廷の政治組織の改変である。

前年１２月９日、朝廷内に国事御用掛が新設され、朝彦親王をはじめ２９人の公卿が御用掛に任命された。この中には、関白、左右大臣、内大臣、議奏、武家伝奏の従来「政務の公家」と言われた朝議構成員に加え、公家社会では地位の低い権中納言三条西季知や左近衛権少将東久世通禧などの攘夷強硬論の公家が加わっていた。国事御用掛は月に１０日、小御所に出て国事について議する職務とされた、朝議の補佐機関である。

ついでこの文久３年２月１３日に国事参政の４人と国事寄人に１０人、計１４人の公家が就任した。このうち４人は国事御用掛から転じた人物で、１４人中１１人が、この後８月１８日の政変で処分を受けた攘夷強硬論の公家である。

このように朝議に強い影響を及ぼす、攘夷強硬論者の圧力集団が朝廷内に組織化され、そのリーダーが三条実美だったのである。また４月３日、三条が京都御守衛御用掛に就任

し、諸藩兵によって組織された親兵一千余の統括者となった（和泉他久留米藩士を含む）。ついに彼は武力も手中にするところとなったのである。そして長州勢約２６００名が、三条の背後に控えていた。

三条が意図的に、或いは権力欲によって、このような政治環境を作ろうとしたものではないだろう。変革期の激流が、本人が意識するまもなく、権力の座へ押し上げていったのである。しかし、やはり当然のことながら、三条は自分の持つ力を意識し、やがて過信に陥ってゆく。

孤立する天皇

５月３０日付けの近衛忠熙の手紙とともに、孝明天皇の内命（宸翰）が鹿児島の島津久光に届けられた。下の者（三条らをさす）の威が盛んで、自分の意志が彼らによって曲げられ、偽勅が出されるありさまだ、天皇の位など「有名無実」と同じで「悲嘆至極」である、上京して「一奮発」して「姦人を掃除」してもらいたい。このように朝廷内の攘夷強硬論者に対する嫌悪をあらわに記して、朝廷からの排除を久光に頼んだ内命であった。

天皇は破約攘夷の実現を望んではいたが、外国との武力対決に至るような過激な攘夷には反対していた。しかし長州藩の下関攘夷の決行によって、その心配が生じていた。にもかかわらず三条らの強硬論はますます急進化し、明らかに天皇の気持ちをないがしろにするようになっていた。主体的に考え発言する天皇にとっては、我慢のならない状況となっていたのである。

この頃、朝廷内において天皇が心を許して率直に相談できる人物は、朝彦親王と近衛忠熙だけとなっていた。近衛は関白を辞職した後、３月２５日には内覧も辞して、朝廷内における政治力はほとんどないに等しかった。関白・内覧が鷹司輔熙、左大臣一条忠香、右大臣二条斉敬、内大臣徳大寺公純、これらの上層部と天皇は、信頼関係が薄かった。また議奏（三条実美、広幡忠礼、長谷信篤、徳大事実則、飛鳥井雅典）と武家伝奏（坊城俊克、野宮定功）では、三条、広幡、長谷、徳大寺の四人は同志関係にあり、彼（三条）らの意に逆らうものは、朝議を構成するメンバーの中にいなかったのである。天皇は明らかに孤立していた。

天皇が久光に頼ろうとしたのは、前年４月に久光が上京した際の実績（寺田屋事件などで攘夷強硬論者の逸脱を制止した）を認め、かつこの３月に上京した際の朝政改革の提言を近衛と朝彦親王を通じてよく知っていたからであろう。

この時、久光は「浮浪」の「暴説」を信用する公家と「浮浪藩士」を排除せよと建白したが、天皇は久光に、この建白の趣旨を実現してくれることを期待したのである。

しかし久光は動かなかった。自分が上京しても、朝廷内に力のある協力者がいなければ、改革は難しいこと、そして今は協力者がいないことを、３月の上京の際に身にしみて実感

していたからであった。

激怒する天皇

久光の上京は、イギリスとの緊張関係（生麦事件の後始末）の中で、イギリス軍艦の鹿児島行きの情報がもたらされ、まず不可能な事情にあった。そして現実に７月２日の薩英戦争となる。これより先、６月１日のアメリカ軍艦による長州藩砲台への報復攻撃と、６月５日のフランス軍艦による砲台攻撃・占領は、その衝撃が京都にも波及して、大きな波紋を作り出していた。

攘夷強硬論者が期待したにもかかわらず、国内に攘夷の機運は盛り上がってこなかった。武家の多くは、直接口に出すことはなかったが、心の中では、長州藩の攘夷決行を迷惑と思っていた。万一日本と外国との戦争になったら、長州藩のツケを払う為に、勝ち目のない戦争に動員されるからである。例えば薩英戦争で負けなかった薩摩藩であったが、久光は幸運に恵まれた結果であり、外国側が連合して攻撃してきた場合は、まったく勝ち目がないと藩内に布達していたくらいである。

このような雰囲気の中で、京都の攘夷強硬論者は危機感を募らせていった。破約攘夷を貫徹する為にも、いなそれよりも差し迫った、外国側の報復攻撃から日本を守るためにも、攘夷の気分をさらに高揚させて、挙国一致の防衛体制を構築することが急務であると、彼らは考えた。そこで提唱されたのが、天皇が公家と武家を率いて石清水宮に行幸し、攘夷についての強い決意を行動で示して、その成功を祈願するという、親征行幸である。

石清水八幡宮は伊勢に次ぐ天皇家の第二の宗廟であり、源頼朝が鎌倉鶴岡八幡宮に勧請して以来、八幡宮は武家の崇敬の対象となっている。そうした公家と武家の両者にとっての聖なる場所へ行幸し、勅命を下して、諸国から勤王の兵を招集し、天皇自ら指揮して外夷の掃攘を命じる、と言う発想である。

分かりやすくいえば、親政とは天皇が軍事の最高責任者になると言うもの。ではもし仮に外国の軍艦が大阪湾に攻め込んできた場合を想定すると、天皇はどのような立場におかれるのか。親政を宣言した以上は、比叡山に逃げ隠れるわけにはいかないだろう。攘夷強硬論者は逆に神武東征の故事を持ち出して、天皇に奮起を求め、御所から出て兵を指揮することを要求するかもしれない、天皇はこのように考えたのではなかろうか。

天皇は前年５月に「思召書」で親政の意志があると述べていた。しかしこれは幕府に破約攘夷の実行を督促する意味で成されたものであった。天皇の本意はこの３月の勅で明らかにされたように、攘夷は将軍に委任した、将軍の責務であるというものである。天皇自身が、将軍をさしおいて、自ら「醜夷」との戦争の指揮を執ることなど、考えるだけでもおぞましい、と言うのがこの時の天皇の気持ちで、親政行幸は、何としてでも避けたいと言うのが、天皇の本心であったと思われる。

そこで７月１０日に、天皇は久光に「親政」についての「御用」もあり、かつ攘夷について依頼したいことがあるから、急々に上京するようにとの勅命を下した。内命ではなく正規の勅命である。天皇は久光の力で、親政行幸が実行されること抑え、併せて攘夷強硬論者を排除してくれることを期待したのである。薩摩藩士奈良原幸五郎が、この勅命を携えて鹿児島に急行し、２０日に久光に届けた。彼には近衛忠熙・忠房父子と右大臣二条斉敬から、天皇は親政に同意していない、至急上京するように、と記された手紙が託くされていた。

この勅命を正規の手続きでだすことが出来たのは、親政御用のために上京せよとあったからで、この文面からは天皇の本意を伺うことはむずかしい。ところが朝廷内外の攘夷強硬論者から久光の上京に対する異論が噴出して、１７日に至り武家伝奏飛鳥井雅典から、改めて命ずるから、しばらく上京を猶予せよとの指示が、京都薩摩藩邸につたえられたのであった。勿論天皇は関与していない。三条らの独断で、このように勅命が取り消されたのである。

このことを知った天皇はついに激怒した。朕が申し出たことを、毎度「押し返す」とはもっての外のことだ、もしこの後もこのようなことをするなら、自分は退位するから関白以下も辞職せよ、承知か。天皇は「逆燐」して、このように発言したのだった。天皇が三条らを激しく非難し忌避していることが、此処で朝廷内外に明らかになる。彼らの言動を苦々しく思っていた穏健派の、三条らを見つめる目が、急に冷たくそして険しくなっていった。

決断する天皇

上京取り消しの朝命と天皇が激怒したことが、今度は京都から帰国した藩士村山斉助によって薩摩藩首脳部に伝えられた。此処でついに久光が動いた。三条らの攘夷強硬論者を朝廷から排除する工作を、折り返し村山を通じて京都の薩摩藩邸に命じたのである。村山から久光の指示について報告を受けた京都薩摩藩邸の高崎左太郎が会津藩士秋月悌次郎らに相談したのが８月１３日、８月１８日政変は、ここから具体的に動き出したのであった。

京都守護職の立場にあって、天皇の怒りに胸が痛む想いであった松平容保は、家臣から告げられた薩摩藩士高崎の政変計画を受け入れ、交代のために会津へ帰国途中であった藩兵を呼び戻した。容保は前日１２日に池田慶徳と会って、慶徳から攘夷親政には承服できない旨を聞き出していた。容保が積極的になれたのは、政変に彼ら諸侯の協力が得られると確信したからであろう。

１３日、会津藩の賛成を得た高崎は、次に朝彦親王邸に行きこの計画を告げた。

この政変は、天皇のために、そして天皇の権威を回復して朝廷を正常化するためのものであるから、天皇の同意なしで行うことは出来ない。だから親王から天皇に伝えてもらわな

ければならない。近衛忠熙は内覧を辞してからは、天皇近くに出る機会もほとんどなくなっていたから、この役は親王のほかに人はいない。薩摩藩と密接な関係にある近衛が後回しになったのは、このような理由による。この後で高崎が近衛邸に行き、忠熙に計画を告げた。しかし忠熙は、朝廷内に多くの協力者が得られるかどうか不安であると、この日は慎重論であった。

１４日夜、朝彦親王がひそかに常御殿（天皇の寝所があり、日常の政務を執る間のある所）にうかがい、密談の場で天皇に計画を告げた。

１５日、高崎が政変の手順などの具体的な計画案を持って、朝彦親王邸に伺ったところ、親王自信は決断した旨を明らかにした。前夜天皇と会った際に、天皇の心中を確認できたからであろう。親王は積極的だったが、しかし近衛忠熙は成功に自信がもてず、いまだ消極的であった。

１６日、朝彦親王が早朝天皇の常御殿に伺ったが、天皇は痔を患っていたため、便所から中々出てこなかった。そのうち当番の公家の参内が始まったため密談がかなわなくなり、政変手順のあらましのみを奏上して退出した。この日の夜、天皇から手紙が親王に届けられた。おそらく同意した旨を伝えるものであった。

１７日、ここで初めて右大臣二条斉敬に、会津藩から政変計画が告げられ、二条は協力を約束した。薩摩藩側の記録の表現によれば、二条は穏健論者の「正論家」であり、三条らの「暴論家」とは距離を置いて、朝彦親王とは意見の合う間がらとなっていた。にもかかわらずここまで二条に秘密にされたのは、前日十六日に宮中で、親王と二条が同席する機会があったにもかかわらず、周りが「暴論家」ばかりで、密談できなかったからであった。同じくこの日、慎重論の近衛忠熙が、前日とは打ってかわって高崎に決心したと告げた。或いは二条の協力を知ったからかもしれない。

夜になって、朝彦親王、二条斉敬、近衛忠熙の三人がにわかに参内して、最終的に天皇の意思を確認した。天皇の決意は変わらなかった。天皇の決断、即政変の決行となった。

政変の決行、暴論家の排除

１８日、日付が変わったばかりの深夜一時過ぎ、朝彦親王、右大臣二条斉敬、内大臣徳大寺公純、前関白近衛忠熙と権大納言近衛忠房、京都守護職松平容保、京都所司代稲葉正邦が参内、かくして政変の幕が上げられた。鷹司関白には秘密にされた。

禁裏御所六門（建礼門、宜秋門、清所門、尋常門、朔平門、建春門）が閉鎖され、会津約１８８０人、淀、約４６０人、薩摩、約１５０人の藩兵によって固められた。朝になって在京の諸藩主に参内が命じられ、議奏、武家伝奏、国事御用掛、国事参政、国事寄人の全員が参内を差し止められた。これらの職についている公家に「暴論家」が多かったからである。このうち「暴論家」以外の許された公家のみが、公家門（宜秋門）で名前を改められて、参内することが出来た。ついで「暴論家」の公家には参内・他行・他人面会禁止

の処分がなされた。また国事参政と国事寄人の二職が廃止され、大和親政行幸の取り消しが布告された。

命によって諸藩主が藩兵を率いて御所に駆けつけた。その兵が御所九門（堺町門、下立売門、蛤門、中立売門、乾門、今出川門、石薬師門、清和院門、寺町門）を内側から固めた。堺町門は長州藩が警備を担当しており、騒ぎを知って駆けつけた長州藩兵との間で、この後堺町門で小競り合いとなる。参内した岡山藩主池田茂政と米沢藩主上杉斉憲が加わって朝議が続けられた。ここで長州藩の堺町門の警備を解き、藩兵を京都から引き払わせることが合意となった。

午前１１時過ぎに関白鷹司輔熙が参内した。この頃までに、三条実美ら攘夷強硬論の公家と真木和泉が、鷹司邸に入り、長州藩兵も鷹司邸に集まった。鷹司は彼らに理解を寄せる立場だったのである。午後３時過ぎに、病気を押して鳥取藩主池田慶徳が参内、また徳島藩世子蜂須賀茂韶も朝議に加わった。

ここで鷹司は、長州藩に堺町門警備を解き帰国させる命を一方的に下せば、大勢の長州藩兵が激昂して、不測の事態が生ずる恐れがあると述べて、朝議の変更を主張した。池田慶徳、上杉斉憲、蜂須賀茂韶の三人が同調した。しかし朝議はくつがえらなかった。池田、上杉、蜂須賀ともに過激な攘夷論と、武家の秩序を破壊するような、攘夷強硬論者の言動に心から共鳴できなかったのである。

柳原光愛が勅使となって鷹司邸に赴き、邸にいた三条実美らに勅命に従うよう促し、長州藩家老益田右衛門介には長州藩兵を引き取らせるよう命じた。

長州勢（約２６００）と三条とその同志は、洛東の妙法院に移った。公家は三条実美、三条西季知、壬生基修、四条隆謌（たかうた）、錦小路頼徳、沢宣嘉（のぶよし）、東久世通禧（みちとみ）、豊岡随資、烏丸光徳、滋野井実在、東園基敬の１１人、武家で主だった者は、益田右衛門介、久坂玄瑞、佐々木男也（以上長州藩）、土佐藩士土方楠左衛門、熊本藩士宮部鼎蔵、薩摩藩士美玉三平、清末藩主毛利元純、岩国領主吉川経幹、そして久留米水天宮神官真木和泉、久留米藩農民出身の活動家渕上郁太郎らであった。

会津と薩摩で作成された政変計画書には、公家以外の取り締まるべき人物の名前があげられているが、それは上記の益田、久坂、佐々木、宮部、真木のほかに桂小五郎、轟木武兵衛、松村大成、丹波出雲守、楢崎弥八郎、萩野鹿助、川上弥一の名があげられていた。

この命令に対して、真木和泉は、これから河内の金剛山で義兵をあげようと強硬論を主張したが、受け入れられなかった。長州勢は自分らが孤立した存在となったことを自覚したのである。

五卿の西遷

上述のいわゆる「七卿落ち」した三条実美、三条西季知、東久世通禧（ひがしくぜみち

とみ)、壬生基修（みぶもとなが)、四条隆調（たかうた)、錦小路頼徳（よりのり)、沢宣嘉（のりよし）ら七人は、三田尻、湯田と長州藩内に滞在していた。途中で、沢宣嘉は脱出し、福岡藩士平野国臣と共に生野で挙兵し潜伏、錦小路頼徳は結核で病死したので、五人の公家、いわゆる「五卿」となった。

だが、元治元年（１８６４）禁門の変により、中央政局から失脚し、朝敵となった長州藩は幕府軍から追討される立場となった。この第一次長州戦争に際し、幕府軍に包囲され、存亡の危機であった長州藩に救いの手を差し伸べたのが福岡藩や薩摩藩であった。

長州藩に同情的な福岡藩の正義派と呼ばれる重臣層や家老加藤司書、月形洗蔵ら筑前勤皇党、薩摩藩の解兵周旋により、停戦条約が結ばれ、その条件の中には五卿の処遇も含まれていた。

結局五卿は福岡藩、久留米藩、佐賀藩、肥後藩、薩摩藩の五藩が一人ずつ預かるという形で、筑前福岡藩内、西都大宰府への一括受け入れ、移転が決まった。慶応元年（１８６５)、五卿は若松から九州に上陸、途中黒崎、赤間、箱崎宿などの御茶屋を経由して一路、大宰府に向った。

五卿の宿舎は安楽寺延寿王院と決まり、水城・二日市・針摺などに見張り番所が置かれ、福岡藩を中心に久留米・佐賀・肥後・薩摩の五藩の警備下での滞在となった。

三条ら五卿は、この場所で西郷隆盛、大久保利通、坂本龍馬、高杉晋作ら尊皇志士と国事を画策したのであろう。

また、来るべき倒幕、帰京の日まで「論語」の輪読、乗馬、撃剣、相撲など文武の修業に余念がなかったとう。

慶応３年（１８６７）１２月に王政復古を迎え、五卿は復権、はれて帰京し、三条実美は議定、東久世通禧は参与として、明治新政府の役職を担うことになる。

片思いのまま和泉は自滅へ

一方、心あつく熱情的な尊王家であった和泉は、８月１８日政変によって京都を追われて後、“勅勘”の身をかえりみず長州藩兵とともにあえて上京し、皇居を兵火でさわがすというような、いわば極めて反尊王的事件である「禁門の変」を引き起こしたのであるが、これは一体どうしたというのであろう。

８月１８日政変によって尊攘派勢力が京都より一掃されたのち朝廷は２６日、京都所司代稲葉正邦・京都守護職松平容保以下在京諸藩主ないし関係者を招致し、右大臣二条斉敬によってこれまで天皇の真の意志が不明であったが、「去１８日以後、申出儀者真実之朕存意候間此辺諸藩一同心得違無之様之事」との示達がなされ、１８日以後の勅こそ真の天皇の意志に出たものであると明言された。さらに、孝明天皇より中川宮・二条斉敬に出された書により「孝明天皇自らは討幕を欲しないにもかかわらず、三条実美らが勝手に勅命な

るものを作っていたが、幸いかかる過激の輩を追放することができ、「此上は朕之趣意相立候事と深悦入」るとするのである。

討幕こそ天皇の嘉納するところと信じ行動してきた和泉は、その孝明天皇によって「浪士輩」「可忌輩」と決め付けられた。さらに追い討ちをかけて、１１月には島津久光に対し、「大政幕府委任・公武合体」こそ天皇の意志であることを示し、会津藩を賞賛し、反面和泉らを「浪士暴論之輩」と退ける発言となった。

この辺に和泉の暴発の原因があると思われる。

８・１８政変、後日談

上に述べた天皇の変節ともとれる行動について、薩摩藩主島津久光とのその後のやり取りに、わずかに天皇の真意が読み取れる。

１１月１５日、久光は近衛邸で忠熙から、久光に宛てた天皇の手紙を受け取った。それは次のようなものであった。関白鷹司輔熙は「暴論」の輩に惑わされて権を失い、朕の座前と退出してからではいうことに違い多く、信頼できず心痛するばかりである。深く頼りとしているのは朝彦親王と近衛忠熙の二人である。会津藩のおかげで「憂患」を払うことが出来たが、なお「一大事」の状況にあることは変わりない。自分の愚昧から起こったことであるが、国家・朝廷のため、恥をかえりみず打ち明けて相談し、其方（久光）と手を組んで「一改革」を成し遂げたい。

天皇は先ずこのように心境を語り、次いで自分の考えを述べつつ具体的に問題点を列記して、久光に意見を求めていた。その主な箇条を上げてみよう。

① 攘夷に関しては「無理の戦争」をさけたい。皇国が穢されず安心できるような「攘夷」の方法を至急建白してもらいたい。

② 「関東（幕府）へ委任」と「王政復古」の両方の説が唱えられているが、「王政復古」は「暴論」の連中が強く主張しているもので、自分は始から賛成していない。自分は将軍に委任の考えで、公武が手を取り合って、「和熟の治国」となるようにしたいと思っている。そのように心得てもらいたいがどうか。

③ 政変は真実自分の決断で行ったものであり、会津藩の働きに深く「感悦」している。しかるに政変は朝彦親王と会津藩そして二条右大臣の仕業であるとの風説が流され、政変に疑惑を持った者が、三条実美らを惜しむ向きもある。これらに対する対策を考えてもらいたい。

④ 政変以後はすべて自分の前で評決が行われるようになって安心している。しかし以前のように、自分の知らないところで評議がなされる恐れがある。どのような対策を講じるべきか建白してもらいたい。

⑤ 鷹司関白を辞職させたいがどうか。また三条実美らが長州で「姦策」をめぐらせてい

るようで心配である。帰京させて監視下に置き、決して復職などしないようにしたいので、そのための策を考えて欲しい。

朝彦親王と近衛忠熙の二人のほかに、朝廷内に信頼する人物がいないとまで告白する。孝明天皇の深い孤独と悩みが伝わってくる手紙である。ここまで率直に頼りにされれば、何とかしなければ、と奮起するのが人としての努めであろう。久光はこれに応じて、丁寧かつ率直に考えを述べた。

久光の奉答

官位を持たない武家に、天皇が直接手紙を送ることは、異例中の異例であるが、その無為無官の武家が、直接天皇あてに手紙を送ることも、これまた異例であった。久光は手紙の草稿を書き近衛忠熙に見てもらい、闕字などの体裁上も問題ないとの返事を得て、清書の上１２月２日に、近衛を経て天皇の下に届けた。久光は次のように述べる。

① の問題について、攘夷を急ぐことには反対である。今戦争しても勝ち目はなく「醜夷」に穢される結果となるだけだ。鎖港についていえば、日本の軍事力が弱体であるから「開港の権」は外国が握っている。したがってこちらから鎖港を要求しても相手にされないだろう。当面なすべきことは武備充実に努めることで、それ以外に策略は見当たらない。外国と対抗できるほどの武力の充実が達成されるのは、何時のことか分からないから、これは事実上破約攘夷の実現は無理だと言っているのに等しい。

② 王政への復古は、現段階ではとても難しいから、当分は幕府への「大政委任」で行くべきと思う。ただし幕府が「武備充実」を怠ったり、委任された大政の執行を誤った時は、その罪を問いたださなければならない。

③ 政変についての風評は、長州や浮浪が人心に疑惑を生じさせる為に流したものであるから気になさらないように。

④ 政変以後すべて天皇の座前で評議が行われ、天皇が万機に関わるようになったことは「啼泣感拝」のほかない。この体制が維持されるよう、朝彦親王と近衛忠熙に談判しておくのでご安心くだされたい。

⑤ 鷹司関白の更迭は至当のことと思う。三条実美らの処分については、長州藩との関係もあるので、武家のほうでよく評議した上で後ほど申し上げたい。

天皇の質問に対する久光の奉答は以上であるが、さらに注目すべき意見をつけ加えていた。「腹心の人材」をよくよく「観察」し「小人」を遠ざけ「賢臣」に親しまれ「取違い」することのないようにと、天皇に、人を見る目を磨いて、人材を正しく評価するようにと忠告していたのである。

十、田中久重、久留米へ

結局、久重は６８歳までの１４年間を佐賀藩に仕えていたわけだが、その時代はからくり師から時計師へと転身してきた彼が、最期の大いなる脱皮とも言うべき近代科学技術者へ転身するために用意されていた舞台だったといえる。

そして、久重は故郷の久留米に戻る。ここでは設置された久留米製鉄所で火薬やレミントン銃を製造したり、蒸気船の購入に出掛けたりする。その一方で、幕末から明治維新へという激動の時代の足音が次第に大きくなる中で、彼は以前にも増して発明創造に力を入れる。たとえば傘ろくろ製造機、精米機、昇水機などの数々の機械がこの時期に発明されている。その他、自転車、人力車、写真機、蒸気自動車などの当時の最新のハイテク技術にも手を染めている。新しいものを、時代の最先端のものを追い求めたいという、発明家としての情熱は衰えるどころか、ますます激しく燃え上がって行ったようである。明治という新しい時代にふさわしい発明を、発明家として生きてきた自分の最期の仕事にしたい、すでに７０歳を越えていた彼がそう考えたとしても何ら不思議ではない。そして、そのチャンスは間もなくやってくることになる。

久留米に開国開明をもたらした今井栄の改革

真木党派が潰れた後の久留米藩政は有馬河内（監物）が首長となり、不破美作が参政、そして今井栄が縦横に開明的政策を振るって開成方を創設し、富国強兵を目標に殖産興業を計り、大いにその実績を上げるとともに、海軍を改革し、蒸気船雄飛丸以下を次々に買い入れて、ついに幕府・薩摩・肥前に次ぐ海軍力を築き上げた。

安政６年（１８５９）に不破美作は明善堂総督に任じられ、藩校の改革を行った。今井栄の提言により久留米藩は攘夷路線から開明路線に転換し、元治元年（１８６４）からは開成方の創設、国産商品の奨励、洋式軍制改革を中心とした藩政改革が行なわれることとなった。

長崎に行って攘夷の愚を悟らされた執政有馬河内（監物）の下、富国強兵を目指して改革近代化が進む久留米藩で、田中久重は自由に活躍できる場を与えられていた。しかし、その後、またもや頑迷な外同志の攘夷派は参政不破美作の暗殺で改革を阻み、開国解明の動きを封じてしまうことになる。久留米藩の悲劇である。

今井栄は御用席の今井七郎右衛門の長子で江戸藩邸に生まれた江戸育ちである。計数に

明るく、和算のほかに洋算も学んでいる。また、幕臣古屋佐久左衛門について英語を学んだ。ペリーの来航以来、急速に開明思想が浸透してきた江戸にあって開明学者の勝海舟などとともに広く交友してその人脈は一歩ぬきんでていた。藩邸にあっては、英邁で名が高かった十代藩主頼永の側近として奥詰となり、江戸留守居役・御納戸役を努めた。

文久３年（１８６３）末、国許勤務を命ぜられ、国家老有馬監物（けんもつ）・参政不破美作（ふわみまさか）の信頼が厚かった。今井は二人に産業革命以来グローバル化する世界の情勢や開国近代化を進める幕府の動きを説き、偏屈な攘夷から開国開明へ藩政を転換させた。開国開明では先述したように隣の佐賀藩が群を抜き、洋式学問を取り入れ、富国強兵策を掲げ、その科学工業は全国諸藩から突出していた。

その佐賀で先進科学を支えていた一人が、なんと“からくり儀右衛門”と呼ばれた久留米出身の田中久重だった。その久重を久留米に呼び戻すことになるのは、真木和泉の有馬監物に対する推奨の上書だったといわれているが、とにもかくにも、戻ってきたその久重を十分に使いこなしたのは今井栄である。

今井は藩論を開国開明に統一すると、後に「元治の改革」と呼ばれる「国産会所仕法の開放・西洋の科学技術の導入・洋式陸軍海軍の設立による軍備の強化」を建策し、「いまや上下のため、新しく産物を殖し、新しく法律を制定して物価を平均して、国中同の一命に関わるような難儀を救う」ために富国強兵策の発展に努めた。

このころ、長州攘夷戦争・薩英戦争が相次ぎ、九州の北と南で起きた身近な戦争は、藩首脳部に深刻な衝撃を与えていて、兵制改革は現実的な面から尤も急を要していた。まず銃砲の生産から初め、慶応２年（１８６６）には英国兵制を採用して、長崎から村次鉄之進を招いて訓練を始めた。

元治元年（１８６４）には砲二門を備えた雄飛丸を購入していた。慶応３年（１８６７）、久留米藩は神戸海軍操練所で学んだ梅野多喜蔵に命じ、蒸気船 7 隻を要する海軍を創設した。

財政再建については国産会所を儲け、その下に開成（政策立案と指導）・開物（国内資源開発及び産業振興）・成産（領外輸出統轄）の三局を開いて殖産興業を図った。また、税制を改革して、口銭や印銭の収入増を図り、藩港若津における倉庫業・藩営為替業を興して米に偏らない歳入増の道を拓いた。

江戸藩邸では幕臣古屋佐久左衛門の英語塾に藩士を入門させ、国許においても英語学校の開設の準備を始めた。慶応２年、今井は藩命で蒸気船を購入した際、長崎に適した船がなかったために、オランダ領事ボードウィンに相談すると上海行きを薦められ、密航して上海で蒸気船を購入している。この時松崎誠蔵ら藩士５名とともに田中久重も上海に行っている。

今井の一書「秋夜の夢談」に、この時のことが記され、今井はこれからの久留米藩の進

む道を「形以上のことは亜細亜州中の善をとるべし、形以下のことは、かねて欧羅巴の善を取り入れるべし。治国平天下の作用に至っては、ただ欧羅巴の善を併せとるのみならんや、一大地球の善なるもの、皆とりてわが有とすべし。今徒に漢土の糠粕を固守して、西洋の所為を誹る者は、これ井の中の蛙の見にして、時を知らずというべし」とヨーロパの文明を積極的に取り入れるべしとしたので物議をかもすことになった。今井達が始めた急速な開国開明策に、欧米を打払えとする尊王攘夷派の真木党残党や久留米から一歩も外に出たことがなく、世界や国内政治の動きを知らない守旧派から誹謗の声が高くなってきた。

田中久重もらい受け

佐賀藩を通じて徳川幕府にまでその名を知られた田中久重・義右衛門（岩吉）父子の名は、当然九州一円に広まった。もはや“からくり儀右衛門”としてではない。

「近代的な科学者」

としての田中父子の名である。これは久重の生まれ故郷である久留米藩でも同じだった。そこで、案の定今度は久重父子に、

「久留米藩に戻るように」

とう要請がやってきた。最初の主唱者は真木和泉である。

真木和泉は“今楠公”（現代の楠木正成公）と言われ、当時の尊王攘夷派の志士の間では盛名を馳せていた。天保３（１８３２）年に、従五位下に叙され和泉守の官名を与えられた。このため彼は、

「わたしは天皇家臣である」

という朝臣意識を強く持った。早くから水戸学に接し、水戸藩の会沢正志斉とは昵懇だった。そのために、水戸学を唱えグループ天保学連を造った。そしてこの、

「尊皇論による藩政改革」

を主張したが、保守的な久留米藩有馬家ではなかなか受け入れられなかった。そして脱藩し上京、尊皇運動に心血を注いだ。これが志士たちの崇敬するところとなり、“今楠公”の敬称が与えられたのである。

久留米に居る頃、藩政改革案の実行を迫ったために、かれは罰を受け１１年間の長きに渡って幽因生活に追い込まれた。しかし、文久２年（１８６２）には藩の処分を待たずに脱出し、上京した。

こういう真木が久留米藩に対し、

「佐賀藩で重用されている田中久重・儀右衛門父子を、藩に呼び戻すべきだ」

と主張したのは、おそらく彼の王政復古運動に武力が必要になった場合、

「討幕軍の武器を近代化しなければならない」

そのためには、

「まず久留米藩が久留米藩自体の軍備を近代化する必要がある」と考えたためであろう。
文久２年（１８６２）６月１３日付で、真木和泉は藩の家老有馬河内監物に次のような建策をしている。
「後来攘夷之節にも船揖の御手当、御急務に御座候、江戸定足軽佐野藤蔵と申者珍敷工夫者之由、此者御呼下し被遊候而是迄御所持の大船に外車にても可然、蒸気船同様為拵（中略）儀右衛門（久重のこと）杯（など）も佐賀表に罷有候間、之の御呼返し工夫為致候はば船而己に無之、小倉まで往来仕候車輪等をも簡便の車出来可申と被存候。
一体軍国の御政事等一日も早く被取起候へ者、一日の践越に相成候間、一日にても、一時間にて早く御手を被下候事肝要の儀存候」
これは、「久留米藩は急いで蒸気船を造って走らせ、同時に久留米から小倉まで鉄道を敷設すべきだ」
と言っている。そして、
「その工事の設計や指導には今佐賀藩で重用されている田中久重を呼び戻すべきである」
と告げているのである。これは、従来真木和泉という人物にもたれてきたイメージからすると、少し奇異な感じがする。真木和泉と言えば、
「尊皇討幕派の志士で尤も高齢な存在」
という印象で受け止められてきた。
つまり、真木和泉といえば、
「コチコチの過激尊皇討幕論者」
という精神論だけの存在だと思われてきた。「和泉思想の限界」の項で指摘したように、彼には西洋文化への取り組みが少なすぎた嫌いがある。田中久重を取り込もうとした今回の動きは、討幕のために軍事力が欲しいという彼自身の我田引水的論理に過ぎなかったのかもしれない。
案の常、藩の重役たちは相手にしない。それは日本人の特性である、
「何を言っているか」
という内容論よりも、
「だれが言っているか」
と言い手にこだわる考え方が支配的だったからである。これは現在でも続いている、つまり、
「どんなにいいことでも、あの人間が言うことなら認めるわけにはいかない」
という、“ひと中心主義”がまかり通っているからだ。
真木和泉はいってみれば、
「久留米藩の老異端児」
だ。保守的な重役層は決して好感を持ってはいない。
「いつも問題を起こす藩のトラブルメーカーだ」

と思い込んでいる。

　真木和泉が久留米藩に、
　「急遽、艦船鉄砲の整備を整える必要がある」
という進言をするにいたったのは江戸で知り合った佐久間象山によってである。佐久間象山は確かに開明的な国防論者だったが、彼もまた故郷の松代藩においては必ずしも好評を以って迎えられている人物ではない。やはり異端児・過激な孤高狷介（ここうけんかい）な徒と見られていた。
だから、久留米藩の保守派の中では、
　「変わり者の真木和泉が、これまた変わり者の佐久間象山にそそのかされて艦船銃砲の製造を進言しているのだ」
と見る者もいた。
　その意味では、佐野常民の薦めによって佐賀藩に迎えられたときとは田中久重の遇され方も違ったであろう。つまり、久留米城内には完全に久重を歓迎する空気がみなぎっていたかどうかは疑問である。
　これを救ったのが藩主の有馬頼咸であり、今井栄だったのである。頼咸は前にも書いたように決して尊皇討幕派ではなかったが、
　「国防上久留米藩も大船建造や銃砲整備の必要がある」
とう使命感に燃えていた。
　藩というのは囲いの意味であり、また垣根の意味がある。だから江戸時代は藩はそれぞれの藩の行政区域を“くに”といっていた。だから、
　「貴方のおくにはどこですか」
と聞いたり、
　「私の国はどこどこです」
と現在もやり取りをしているのは、多くこの“藩の区域”を指す場合が多い。それほどこの意識は根強い。
　しかし幕末にはこのいわばたて社会である藩の区分が壊れた。“藩際”といって、横社会がどんどん出現していた。したがって有馬頼咸にしてもいわゆる、
　「藩意識からナショナル（国家）意識」
が生まれていた。国家意識が芽生えれば、やはり日本に次々と押し寄せて来る外国諸列強の圧力に気づく。そうなると、
　「日本の国は日本人の手で守らなければならない」
ということになる。まして武士は徳川幕府が開かれたときから、
　「国民の護民官」
という役割を負っているから、この意識は更に燃え上がった。だから尊皇であろうと佐幕であろうと、国を守ろうという気持ちにおいては一致していた。

しかしこの元治元年（１８６４）という年は、田中久重にとって不幸な事件が二つ起こった。ひとつは彼を久留米藩に推薦した真木和泉が、７月２１日に上方の天王山で自刃してしまったことである。

田中久重を久留米藩に推薦したのは、真木にすれば目的を達する一つの手段であって、彼の志の全てではない。

したがって久重の佐賀藩・久留米藩兼務が決まると、彼は又すぐ長州へ行った。ここにはまだ、八・一八の政変で下ってきた七人の公家がいたし、また「日本浪人軍」といっていいような志士たちの集団がいた。真木はたちまちこの浪人軍の総帥になった。彼は忠勇隊を結成した。そして

「このまま座視するわけには行かぬ。急遽、武力を持って京都に乗り込み、七卿ならびに長州藩主父子の立場を元に戻すべきだ」

と主張した。この主張は長州藩過激派にも伝わった。そしてついに三人の家老がそれぞれ率いる軍勢が京都へ上った。しかし長州軍は敗退する。

この時真木和泉の率いる忠勇隊は堺町御門に突入したが、やはり幕府軍ならびにこれに組した薩摩軍などの兵器の近代化によって、惨敗せざるを得なかった。おそらく真木は唇を噛み、

（だからこそ、自分は久留米藩にも軍制改革や兵器の近代化を進言してきたのだ）

と思ったに違いない。真木をよく知る長州藩の幹部は、

「もう一度長州に戻って再起しましょう」

と薦めたが真木は首を横に振った。そして、

「最早、生きながらえる気は毛頭ない」

と告げて天王山頂において同志十六名と自決したのである。

佐賀藩精煉方になくてはならない田中久重を、久留米藩に推挙したのは上述の通り真木和泉であった。国老有馬河内（監物）に出した藩政建策の中に「儀右衛門杯も、佐嘉表に罷在候間、是も御呼返し」と、また翌年７月に藩主に奉った建策にも久重を推挙しているが、この和泉守の久重推挙は藩の容れるところとはならなかった。

しかし、間もなく真木党を一掃した国老有馬河内（監物）・参政不破美作は、開成方主管今井栄らと富国強兵の新政策を立て、元治元年には英国製の汽船「雄飛丸」を購入し、かつ鉄砲製造所を設けようとするにあたり、特に今井栄の強い推挙もあって、田中久重に帰国出仕の交渉を始めることになった。

久留米でのこの動きに対し、久重はがんとして応ぜず使者三反ついに聴かずという有様であった。久留米藩の最後の手段として久重の親族に、久重を必ず帰国さすべしの厳命を下した。親族は直ちに命を奉じて久重を説いたがそれでも応じない。最後に庄山勘平が親族総代となって佐賀に行って久重を説いた。ここで久重もついに我を折り、佐賀藩の許し

を得て、月の上半は佐賀に、下半は久留米にあって力を尽くすことを承諾した。
田中久重は郷土を出て３０年、流浪辛苦、その間、京坂の間にあって困苦をなめ、ようやく京都にて名を成し、佐野常民の推挙により、鍋島閑叟公の厚遇を得て、初めて思う存分に腕を振るい、諸種の提案なども取り上げられ、天下に名を馳せたのであるから、久重は閑叟公の知遇に感ずることが深かったはずである。久留米藩から帰藩出仕を促されても、容易に動かなかったのも当然である。

佐賀と久留米両方に勤務するという変則的な活動を始めたばかりの久重の心に重くのしかかっていた問題があった。それは、養子の義右衛門（岩吉）とその子岩次郎が、元治元年９月１０日に長崎で突然常軌を逸した佐賀藩士秀島藤之助によって殺されてしまったことである。これが二つ目の久重の不幸であるが、最初にこの報に接したとき、さすがの久重も驚いた。
「一体、なぜ？」
という疑問を持った。
伝えられたところによれば、儀右衛門父子を殺した秀島藤之助は、鍋島閑叟の側近だった。しかしそれだけに、藩主閑叟が秀島達よりよそ者の技術者連中を優遇することに心穏やかならざるものを持っていた。
そこで、佐賀の城下町では凶行に及べないので、たまたま義右衛門（岩吉）とその子岩次郎が長崎へ赴いたのでその時を狙ったのである。岩吉父子が藩の命令で長崎へ向かうことになったのは、佐賀藩が新しくイギリスから購入した汽船を受け取るためだった。一行は５～６名で、引率者は精煉方の秀島藤之助だった。岩吉は、この旅に息子の岩次郎を連れて行った。京都を引き上げるときまだよちよち歩きしか出来なかった岩次郎も、１２歳になっている。岩吉は技術の方はまだまだだが、オランダ語はよく出来たので、久重も将来を楽しみにしていた。
一行が長崎に着いた翌日は雷雨となった。夜に入ると、雨はいっそう激しくなり、天が破れるかと思うほど雷鳴がとどろき、蒼い稲妻が真っ暗な空を引き裂いた。
しかし、岩吉も岩次郎も、旅の疲れでぐっすり寝入っていた。同室者は秀島藤之助ひとり、その藤之助が夜半、ふいに飛び起きると、
「この魔法使いめ、雷をとめろ！」
と、叫びながら、刀を振るって、寝ている二人を刺し殺した。かれは同行した者たちにすぐ取り押さえられた。藤之助は発狂していたのである。
跡継ぎの岩吉とかわいい孫を一時に奪われてしまった久重の嘆きは、計り知れないほど大きかった。事件の後、彼は何日も部屋に閉じこもったきり、誰の前にも姿を見せなかった。彼がいなければ、当然仕事は進まない。蒸気機関は作りかけのまま工場内に放置された。
「久重は、もう仕事をする気力を失ってしまったのだ」

そんなうわさは精煉方に広まったある日の早朝、中村奇輔が工場へ行ってみると、作業着姿の男が一人で仕事をしていた。近寄って見ると久重だった。

「夕べ、夢の中で息子と孫の二人に会いました。怠けないで二人分まで仕事をしてくれと、叱られましたよ」

彼は奇輔にそういうと、何事もなかったように、また働きだしたのである。

この凶行は久重はもちろんだったが、鍋島閑叟をも悲しませた。「鍋島閑叟伝」に、

「田中の機巧は非常の技能を具し、よりて方に蒸気船製造のことあるに及んでは、彼はその主任となりて起工のことに精励したりしに、此の奇禍に斃れて、複た起つなかりしは、文明事業のために、惜しむに余りあり」

とある。

閑叟はさらに儀右衛門の後嗣として、精錬方の同僚である中村奇輔の次男林太郎（９歳）を田中家の養子に入れ、武士として扱った。さらに、久重の門人だった精錬方の田中精助を後見とした。この林太郎は後に工学部を納めて技師となり、宮内省や鉄道省に奉職した後大正３年（１９２４）に亡くなった。

真木和泉の死と養子義右衛門（岩吉）の死という引き続く二つの不運な出来事に、しかし久重は悲しみにくれているわけにはいかなかった。この年、有馬藩主頼咸は、

「久留米藩製造所の設立」

を命じ、その仕切りを久重に命じたからである。

製造所の敷地は筑後鑓水古飯田の台地に指定された。三井郡御井町に属していた。ここに、工場・溶鉱炉・鋳物工場を作ることになり、すべての責任は久重に負わされた。溶鉱炉建設には鉄材が必要だ。しかしこれは不足していた。そこで久重は思い切って藩内の寺院から梵鐘を集めた。鐘を溶かして注ぎ込んだのである。

次々と牛舎や馬車に詰まれて運び込まれる梵鐘を見て、付近の住民は、

雷の音にも増や鐘の筒

という句を詠んだ。溶かされてしまう梵鐘に一抹の哀歓を覚えたのだろう。

久重が設計した溶鉱炉は炉体と湯壷の二つからなり、炉体の高さ約１丈（約３メートル）、径約４尺（約１２０センチ）の粘土製円錐筒八個を円形に立て並べたもので、湯壷はその中央にあり８個の円錐筒から溶鉱が流れてたまるという仕組みになっていた。湯壷に溜まった溶鉱はさらに粘土菅を伝わって鋳型に流し込まれる。

しかし最初は失敗した。鋳型が爆発してしまったからである。しかし久重は屈するところなく、すぐ造りなおし、やがて８０ポンドという巨大な大砲が完成した。

この大砲を造る過程において、久重は木製だったが旋盤のような機械を発明し、しかもこれを運転するのに水車のようなものを考えて、労務者６，７人がかりで運転させ、砲身の内部を削らせたという。砲弾の射程距離を伸ばす為には、砲身内部を螺旋状に削る必要

がある。この螺旋を彫る作業は一同経験がなく、苦労していたところ、久重は一つの定規で数本の直線を紙にしたためて、その紙を砲身に斜めに貼り付けて解決したという。

鋳物についても、いろいろな地金を集めた結果、これをその性格を一つ一つ見極めて選んだ。唐金の調合についても久重は独自な経験と考えを持っていたという。

この８０ポンド砲が完成したのは慶応２年（１８６６）の春のことである。

試射は、古飯田の台地が選ばれた。標的は明星嶽の南西に聳える飛嶽の中腹だった。距離は一里七合五勺あった。発射すると弾丸は標的をはるかに超えて二里半（約１０キロ）の地点に達した。見ていたものはドッと声を上げた。

そこで、今度は藩主の前で公式の試射が行われることになった。試射場には紅白の幔幕が張り巡らされた。製作者の久重は麻裃を着て威儀を正していた。頼咸は試射の前にこの大砲を親しく見聞した。そして定められた場所に落ち着くと、

「撃て」

と命じた。試射の指揮を執ったのは家老の不破美作である。結果は先の試射と同様なものになった。

「見事である」

頼咸は関係者を褒めた。そして、久重には特に褒美が与えられた。久重は感泣に咽び、褒美をこの大砲製作に従事した全従業員と分け合った。

実を言えばこの時、有馬頼咸は砲弾について一つの見識を持っていた。それはかってイギリス艦隊が薩摩藩に報復にやってきたとき、打ち込んだ弾丸で不発になっていたものを薩摩藩が保管していた。頼咸はこれをもらってきていた。そこで試射後に久重を呼んで、この弾丸を見せた。

「何かの参考にならぬか」

と聞いた。久重はびっくりした。久重の造った弾丸は丸い。しかしこの長形弾を見せられて、

「そうか」

と気づいた。そして、既に長形弾の存在を知りながらも、黙って久重の造った丸い弾丸の試射を褒めた頼咸の器量の大きさに感動した。

（殿は何もかもご存知の上で、黙って試射を褒めてくださった）

と思ったからである。

ここで久重は久留米藩製造所における砲弾の設計を長形に変え、着弾距離のながいものに変えた。この点は有馬慶頼も久重も偉い。頼咸の方も既に丸弾より長弾のほうが着弾距離が長いことを知っていながらも、それは口に出さない。久重たちの努力をそのまま認め、その後で、

「これが参考にならないか」

といって長形の弾丸を見せたのである。そして久重もまたすぐこのことを感じ取り、製造過程の弾丸に変更を命ずる柔軟性を持っていた。科学者というのは自分のやることに自信

を持ってこだわるものだが、その点、久重にはそういうことはない。
「自分が今作っているよりもより良いものがあれば、それを受け入れる」
という素直な気持ちを持っていた。
頼咸はこの功によって久重に五人扶持を与えた。翌慶応３年には、さらに藩の中小姓を命じ１５石三人扶持を与える。久重は歴とした久留米藩の武士に取り立てられた。
この頃、薩摩藩から中原猶介という人物が鑓水の製造所を見学にやって来た。
この中原猶介は後に新政府海軍の創設に当たり、大阪湾で行われた日本最初の海軍観艦式とも言っていいような式典の式を執る。したがって、中原猶介との遭遇もまた久重にとっては、
「一期一会の出会い」
だったのである。中原猶介は更に佐賀に廻って、久重が指導していた精錬方も詳しく見学し、非常に感心した。
この頃、佐賀から家族が引き上げてきた。妻の与志子他家族がそろって久留米の通町十丁目の自宅に落ち着いた。天保５年（１８３４）の１０月に久重が妻子を伴って久留米を去ってから実に３０余年ぶりの帰国である。
与志子の目に映った町の光景は昔とほとんど変わりがない。与志子も佐賀にいて、夫のやることを垣間見ると同時に、
「世の移り変わり」
がいかに激しいものであるかを目のあたりにしてきた。それに比べると久留米の町は依然として静かだ。まるで幕末の激動をまったく知らないか、或いは知っていてもこれを無視しているかのように見えた。が、それだけに古いものがそのまま保存されていることに、与志子はほっと安堵の息をついた。
おそらく鍋島閑叟が、久重の養子儀右衛門（岩吉）とその実子岩次郎が思わぬアクシデントに遭って死んでしまったので、これ以上家族を止めおく必要はないと判断したのだろう。それに久重自身も久留米藩との兼務になって、月のうち半分の勤務になるから閑叟にすれば、
（久重も片足は久留米においているのだから、家族を帰してやろう）
と思ったのに違いない。閑叟もまた温情溢れる名君であった。

文久３年９月１５日、久留米藩三人扶持。慶応２年２月、久重は佐賀藩を辞して、４月に久留米に定住し、翌３年５厚保１７日中小姓となり、十五石三人扶持を受けた。

久留米藩製造所は、創設以来３年余りで、通町１１丁目裏、久重誕生の家の南西裏続き地に移された（通町１０丁目、西鉄高架線東側に「田中久重翁誕生地記念碑」が建っている）。久重はここで４０余挺の銃器を製造したが、明治元年レミントン銃を製造して、藩主頼咸に献上した。頼咸は大いに喜び、命じて２万挺を作らせた。工場が狭くなったので、

明治２年に南薫に移され、藩の事業として久留米製鉄所と称せられた。（この地には「久留米製鉄所跡」の碑が建っていて、「此地は明治２年ごろ、久留米製鉄所設置せられ、発明家,従五位田中久重翁が所長として小銃および其の他発明品を製造せし所なり」と銘されている）。

同製鉄所の従業員は１００余名であったが、明治４年７月１７日、廃藩置県の令下ると、久留米製鉄所は廃止された。久重はなお、同工場および機械類を使用して自営したが、明治６年１月、７５歳の老齢の身で上京するに及んで閉鎖された。

久留米藩海軍創設への関与

久留米藩は大河筑後川に面しているが蒸気船が航行できるほど深くはない。最初は小倉藩に港を借りて、その後は筑後川河口の若津を軍港とした。大川市と諸富町を結ぶ筑後昇開橋（正式名称は筑後若津橋梁）のかかる大川一帯である。海軍を建策したのは今井栄である。そして海軍の運用を支えたのは梅野多喜蔵であった。なお、佐野常民が掌っていた佐賀の海軍基地は同じ筑後川河口で若津港より少し下流の現在の河川公園のあたりであった。

久留米藩海軍創設の責任者になったのが開成方の主事を務めていた今井栄である。江戸藩邸の勤務が長かったが文久３年（１８６３）に久留米に戻ってくると、常に頼咸の側近にあってその帷幄（いあく）内で枢密の議に参画した。ちょうど佐賀藩における閑叟と佐野常民のような関係である。技術者としての久重にとって、こういう立場にある人々と親しく交われたことは、その技術を活かす状況作りに大いに力となった。

海のない久留米は藩が海軍の基地にしたのは、初めは豊前（大分県）大里浦と若津、榎津などの河口などであった。ここに久留米海軍の軍艦が繋留された。海軍は「水軍取調方」と名づけられ、今井栄・磯部勘平・松崎誠蔵・戸田乾吉などがリーダーとなって活躍した。

そして田中久重も久留米藩が購入する軍艦の検分役の一人に加えられた。外国船を買い込む為に今井栄と一緒に上海まで出かけたこともある。

購入した船は文久元年（１８６１）にイギリスのグラスゴーで製造されたスワトーという船だった。久留米藩ではこの船を“雄飛丸”と命名した。さらに、慶応２年（１８６６）９月には米船スワルロー号を上海で買い込んだ。この船は文久３（１８６３）年の製造で木造両舵帆走船だった。１０７トン、長さ８２フィート、幅１８フィートで喫水は９フィートだった。大砲を二門備え、買い入れ金は４７００ドルである。この船は“玄鳥丸”と命名された。

さらにこの他に久留米藩が外国から買い入れた艦船は、千歳丸・晨風丸・翔風丸・遼鶴丸の四隻である。これらの軍艦は全て前に書いた豊前大里浦・若津・榎津の河口に繋留された。

ここで梅野多喜蔵のことに触れておきたい。海軍の運用に多大な功をなしたことで有名であるが、第一線を引いた後は教育に力を注ぎ、郷土の教育者として功績大だからである。船を降りたとき彼はこれより後のわが進むべき道の選択に迷っていた。この時、旧藩主有馬頼咸が「当今の急務は教育である。この道に進み郷里の子弟教育に専念すること」を薦めた。多喜蔵の後半生はこの一言で決定づけられた。

功績についての詳しいことは別の機会に譲るが、彼は、天保１２年（１８４１）生れで、安政 5 年 18 歳で江戸に出て、大鳥圭介の大鳥塾に学んだ。元治元年６月、２４歳で帰藩した多喜蔵は久留米藩が購入した鉄製蒸気船「雄飛丸」（３５０トン）の乗方修行を命じられた。

そして弥永健吉・西村善次郎・諸富熊三郎・北川辰次郎とともに幕府の海軍操練所で 3 ヵ年の修行を命じられ、勝海舟の氷川塾で数学・測量・航海術を学んだ。

慶応２年（１８６６）５月には幕府の開成所で英学も学んでいる。帰藩すると雄飛丸の専任士官となり、次に旗艦千歳丸６００トンを任せられた。このころには、ほかに玄鳥丸・晨風丸・翔丸・遼鶴丸・神雀丸の 7 隻の陣容を誇っていた。

慶応４年３月２６日、大坂天保山沖で行われた天皇の観閲式には幕府艦艇や諸藩の艦艇に伍して臨んでいる。この日、参列の栄誉にあったのは幕艦のほかは、佐賀藩の電流丸８００トン・久留米藩千歳丸６００トン・薩摩藩三邦丸６００トン・長崎藩華陽丸４１０トン・芸州藩万年丸２８０トンの五隻だった。

久留米藩は二番艦で、多喜蔵は千歳丸艦長として威風堂々と航行して、久留米藩海軍ここにありと名を上げた。軍船としては函館戦争に久留米藩陸軍とともに従軍し活躍した。因みに、久留米藩の軍制改革は十代藩主頼永のとき始まっている。

幕末、久留米藩は艦船１０隻を擁する海軍力を誇った。久留米藩海軍は勝海舟の指導を受け、また佐賀藩海軍の援助を受けながら急速に成長し、薩摩、佐賀の雄藩に次ぐほどまでに強力になった。久重は技術顧問のような形で慶応２年（１８６６）今井栄にしたがって上海に渡り、蒸気軍艦の購入に一役買った。当然、産物の輸出についても市場調査に目を光らせていたはずである。久重は上海より持ち帰ったマッチより大砲の導火法を案出し、製造所の傍らに一屋を建てて、ここで火薬製造を始めている。

彼はそこで初めて見る異国の風物に興味深く見入ったことであろう。当時上海は外国船が盛んに出入りし、ちょっとした洋行気分にひたることが出来た。彼は技術上の新知識を貪欲に探し求めたに違いない。

その翌年の１８６７年１０月８日、明治維新前夜のあわただしい中で、今井栄を始とする久留米藩の人々はイギリス公使パークスの通訳であったアーネスト・サトウと長崎で会見している。会談の目的は明らかではないが、愉快に夕食をともにしながら幕府の政策を非難して大いに気炎を上げている。その中に久重の姿を見出すことが出来る。久重につい

て、「もと京都の時計製造人であったが、その後、熟練した機械技師となり、日本の汽船二隻と汽罐を組み立てた男」（アーネスト・サトウ著「一外交官の見た明治維新」）と述べ、その技術的能力の高さはサトウも見逃さなかった。

ここで、今井栄と久重との関係にふれなければならない。
戸田氏の「小史」に「近江（久重のこと）は今井の推挙なる故、王政復古後、藩において斥けられ、・・・・六年上京」とある。これによって今井が久重の帰藩に重大な役割を持っていたことがわかるとともに、今井が亡くなったあと、久重には久留米は住みにくいところになったことを伺わせている。「六年上京」とは明治六年（１８７３）東京へ久重が転出したことを意味している。

久重の佐賀・久留米両時代の１０年

文久元年	６３歳
（１８６１）	７月２５日ごろ、佐賀藩の電流丸ボイラー製造に着手
文久２年	６４歳
（１８６２）	このころ電流丸ボイラー成る。日本におけるボイラー製造のはじめである。また凌風丸のボイラーも成ったようである。
	６月１３日、真木和泉、久重を久留米藩国老有馬河内に推挙し、７月４日、久留米藩主にも推挙する。
	７月、幕府注文のボイラー三基の製造に着手。
文久３年	６５歳
（１８６３）	３月６日、久重父子外２名とともに汽船製造掛合を命ぜられる。
	この月、三重津（佐賀）に造船所を設け、蒸気船製造に着手。
	９月１５日、三人扶持。
	１０月１１日、幕府注文のボイラー成る。
元治元年	６６歳
（１８６４）	正月、久留米藩はじめて汽船雄飛丸を購入。
	久重、久留米藩製造所（御井郡高良内村鑓水）の所長を兼務し、月の上半は佐賀に、下半は久留米に勤務する。養子儀右衛門（岩吉）は佐賀藩精煉方に留まる。
	６月５日、フランス東洋艦隊、長州藩砲台を攻撃し、陸戦隊を上陸させ、前田・壇ノ浦両砲台を占拠。
	７月、薩英戦争。
	７月２１日、真木和泉、禁門の変に敗れて天王山にて自刃。

９月１２日、養子儀右衛門（岩吉）とその子岩次郎、出張先の長崎において鍋島閑叟公の侍臣秀島藤之助の突然の発狂の兇刃に斬殺される。

慶応元年　　６７歳

（１８６５）　金子正八郎の六男金子大吉が久重の養子となる。（二代目田中久重）

佐賀藩凌風丸竣工、これは日本で造られた最初の汽船である。

３月１日、閑叟公座乗し、有明海を航船する。

慶応２年　　６８歳

（１８６６）　正月、海路長崎へ行く。

この春、久留米藩８０ポンド砲鋳造なる。以来、各種の銃砲を鋳造する。

この巨砲を古飯田台地に据付、飛嶽を標的に発射し成功した。

２月３日、佐賀藩大久保においてアームストロング砲試発。

２月７日、佐賀城に登城、佐賀藩を辞任。

４月３日、久留米に帰任。

６月、製氷処方および製氷機発明。これは日本における製氷のはじめ。

７月２３日、久留米藩開成方出仕、長崎出張の命を受ける。

８月２５日、開成方主事今井栄に随行して上海に密航し、９月２１日長崎に帰着する。

慶応３年　　６９歳

（１８６７）　５月１７日、製造所諸職裁判役となる。中小姓となり、１５石三人扶持。

１０月８日、今井栄とともにアーネスト・サトウと歓談。（於長崎）

明治元年　　７０歳

（１８６８）　１月２６日、不破美作（参政）勤皇党若輩に暗殺さる。

３月２６日、明治天皇、大阪湾において観艦式を行われ、佐賀藩電流丸旗艦となる。そのボイラーは久重父子の製作に係る。久留米藩の軍艦千歳丸も参加。

４月１０日、久留米藩家老、有馬監物憤死。

５月１５日、製鉄所裁判役となる。

明治２年　　７１歳

（１８６９）　１月２９日、今井栄切腹を命ぜられる。久重の久留米脱出の遠因となる。

この年、久留米製鉄所南薫町に設置。

明治４年　　７３歳

（１８７１）　７月１４日、廃藩置県、久留米両替町御使者屋跡（今の市庁）に三潴県庁を置く。これとともに久留米製鉄所廃されたが、久重は引き続き、その工場および機械類を使用して自営。

この年、上海に出張する。

明治６年　　７５歳

（１８７３）　　１月１４日、久留米出発、２４日東京石黒着。

上表にあるように、婿養子の岩吉が亡くなった翌年の慶応元年（１８６５）、久重は久留米の金子正八郎の六男大吉を養子（二代目田中久重）としている。この年久重は、小型ではあったが日本で始めて、１０馬力の蒸気機関を造り上げた。製作したこの蒸気機関は、佐賀藩の新造船凌風丸に取り付けられた。彼は６７歳、京都で蒸気船模型を作ってから１４年目、文字通り血と汗の結晶だった。その前に佐賀藩電流丸のボイラー製造にも係ったが、これは新品製造ではなく、どちらかと言えば既存ボイラーの修理補修であった。

彼の製作したこの蒸気機関が取り付けられた佐賀藩新造船凌風丸の初航海が３月１日有明海で行われた。久重は佐賀藩主鍋島閑叟の供をして、凌風丸に乗り込んだ。船がもくもくと黒い煙を吐き出し、やがて両舷に取り付けた外輪が水車のように水をつかんで回りだすと、船はゆっくりと動き始めた。そのときこちらを振り返った閑叟と彼の目が合った。ほんの一瞬の間だったが、それにはお互い万感の思いがこもっていたのである。

十一．禁門の変

尊皇攘夷論を掲げて京都での政局に関わっていた長州藩は、1863 年（文久 3 年）に会津藩と薩摩藩が協力した八月十八日の政変で京都を追放されていた。

藩主の毛利敬親と子の毛利定広は国許へ謹慎を命じられて政治主導権を失っており、京や大坂に密かに潜伏した数名の長州尊攘派はにわかに行動を続けていた。

1864 年（元治元年）に入ると、孝明天皇を再び長州陣営のものとする為、京都に乗り込もうとする積極策が長州で論じられた。来島又兵衛、久坂玄瑞らは積極的に上洛することを主張し、桂小五郎と高杉晋作は慎重な姿勢を取るべきと主張した。６月５日、京都三条木屋町の旅館池田屋に集まっていた攘夷派の浪士たちが市中取締役の新撰組の襲撃を受けたこの池田屋事件で新選組に藩士を殺された変報が長州にもたらされると、慎重派の周布政之助、高杉晋作や宍戸左馬之助らは藩論の沈静化に努めるが、福原越後や益田右衛門介、国司信濃の三家老等の積極派は、「藩主の冤罪を帝に訴える」などと称して挙兵し、益田、久坂玄瑞らは山崎天王山、宝山に、国司、来島又兵衛らは嵯峨天龍寺に、福原越後は伏見長州屋敷に兵を集めて陣営を構える。

一方の和泉は悶々としながらも捲土重来を期して秘策に余念がなかった。会津が天皇から「１８日の一件実以会薩忠働深感悦候事」と感謝され、和泉は「浪士輩」と厳しく指弾されたことは耐え難く、何とかして挽回したかった。

上述した元治元年（１８６４）６月５日、池田屋の変を知った和泉たちは計画が失敗したことにいきり立った。

この報に接し浪士たちは風の強い日を選んで市中に火を放ち、混乱にまぎれて孝明天皇の身柄を奪い都へ帰り咲きを狙う計画を立てた。追い詰められた長州の失地回復を図らなければとする長州藩も挙兵を決意、６月１１日、藩主毛利敬親は京都進発を命じた。

急先鋒の来島又兵衛や家老益田右衛門介・福原備後・国司信濃率いる１５００余の兵が京へ向った。

和泉は久坂玄瑞とともに浪士隊３００名を率いて第一軍として勇躍出陣した。

和泉はこの時、在京列藩に通告書を送っている。そこでは、君側の奸を払う為として会津を名指ししているが、幕府としていない。どうも、諸藩を幕府方として参戦させないための作戦だったらしかった。

この不穏な動きを察知して、薩摩藩士吉井幸輔、土佐藩士乾市郎平正厚、久留米藩士大塚敬介らは議して、長州兵の入京を阻止せんとの連署の意見書を、同 7 月 17 日朝廷に建白した。

同年 7 月１９日、禁門の変の勃発である。薩摩などは当初、長州と会津の私闘だとしたくらいで、会津こそ迷惑な話だった。

和泉にすれば天皇が和泉の策を受け入れず、会津を信任していたことが憎くてたまらなかったらしい。禁門の変は和泉にとってはどこまでも天皇を仰ぎながら、その天皇に見返られなかった名目なき戦いだった。

朝廷内部では長州勢の駆逐を求める強硬派と宥和派が対立し、禁裏御守衛総督を勤める一橋慶喜（徳川慶喜）は退兵を呼びかけるが、京都蛤御門（京都市上京区）付近で長州藩兵が、会津・桑名藩兵と衝突した。一時長州勢は筑前藩が守る中立売門を突破して禁裏（京都御所内）に侵入するも、乾門を守る薩摩藩兵が援軍に駆けつけると形勢が逆転して敗退した。尊皇攘夷を唱える長州勢は壊滅、禁裏内で来島又兵衛、久坂玄瑞、入江九一、寺島忠三郎らは戦死した。

戦闘の後、落ち延びる長州勢は長州藩屋敷に火を放ち逃走、会津勢も長州藩士の隠れているとされた中立売御門付近の家屋を攻撃した。この二箇所から上がった火で京都市街は「どんどん焼け」と呼ばれる大火に見舞われ、北は一条通から南は七条の東本願寺に至る広い範囲の街区や社寺が焼失した。この変後の長州藩士は、惨敗が相当悔しかったようで、履き物に「薩賊会奸」などと書きつけて踏みつけるようにして歩いたとされ、その時の薩摩藩や会津藩への深い恨みが後の世まで伝わっている。

天皇は和泉らの御所攻撃を怒り、幕府に長州征伐を命じた。７月２０日、挙兵に失敗し、天王山に追い詰められた真木和泉は絶望の果てに自刃した。

「大山の峰の岩根に埋めにけり、わが年月の大和魂」という辞世の歌が２０年を王政復古にかけてなお酬いられることがなかった和泉の無念を表している。

包囲した幕府軍が新撰組を先頭に山頂に向ったとき、一発の銃声とともに黒煙があがった。さては逃げ切れないと思って自刃したかと駆けつけると山頂には和泉をはじめ黒焦げになった１７体の遺体があった。和泉が天王山に散ったあと、和泉の子、菊四郎は元治 2 年２月１４日、同志の土佐脱藩浪士に下関で暗殺された。

当時、京都守護職であった会津藩主・松平容保は、これにより長州の尊攘急進派を弾圧する体制を整えることになる。 禁門の変に於いて長州藩兵が内裏や禁裏に向けて発砲した事等を理由に幕府は長州藩を朝敵として、第一次長州征伐を行う。

１．第一次長州征討

朝廷は京都御所へ向かって発砲を行ったことを理由に長州藩を朝敵とし、幕府に対して長州征討の勅命を下す。幕府は前尾張藩主徳川慶勝を総督、越前藩主松平茂昭を副総督、薩摩藩士西郷隆盛を参謀に任じ、広島へ３６藩１５万の兵を集結させて長州へ進軍させる。

一方、長州藩内部では下関戦争の後に藩論が分裂し、保守派（俗論派）が政権を握る。征長総督参謀の西郷隆盛は、禁門の変の責任者である三家老（国司信濃・益田右衛門介・福原越後）の切腹、三条実美ら五卿の他藩（筑前大宰府）への移転、山口城の破却を撤兵の条件として伝え、長州藩庁はこれに従い恭順を決定する。幕府側はこの処置に不満であったが、１２月には総督により撤兵令が発せられる。

かくて第一次長州征伐は戦火を見ないまま年末までに終結した。財政難のなかで不承不承に動員させられた諸藩は、勿論この妥協的解決を大歓迎した。

２．第二次長州征討

ところが、予想外の楽勝に自力を過信した幕閣は、長州藩に厳格な処罰を科すことにした。他方、長州藩内では元治２年（１８６５）正月、対幕強硬派の高杉晋作一派が決起して幕権力を奪取し、処罰を拒絶した。高杉らは西洋式軍制導入のため民兵を募って奇兵隊や長州藩諸隊を編成し、エンフィールド銃など新式兵器を入手し、大村益次郎の指導下で歩兵運用の転換など大規模な軍制改革を行った。

ここにおいて幕府は、第二次征伐にとりかかり、勢威を示すと称して将軍を大坂城まで進発させた。こうすれば長州側は容易に屈服するだろうと甘く考えたのである。しかし、無理な再征が結局幕府の命取りになった。

一方の薩摩藩は、せっかくの調停努力が否定されたのに反発して今度は協力を断り、当てにしていた幕府を慌てさせた。それどころか、慶応２年（１８６６）正月には土佐浪士坂本龍馬・中岡慎太郎の仲介で、長年の恩讐を超えて薩長連合密約が結ばれ、薩摩藩は、長州側の洋式武器輸入に便宜を図るなど支援を約した。かくて薩摩藩は、一転して幕府と事実上の敵対関係に入ったのである。

財政難の諸藩にとっては、強引な征伐再開は迷惑な話で、総じて戦意は乏しかった。幕府内では、首脳間の意思統一に手間取ってなかなか具体的な征伐手順が決まらず、しぶしぶ動員させられた諸藩軍は、立ち往生状態のまま費用ばかりかさみ、だらけきってしまった。

14 代将軍徳川家茂は大坂城へ入り、再び長州征討を決定する。「四境戦争」とも呼ばれている戦争であるが、幕府は当初５方面から長州へ攻め入る計画だった。しかし萩口を命じられた薩摩藩は、土佐藩の坂本龍馬を仲介とした薩長盟約で密かに長州と結びついており、出兵を拒否する。そのため萩口から長州を攻めることができず、四方から攻めることになった。幕府は大目付永井尚志が長州代表を尋問して処分案を確定させ、老中小笠原長行を全権に内容を伝達して最後通牒を行うが、長州は回答を引き延ばして迎撃の準備を行う。

１８６６年（慶応２年）６月７日に幕府艦隊の周防大島口への砲撃が始まり、１３日には芸州口・小瀬川口、１６日には石州口、１７日には小倉口でそれぞれ戦闘が開始される。

長州側は山口の藩政府の合議制により作戦が指揮された。

大島口では、幕府陸軍の洋式歩兵隊と松山藩の兵が、大島に上陸し占領した。宇和島藩は幕府の出兵命令を拒んだ。幕府海軍と高杉率いる艦隊が戦い、奇襲戦法により幕府海軍は敗走した。その後、世良修蔵指揮下の長州軍が大島の奪還を果たすも、島内に逃げ散った幕府軍残党の掃討が終戦まで続く。

芸州口では、長州藩および岩国藩と、幕府歩兵隊や紀州藩兵などとの戦闘が行われる。彦根藩と高田藩が小瀬川であっけなく壊滅したが、幕府歩兵隊と紀州藩兵が両藩に代わって戦闘に入ると、幕府・紀州藩側が押し気味ながらも膠着状況に陥る。また芸州藩は幕府の出兵命令を拒んだ。

石州口では、大村が指揮し（指揮役は藩主・毛利元純）、中立的立場を取った津和野藩を通過して徳川慶喜の実弟・松平武聰が藩主であった浜田藩へ侵攻し、１８日に浜田城を陥落させる。明治まで浜田城と天領だった石見銀山は長州が制圧した。

小倉口では、総督・小笠原長行が指揮する九州諸藩と高杉晋作、山縣有朋ら率いる長州藩との戦闘（小倉戦争）が関門海峡をはさんで数度行われ、一時肥後藩が互角の戦いを見せた（赤坂・鳥越の戦い。現在の北九州市立桜丘小学校付近）。しかし佐賀藩は兵を出さず、小笠原の指揮よろしきを得ず、諸藩は随時撤兵した。７月２０日、大坂在城の将軍徳川家茂が、２１才で急死した。窮地の幕閣は、将軍の喪に服すとの口実で休戦する他なかった。将軍家茂薨去の報を受けた小笠原も戦線を離脱し、孤立した小倉藩は８月１日城に火を放って香春に退却した。その後も小倉藩と長州藩の戦闘は続くが、これで事実上、幕府軍の全面敗北に終わる。

戦いの長期化に備えて各藩が兵糧米を備蓄した事によって米価が暴騰し、全国各地で一揆や打ちこわしが起こる原因となった（世直し一揆）。

徳川慶喜は大討込と称して、自ら出陣して巻き返すことを宣言したが、小倉陥落の報に衝撃を受けてこれを中止し、家茂の死を公にした上で朝廷に働きかけ、休戦の御沙汰書を発してもらう。また慶喜の意を受けた勝海舟と長州の広沢真臣・井上馨が宮島で会談し、停戦が行われた。いまや江戸幕府は、僅か一藩の反抗さえも制裁できないことを天下に露呈し、徳川将軍家の権威は地に堕ちたのである。

なお、徳川慶喜は停戦の直後から、フランスの支援を受けて旧式化が明らかとなった幕府陸軍の軍制改革に着手している。

３．最後の将軍　慶喜の苦悩

徳川宗家は一橋慶喜が相続し、やがて第１５代征夷大将軍の宣下を受けた。遅れたエース登場だった。慶喜は、精力的に幕勢たて直しに努め、軍制改革や幕府機構改革などに実績を上げた。久しぶりの指導力を備えた将軍の出現に、反幕側の警戒心は高まった。慶喜

の幕勢再建努力は、二つの条件に支えられていた。一つは孝明天皇の信任であり、もう一つはフランスの後押しだった。

伝統墨守の孝明天皇は、徳川家への政権委任原則を固く守り、征夷大将軍軍による攘夷実行という建前をあくまで期待していた。また、個人的には京都守護職松平容保の誠忠一途な人柄を愛し、強い信頼を寄せていた。天皇の変わらぬ信任は、落ち目の幕府の権威を支えるのに貴重な後ろ盾となった。

その頃フランス本国では、野心的なナポレオン三世が、世界各地へ勢力を伸ばそうとしていた。極東では対日貿易利潤の拡大を目指し、やり手のロッシュ公使を派遣した。元治元年（１８６４）３月に着任したロッシュは、先行イギリスの固い地盤への割り込みを策し、まず幕府に低利借款を提案して信頼を獲得した。幕府内には親仏的な雰囲気が生まれ、フランスからの軍事協力・経済援助や日仏合弁事業計画などの話し合いがすすめられた。幕府実務官僚の一部には、フランスからの援助で幕府軍事力・経済力を強化して長州藩など反幕勢力を掃討し、その勢いで徳川中心の中央集権国家体制にまで持っていこうという構想さえ語られるようになった。新将軍慶喜は、ロッシュに激励されて幕勢回復への自信を深めていった。

慶喜は、将軍就任後も江戸に帰らずに京都二条城に居ずわって幕府再生に力を注いだが、結局は幸運に恵まれなかった。

まず頼りの孝明天皇が慶応２年（１８６６）１２月に３６才で急死する。孝明天皇の後は幼い明治天皇が即位し、朝廷内ではこれまで親幕的な孝明天皇から抑えられていた岩倉具視など王政復古派公家の勢力が台頭するきっかけとなった。

フランスの支えも怪しくなってきた。フランスの派手な幕府への食い込みは、イギリスを刺激した。イギリスは、幕仏提携に対抗して反幕勢力なかんずく薩摩藩への接近をはかり、パークス公使が鹿児島を訪問した。ここに幕薩対立は英仏対抗と連動して、日本の内政に外国の干渉を呼びこみかねない不穏な状況をもたらし、心ある識者の危惧をまねいた。

他方、フランス本国政府は、幕府への過度の肩入れが、イギリスとの関係を悪化させるのを警戒し、ロッシュが行き過ぎないように手綱をひいた。フランスの援助は先細りに転じ、当てにしていた慶喜を落胆させた。

４．大政奉還

孝明天皇急死やフランス援助先細りで、徳川慶喜の幕勢回復努力は壁に直面したが、部外からは、なお着々と成果が上がっているように見えた。危機意識を昂進させた薩摩藩士西郷隆盛や大久保利通らは、武力対決、つまり討幕へと方針を固め、長州藩との同盟関係を強化し、京都・大坂に軍事力を集結するとともに、岩倉具視ら王政復古派公家と組んで討幕密勅の入手を画策した。

このままでは内乱にまで発展しかねないのを懸念した土佐藩が、そこに割って入った。かって土佐藩は、長州藩の尊攘論に追随していたが、前藩主山内豊信（容堂）の指導力回復とともに、尊攘派から公武合体派に転じていた。土佐藩士後藤象二郎は大政奉還論を唱え、容堂に後押しされて慶喜周辺に入説した。

大政奉還論とは、一旦徳川将軍家が国家統治権（大政）を天皇に返却（奉還）して将軍の座から一諸侯の地位に降り、改めて天皇の下に徳川家以下の挙国的諸藩連合政権（公儀政体）を組織して日本国の統治にあたるというアイディアだった。

つまり形式的に大政奉還することで討伐の名目を消失させ、内乱を回避できる一方で、新設される公儀政体の議長には慶喜の就任が予定されて統治の実権が徳川家に温存されるという仕掛けである。慶喜にとっては、名を捨てて実をとれる起死回生の妙策であるように思われた。

幕府方式の政権維持に自信を喪失しつつあった慶喜は、土佐藩が用意した策に賭け、慶応３年（１８６７）１０月１４日、大政奉還の上表を朝廷（天皇）に提出した。徳川家が２６５年にわたって独占的に保持し続けてきた国家統治権を自発的に返上するとの意思表示である。全国にショックが走ったのはいうまでもない。その影響は計り知れないものがあった。もっとも当面の効果は劇的に表れ、討幕派（武力倒幕派）の暗躍によって既に薩長両藩に下されていた討幕の密勅は取り消された。

では、「大政」の具体的中身は何か。夾雑物や贅肉をそぎ落として整理すれば、究極的には大名統轄権と外交権の二つの権限に集約される。大名統轄権とは、領主権与奪を担保に諸大名を指揮命令する権限であり、その核心は軍役徴集権つまり石高に応じた軍事的奉仕を科す権限である。外交権は、国家主権を代表して外国と交渉する権限であり、その核心は条約締結権である。

大政奉還によってこの二つの権限が理屈の上では朝廷に移管されたが、果たして朝廷は実際に権限を行使できたであろうか。権限行使の前提は、相手側の照応を確保すること、すなわち大名の場合は服従であり、外国の場合は国際的承認だが、朝廷は確保に成功しなかった。

いきなり大政なるものを持ち込まれた朝廷には、権限行使の用意も能力もなかったのである。朝廷はとりあえず、慶喜に「天下とともに同心尽力」せよと沙汰して、幕府統治の現状を容認するとともに、重要国事協議のために１０万石以上の大名を招集したが、反応は鈍かった。１０月２４日、慶喜は念を押すかのよう征夷大将軍職の辞退を朝廷に申し出たが、受理は保留された。そこで２７日、幕府は、在京諸藩重臣を二条城に招集して将軍職辞意が聴許されなかった旨を示達した。

大政奉還にもかかわらず、朝廷には征夷大将軍職を変動する意思がないこと、つまり朝廷との関係において徳川家の地位に実質的変化が生じていないことを諸藩に誇示したので

あろう。朝廷からの召集には腰が重かった諸藩が、幕府の召集には相変わらず応じたということは、大政奉還後も大名統轄権は実質的には徳川家の手中に残っていたことになる。

外交権の場合も同様だった。幕府が、外交事務は「是までの手続き」で処理していいかと問い合わせたのに対し、朝廷は、「書面之通」と回答して現状継続を容認した。そこで幕府は１１月１９日、新潟開港と江戸開市を当分延期すると内外に布告し、２２日には横浜外国人居留地取締り規則を制定し、２８日にはロシアとの改税約書を締結するなど、外交権を従来どおり行使した。

大政奉還実行で事態は慶喜や土佐藩の思惑通りに進んだかのように見えた。奉還という思い切った「誠意」のデモンストレーションによって討幕論は気勢を殺がれ、しかも将軍職辞意は不聴許ということで、大政は事実上幕府に再委任された形となった。ゆえに幕府は、実質的に大政を相変わらず執行したのである。慶喜は死中に活をつかんだのだ。

５．王政復古宣言

大政奉還後の政局は、日に日に徳川側に有利に展開していくかに見えた。あせった薩摩藩討幕派の西郷や大久保は、岩倉ら王政復古派公家グループと組んで１２月９日、「王政復古」の宮廷クーデターを敢行する。薩摩・安芸・尾張・越前・土佐の五藩軍勢を誘い込んで御所から反対派を締め出すと、岩倉は、幼い明治天皇面前で王政復古の大号令を読み上げた。すなわち、慶喜からの大政奉還を断然受領して幕府を「廃絶」し、代わりに天皇の下に総裁・議定・参与の「三職」をおいて国家統治に当たる旨（王政復古）を、天皇名で発表したのである。いわば近代天皇制国家の建国宣言だった。総裁には皇族の有栖川宮熾仁（たるひと）親王、議定には王政復古派公家とクーデター参加諸藩主層、参与には岩倉と西郷・大久保・後藤象二郎らクーデター参加諸藩士などが任命された。まもなく長州藩が赦免されて入京を許され、大宰府からは三条実美ら五卿も帰京して、それぞれ政権に参画した。

和泉の死で絶えたかに見えた「尊皇攘夷」と「王政復古」は、堂上公家の岩倉具視に引き継がれた。岩倉は薩摩の大久保一蔵の助けを得て「王政復古」を為した。

大久保は前将軍徳川慶喜の大政奉還の裏に廃藩置県で郡県制に移行する政体革命があることを知って、西郷とともにこれでは薩摩藩が消えうせると「討幕」を決意した。和泉が唱え、岩倉が推進する「王政復古」は大久保達に討幕の大義名分を与えた。

慶応４年１２月９日、天皇は「王政復古」を発した。

岩倉が唱えた「王政復古」は和泉の主張そのものである。国政は天皇の親政とし、摂政が政事をつかさどる朝廷を廃して、摂政の五摂家を退けた。それまで身分、格式が厳しい朝廷では、平公家は政権に登ることはかなわなかったが、岩倉は「王政復古」で自らの政

治基盤を磐石にした。
和泉は死してのち「王政復古」を成し遂げた。王政復古を目指して討幕の魁となった和泉は維新後、皇国史観によって改めて評価された。
明治５年（１８７２）、政府は永世祭粢料として年毎十石を贈ることを遺族に伝えた。

王政復古宣言への反応

この王政復古の大号令によって、徳川幕藩制国家（幕藩体制）から近代天皇制国家へと国家体制における不可逆的で決定的な転換が一挙に実現したかのように見えるが、実際は少し違うようである。慶喜の対応次第では、結果は別の形になったかもしれない。
「王政復古」宣言の後、京都御所には天皇権威を擁した急ごしらえの王政復古政権が誕生したが、旧幕府もまた依然として全国支配の体制を保持し、日本には中央政府が並立競合するという異常な事態になっていたのである。

天皇側政府は、天皇権威を抱え込んだ岩倉一派と薩摩藩討伐派が、数藩を仲間に抱き込んで強引に作り上げたものであり、当然に厳しい批判の声を浴びせられた。議定山内豊信自身が、朝議が公平を欠いていると非難する意見書を提出し、阿波・筑前・肥後など有力１０藩重臣は連名で、御所から軍隊を撤退させ人事は公明正大に、衆義にしたがって見直せと、真正面からクーデターを批判した。不評に動揺した岩倉や大久保は、慶喜が辞官・納地を申し出たら寛大な処置をとって議定に任命し、他の公家や諸藩主も議定に登用する用意があると、姿勢を軟化させた。
他方、賢明にも京都を離れて大阪城に退避した慶喜は、１２月１６日、イギリス・フランス・イタリア・アメリカ・プロシア・オランダ六カ国公使を招き、王政復古クーデターを「幼主を挟み、私心を行い万民を悩ます」と非難して各国に内政不干渉を要請するとともに、条約履行初め外交事務は従来どおり徳川政府が責任をもつと言明して各国公使の了承を得た。国際的には徳川政府が、依然として日本国の正統政府だった。つまり天皇側政府は、国際的には未承認だったのである。
慶喜の立場は時間とともに断然有利に作用した。このまま大坂城で自重していれば歴史のコマは違った方向に動いたかもしれない。ところが慶喜は、最後の詰を誤って九分通り手中にしていた勝利を取り逃がした。西郷隆盛が仕組んだ罠に不用意にもかかったのである。

焦った薩摩藩倒幕派は、戦争に訴えて「死中に活」をつかむほかはないと腹を決めた。西郷は、浪士連中を使って江戸市中で放火や強盗を行わせ、徳川側を挑発した。怒った徳川政府当局は、浪士の巣となった江戸薩摩屋敷を焼き払った。２８日にこの報が大坂に届くと、慶喜の周囲ではさらに「討薩」を望む声が高まった。慶応４（１８６８）年元日、

慶喜は討薩表を発し、１月２日から３日にかけて「慶喜公上京の御先供」という名目で事実上京都封鎖を目的とした出兵を開始した。旧幕府軍主力の幕府歩兵隊は鳥羽街道を進み、会津藩、桑名藩の藩兵、新選組などは伏見市街へ進んだ。

慶喜出兵の報告を受けて政府に緊張が走り、３日から緊急会議が召集された。薩摩藩軍３０００と長州藩軍１５００は、京都郊外の鳥羽と伏見に迎撃の陣を構えた。

客観的には徳川政府側が圧倒的に優勢だった。兵力に３倍差があるうえに、天下の名城大坂城を根拠にし、江戸からのフランス式新鋭軍隊の増援も期待できるし、大坂湾には国内最強の徳川艦隊が控えていた。天皇政府側の戦争指揮に当たった西郷隆盛も敗北を覚悟し、最悪の場合には天皇を擁して中国山脈に立て籠もり、ゲリラ戦で抵抗するとの作戦計画を立てたほどだった。

慶応４年（１８６８）正月３日、大坂から京都へ向って通常の行軍隊形で進んでいた徳川軍の先頭が、鳥羽と伏見で薩長軍と衝突した。緒戦は待ち伏せていた薩長側に優勢に展開したが、勝敗の帰趨はわからず、戦闘が長引けば戦力に限りがある薩長側は不利だった。前線では一進一退の戦闘が続いたが、４日に朝廷では仁和寺宮嘉彰親王に錦旗を与え、新政府軍が官軍となる。

こうして薩長軍の前線に「錦の御旗」が翻るや、肝心な慶喜の戦意が崩れた。錦旗が伝統的に天皇軍隊の旗印であることを心得ていた慶喜は、自らが「朝敵」にされたと受け取ってしまったのだ。水戸家に育ち尊王心の篤い慶喜には、いたたまれない事態だった。彼は政治理性を失ったかのように、前線で苦闘している部下を見捨てて６日夜にひそかに城を抜け出し、軍艦で江戸へと逃げ帰った。総大将の敵前逃亡で徳川軍は総崩れとなり、薩長軍は思いがけない勝ちを拾ったのである。

「鳥羽・伏見の戦い」は、僅か数日間の局地戦だった。だが日本の政情に一大転換をもたらした。天皇政府と徳川政府との力関係は一挙に逆転し、僥倖にも勝ちが転がり込んだ天皇政府側には全国制覇への道が開けた。様子を伺っていた西日本諸藩は、なだれをうって天皇政府側になびいた。逆に敗戦の徳川政府は、依然として東日本を確保していたとはいえ、全国政権の座が危うくなり始めた。勢いに乗った天皇政府は、７日、徳川慶喜追討令を発し、諸藩を動員して全国統一の大事業へと乗り出した。天皇政府のもとにはせ参じた諸藩は、新政権内での有利な地歩を狙って、仲間を出し抜こうと忠誠競争をはじめたから、それに連動して天皇政府の求心力がみるみるうちに高まり、諸藩に臨む立場が断然強くなった。ここに天皇政府は、今や大名統轄権を行使できる態勢となったのである。

６．徳川政府の終焉

江戸城に帰還した慶喜は、抗戦と降伏の間を揺れ動いていた。フランス公使ロッシュは、

熱心に再起を勧告した。また勘定奉行小栗忠順は、卓抜な作戦計画を立てて慶喜に献策した。すなわち、東海道を海岸沿いに東進中の天皇政府軍を優勢な海軍力で横撃し、更には敵軍を関東平野に誘いいれ、箱根峠を封鎖して袋のねずみにし、包囲殲滅せよとの戦略だった。もし小栗策が実行されたら、形勢は再逆転したかも知れない。したがって、鳥羽・伏見敗戦後といえども、なお徳川家が最終的に天下を失うかどうかは未確定だったのである。しかし、いずれも慶喜の容れるところとはならなかった。

結局、慶喜は大勢が過ぎ去ったと観念し、２月１２日、退城して謹慎の意を表した。慶喜の尊王心もさることながら、元来が貴公子育ちだったがゆえに、権力への執着に淡白な傾きもあったのだろう。その後の経過はよく知られているように、西郷隆盛と勝海舟との会談で徳川政府は戦果を見ることなしに降伏する運びとなったのである。

旧幕府の家臣の中には、将軍の大政奉還やその後の恭順の姿勢を潔しとせずに、例えば幕府の海軍副総裁だった榎本武揚は軍艦を率いて蝦夷（北海道）の函館五稜郭に拠った。そして幕府に心を寄せる有志は江戸上野の山に籠もり彰義隊と称した。

鳥羽伏見の戦いで幕軍は大敗した。雪崩を打って江戸に逃げ込んだが、必ずしも総力を挙げて新政府軍に抵抗しようという動きはなかった。彰義隊も幕臣の群れではない。むしろ関東地方の豪農の息子が多かった。

以前、久留米の製造所や佐賀藩の精錬方を見学した薩摩藩の中原猷介は、既に官軍の参謀になっていた。久留米藩も新政府軍に参加することとし、千歳丸に載せた藩兵を江戸に送った。そして上野の彰義隊攻撃に参加した。

この時久留米藩兵の使った新鋭の銃砲は敵味方を驚かせた。これは、やはり彰義隊を攻撃した佐賀藩兵の使ったアームストロング機関砲が大いに効力を見せたのと同じだ。そして共にこの新しい銃砲は田中久重の考案し製作したものであった。

さらに、関東地方から奥羽越・蝦夷地にかけての東日本各地で旧幕府系勢力の武力反抗が起きた。いわゆる「戊辰戦争」である。主因は、勝利におごった政府側の横暴な態度が、敗者を刺激し反発を招いたからだった。しかし反乱側は、大勢決着後であり、戦略的展望に欠け、総じて戦力を組織し運用する力量も弱かった。結局政府側諸藩軍に圧倒されて屈服した。

７．王政復古宣言後の藩内抗争（久留米藩）

田中久重が久留米で比較的安寧の生活を送っていた慶応３年ごろ、世の中は大きく変わりだしていた。

既に述べたが、慶応３年（１８６７）１０月１５日、将軍徳川慶喜がなした「大政奉還」

は、全国３００諸藩を驚愕させた。次の将軍を狙う島津久光は色めき立ったが、ここを下克上のチャンスと狙ったのは薩摩の大久保と岩倉だった。１２月９日、摂政二条斉敬が退出した際に、幼い明治天皇を戴いて真木和泉が唱えていた王政復古をなしとげたのである。異変に気づいた摂政二条が御所に戻ったが、警衛の薩摩藩士に拒まれ御所に入れなかった。

和泉が唱えていた王政復古は、朝廷成立以前の天皇親政時代に政体を戻すことであった。朝廷は徳川幕藩体制より厳しい封建制に守られ、政権には五摂家しかつけなかった。和泉の親しい公家や彼らより身分が低い和泉は王政復古となっても政権に上ることは叶わない。朝廷が出来る以前の親政に戻すという意味は、身分の低い彼らが政権を手にすることを意味していた。王政復古を幕府へのクーデターとする向きもあるが、幕府は既に大政奉還を成してクーデターは成立しない。王政復古は下級公家の岩倉らが成した朝廷に対するクーデターだったのである。

大政奉還は慶喜も王政復古を予期していて、二条摂政などと王政復古について話し合ったいた。慶喜の考えた王政復古は、議員内閣制の上に象徴天皇を戴くことだった。だが、大久保や岩倉が進めた王政復古は、政権に諸侯や五摂家を戴かず、彼らが政権を掌握する「下克上政権」だった。これを知った幕臣やそれまで京都守護職をになってきた会津藩などが黙っているはずがなかった。

水戸学派が唱えた「勤王攘夷」思想の背後には、「全国の武士集団が日本の防衛集団」という考えを基礎においていた。つまり来航したペリーなどの外敵を打破り、日本の国を守る戦闘集団は武士をおいて考えられなかった。大名はその武士団の上に乗るものとして長年既得権益化していたし、そして、もし勤王政府が成立すれば、この大名連が執政の当事者でなければなからかった。ところがどうであろう。大久保利通と岩倉が作り上げたのは、まったく別のものであったのである。

それに、西郷隆盛、大久保利通、それに木戸孝允などは、攘夷を捨てて、「討幕開港」とでも言うべき立場を強め、「武士は日本の防衛担当者」という論理を捨ててしまう。そして武士に代る戦闘集団は一般人を起用しての官軍とし、「武士無用論」に達してしまう。

しかし、西郷や木戸は、尊王攘夷のスローガンで動員した武士大衆を引き付けておかなければ、「討幕開港」を実現することはできなかった。いわば、討幕・維新の指導者たちは、「攘夷」＝「武士は日本の防衛担当者」という論理を捨てていない武士大衆を騙していたということになる。しかし「討幕」という目標がある間は、その難問は表面化しなかった。

ところが、いざ討幕が成功し、新政府ができると、新政府は幕府以上の積極的な外交を展開する。そこに至って武士大衆は、騙されていたということに気付き、一連の事件が起きるという構図になったのである。

諸藩にも王政復古の実情が漏れわたるにつれ、幕府方への支援が多くなっていった。

慶応３年の暮、佐賀藩主鍋島閑叟は御用人千住大之介を使者として久留米藩に呼応して

薩長の横暴を諌めるべく軍隊を率い上京するよう要請した。

千住大之介に対応したのは不破美作が中心であった。彼も両肥・両筑が一緒になって幕府をたすけ、再び徳川氏に政権を握らせようと計画した。

佐賀藩の呼びかけに久留米２１万石・福岡５２万石・柳川１１万石・熊本５０万石が兵を整え、艦船で上京することが決まった。

「加藤田日記」によると慶応４年１月８日、藩主有馬頼咸は家臣を登城させ、四藩が徳川慶喜支援のために１月２６日に上京することを発している。

ところが上京予定の前夜、久留米藩に異変が起きた。１月２６日未明、下城途中の参政不和美作が小河真文率いる久留米勤王党の１５歳から２１歳の若者２４人に襲われ非業の死を遂げた。真文らはその夜、美作の生首を引き下げ登城、１２ヶ条からなる「斬奸趣意書」をかかげ、家老有馬主膳を通じて藩主に上京中止と藩論の改革を迫った。少年たちによるクーデターである。

生首を見て狼狽した老職は怯え、無定見にも真文らの無礼と参政美作暗殺の非を責めるどころか、不破ら藩政執行部の処断を藩主に言上した。それを聞いて頼咸も兵を率いて上京することを忘れたかのように、暗殺団を「忠士の者」と褒め上げ、上京を中止して藩論を一夜にして反してしまった。

藩主の頼咸が藩論一新を承知せねば、近侍の小姓の有馬孝三郎、堀江七五郎、尾関造酒が、その場で自刃して頼咸の翻意を促すはずであった。孝三郎は家老有馬主膳の長男である。

主膳は、息子が暗殺団の一味であることを知っていて、斬奸状を先に受け取っているので、不破暗殺も事前に知っていたに違いないといわれる。これは若者達に参政暗殺をそそのかしたものが大宰府にいた真木党の水野正名だけでなく、守旧派の家老たちにもあったことを示唆している。暴発しやすい若者を使った陰湿なクーデターである。

主膳に加え、暗殺団の一味であった有馬大助の父、有馬蔵人も家老監物失脚後、藩重役に昇っていることからも、不破美作暗殺事件が真木党・守旧派の周到な計画だったことが伺われる。事件を知った老職たちは狼狽するばかりで事態を終止することが出来なかった。それどころか首班の小河に指示を仰ぐ始末だった。

小河たちはこの時とばかりに有馬監物をはじめ、藩政を担ってきた今井栄・磯部勘平・久野市助・松崎誠蔵・喜多村弥六などの行政・経済のテクノクラートを一斉に役職から追放し、代わりに幽閉されていた尊攘派の吉田丹波・池尻始・真木主馬・西原湊・水野又蔵らを赦免した。２月２０日、少年達の指示により藩主を上京させ、三条に仕えていた水野正名を御用席詰に登用した。

十二、版籍奉還前後の久留米藩

有馬監物・不破美作によってそれまで幽囚、圧迫を受けてきた真木党は両人を憎み、ついに慶応４年(明治元年）１月２６日夜、不破美作は下城の途中を小河吉右衛門(真文）以下２４人の真木党の青年に襲われて斬殺された。監物も殺害の目標とされたが、家老を殺しては後が面倒としてその難を逃れた。斬殺後、２４名の者は自首したが、時は王政復古を迎えている時、罰せられるどころか、藩主より「忠士の者」のお褒めの言葉を頂戴して無罪放免になった。

不破美作が殺害されると有馬監物政権はたちまちに瓦解し、真木党の勤王派が復活し、２月２４日に藩政一新のため水野正名が参政に登用された。監物は３月１日に引退した。監物政権の政策を執行してきた今井栄、松崎誠蔵らに対しては終身獄、３２人も処罰された。

明治２年殉難十志士

参政不破美作の暗殺で藩論が一夜にして変わった久留米藩の藩政は、大宰府に居て小河らを操り、少年らを不破美作暗殺に向わせた水野正名に任された。

大参事になった水野は、まず積年の恨みを晴らすために陰惨な報復を行った。

慶応４年（１８６８）４月６日、有馬監物ほかそれまで藩政を担っていた三十二名の知行を召し上げ、永揚屋・永蟄居・役格召し放ち・重遠慮処分にした。この中に今井栄ほか十一名は永揚屋（牢屋）入りであった。

有馬監物への罪状申し渡しは次の通りであった。

「葵亥文久３年の夏、改心上京し、正論相い唱え、長州益田右衛門一同御幸の儀、御勧申し上げ、同年８月１８日変動につき、またまた変心、正邪を弁ぜず、勢いにしたがって進退し、すこぶる天下の信義を取り失い、御国是の妨げに相成り、あまつさえ姦曲不破美作に同腹、重職の身分相忘る。之により下屋敷に退隠し、永蟄居仰せ付けられるものなり」

４月１０日、永蟄居を命じられた家老有馬監物が憤死した。４７歳であった。１１日、江戸藩邸の参政吉村武兵衛は帰藩の途中、大坂で永揚屋入りを命じられ切腹している。

明治２年（１８６９）正月２４日、永揚屋入りしていた今井栄・喜多村弥六・久徳与十郎・本庄仲太・梯譲平、また永蟄居中の松岡伝十郎・石野道衛・北川旦・松崎誠蔵の九名には元藩幹部に「今般国是の妨げに相成るをもって屠腹仰せ付け候」という簡単な申渡しだけで、寺町徳雲寺で切腹させられた。時に今井は享年四十八歳であった。

其の他のケースも一応罪状が列記されているが、その内容は乱暴そのものである。ただ

復讐心だけで理由などどうでもよいのである。明治政府が近代化を進める中、久留米藩は藩政時代に逆戻りしていた。自刃を命じられた者たちは困窮した藩財政の再建に功があった財政通のテクノクラートばかりで、水野らの政治に対立したものたちではない。後に彼らは吉村武兵衛とともに「久留米藩明治二年殉難十志士」と崇められることになった。薩摩の黒田清綱は、水野の浅はかな処置に「久留米は惜しい人物を殺した」と怒った。

明治２年（１８６９）版籍奉還が行われた。久留米藩は６月１７日、版籍を奉還し、豊氏以来十一代２５０年の有馬藩は、この日をもって終わった。同日、久留米藩がおかれ、旧藩主有馬頼咸が藩知事となり、久留米城を藩庁として知政所と称し、水野正名が大参事となった。その水野の久留米藩は「応変隊」を組織し、戊辰戦争では新政府側で出兵している。

多くの諸藩が藩兵の解散や縮小を行っているときに久留米では軍隊が拡大されていた。そして、水野の権力は政治力ではなく応変隊による有無を言わせぬ恐怖政治だった。藩内で力が正義になった。狂気が藩政を覆っていた。

藩士は新政府の方針で家禄が減らされた上、上米が命じられ生活がくるしくなったが、水野の恐怖政治を恐れて反目するものもいなかった。偏狭な攘夷主義が藩政を覆い、久留米藩は口を開けば「王政復古がなった以上、こんどは外国排撃の攘夷戦争だ」と声高に叫んでいた。

久留米藩では上京した有馬主膳が「東京遷都反対・外国貿易反対・郡県制実施反対」をかかげて、今では時代錯誤な「封建・攘夷」を明治政府に迫っていた。

このような水野の危険な政策が政府の疑惑を受けるのに時間はかからなかった。木戸孝允（たかよし）は「久留米・肥後二藩、尤も巨魁と相見申し候」と久留米藩に対して警戒を怠らなかった。しかし、藩政を握る参政の水野は、大参事とは名ばかりで跳梁跋扈する小河ら過激な若者達を抑えきれず、手をあぐねて傍観するに留まっていた。

藩経営におけるテクノクラートを失った久留米藩は、失政のツケを藩士の上米に求めるなど、政治面も経済面も崩壊していったが、政務にも財務にも通じない水野は何も手を打つことが出来なかった。水野の念頭にあるのは復習だけであった。

水野はさらに榊次太夫・加藤喜市郎に四日市事件（宇佐市）の責任を取らせ切腹を命じた。もともとは藩政を巡り加藤と大激論となり、水野は自分に楯を突いた加藤に怒って切腹を命じたのだという。水野が大参事となり遺した仕事はこれらの報復だけだった。水野は解因後、常に攘夷派公家の頭領三条実美の側に仕えたが、維新後、新政府に用いられることがなかったことを見ると三条にも重要視されていなかったらしい。久留米に在っても、大参事の水野の立場は無きがごときで、反対に小河ら若者達に使われる始末だった。

無能な水野を大参事に擁いた久留米藩は不幸だった。

明治３年（１８７０）９月、長州藩で奇兵隊の反乱（脱退騒動）を起こして敗れた大楽源太郎が久留米に逃れた。明治政府の「開国和親」に不満を持っていた久留米藩尊王攘夷派政権は大楽を庇護し、大楽らによるクーデター計画に参加した（二卿事件）。このクーデター計画は明治政府に発覚し、明治４年（１８７１）３月１０日に東京の久留米藩邸が政府に接収された。藩知事の頼咸は弾正台の取り調べを受け、閉門３０日の謹慎を命ぜられた。その後、頼咸は東京に移住した。

明治政府は巡察使四条隆謌少将率いる軍を久留米に派遣し、事態の糾明にあたった。この結果、水野正名は終身禁錮（のち獄死）、小河真文らは斬首、ほかの有力家臣も失脚に追い込まれた（久留米藩難、辛未の藩難）。

この明治４年の辛未の藩難事件によって、久留米の人材の多くが失われた。

悲劇としか言いようのない久留米藩の惨状であった。今になってみれば、彼らを時代遅れの頑迷者と笑うこともできるが、本人達にすれば大真面目だったはずである。原因は尊王思想が強烈に久留米の土壌にしみついていたこと、それに、海に面せず外界との接触が極端に少なかった土地柄からか、世の中の大きな流れを感じとることが出来なかったことであろう。島国育ちの偏狭な知性、隣国と陸地で直接国境を接せず、外敵侵入の恐怖が少なく、自分のことしか考える必要のない所では、大局的に頭を使うことなく、身近な出来事、それが自分に有利になるように仕向けることにしか気を配らない性癖がある。

久留米藩の悲劇の原因の一つに、このような偏狭な「尊皇攘夷」思想と、島国育ちの知性を指摘できるのではないかと思う。

頼咸の育英事業（東京移住後）

東京都中央区蛎殻町自邸の水天宮（文政元年、九代藩主頼徳が、久留米の水天宮より、芝赤羽の藩邸に分祀した神社で、東京を中心とした庶民の信仰を深く集めた）の浄財は、頼咸自らのものとせず、別途収入として、公益慈善の事業並びに旧藩民の奨学育英費に当てた。

この水天宮の浄財を基とした私財で明治５年、蛎殻町の邸内に「報国学社」を設立し、のち赤坂に移して「有馬私学校」と称した。のちの「有馬学校」のことで、これについて吉村駿夫氏の次の論文がある。

「学費と経営・・・学費は東修金千匹、諸入賞金弐分、月俸金弐円となっていたが、これは他校の半額ぐらいであったと言われたが、たとえお賽銭でまかなわれていたとしても、それによって教育内容が左右されたとか、歪められたということはなかった。　当時の多

くの私塾と同様、皇・漢学や書道・洋算を教え、英人二人を含めて八人の英語教師を抱えて、英学に重点を置く学校であった。

教師と教材・・・教師は執事兼職員の市原正樹を含め日本人十六名と英人二人。科目は国史・漢学・英学（訳読、文典、習字、会話、修身、地理、歴史、経済、究理）・算術・書道で、英人は当初のケンノン、ホッジスからキーリング、ピサスン、ヘアに代わったが、ヘアは後、商法講習所教師に転じ、東京高商で商業教育に生涯を捧げた人で、出色の教師であった。

（中略）

頼咸は久留米藩主時代、藩士拓殖善吾の洋学修業や外国留学、海運・海軍拡張のための外国人との接触、松下元芳など藩内医学生の英語研究、好生館英学部の設置などのことがあって、彼にはいささかの洋学アレルギーもなかった。

有馬監物・今井栄など開明派断罪後の勤王派の政権独占によって、旧久留米藩内地からは開明的思想がまったく影を没した。あまつさえ明治４年の反政府陰謀事件に連座して彼は閉門の刑を受けたが、そのころ、兄の旧津和野藩主亀井茲監は、培達義塾というドイツ語塾を開いていた。また旧領地の宮本洋学校のことも、彼の脳裏にあった。

これらの事が原動力となって、彼を英学校設立に踏み切らせたと思う。藩難事件の判決後まだ一年を経過していない。当時、旧藩主はただ逼塞するのみ、また旧藩主のブレーンとなり、手足となる程の器量人はいなかったと見てよい。

「廃校」・・・有馬学校は内容充実し、蛎殻町に眺望のきく三階建て校舎が完成、他に類を見ないほどのものであった。しかし惜しいことに長続きしなかった。明治７年ごろ、監督の木戸氏死亡後、市原という会計係が金を使い込んだという噂が残っている。

有馬学校は寿命わずか５年位であった。この学校で学んだ著名人は見当たらない。しかし、有馬学校も運営に優れた人物を得ていたら、慶応や開成と並称されるものになったいたはずである。」と。

十三、久重、東京へ

明治天皇の日本最初の観艦式

藩閥といわれる討幕諸藩によって擁立された明治天皇は、明治元年（１８６８）３月２２日、大坂湾における諸艦船の観艦を行った。前に書いたようにこれが日本最初の観艦式である。

参加したのは次の六隻だった。全部九州・山口の藩に属していた。

千歳丸	久留米藩
電流丸	佐賀藩
華陽丸	山口藩
丙寅丸	山口藩
万里丸	熊本藩
三那丸	薩摩藩

そして旗艦に選ばれたのが電流丸である。

いうまでもなく、電流丸も千歳丸も田中久重が深く関わりを持った軍艦だった。仕掛けたのは薩摩藩の中原猷介や佐賀藩の浜野源六たちである。彼らは大いに面目を施した。特に中原猷介は、

（これも久留米の製造所や佐賀の精錬方を見学させてくれた田中久重のおかげだ）

と思った。そして電流丸や千歳丸の船底では、ごうごうと勢いのよいうなり声を上げる蒸気機関（ボイラー）があった。この蒸気機関も久重の考案したものである。これは久重が発明したものではないが、既に見てきたように蘭学からの知識吸収から始まり、長年にわたる彼の工夫によって、日本初めての蒸気機関が誕生していたのである。

しかしよく言われるように、

「舞台上の栄誉は、奈落（底）の努力によって支えられている」

という言葉通り、さすがに明治天皇も船底まで降りてきてこの蒸気機関を見学することはなかった。ただこれを伝え聞いた久重は満足だった。このころ久重は久留米藩の製造所で日夜藩のために働いていた。

９月２２日に東北の抗戦の核になっていた会津若松城が落ち、さらに翌明治２年（１８６９）５月１８日に、五稜郭に籠もっていた幕軍も降伏した。直後の６月１７日に有馬頼咸は久留米知事に任ぜられた。そして明治４年（１８７１）１月１８日に、久重を尤も信じ重用してくれた鍋島閑叟が東京永田町の屋敷でなくなった。まだ５８歳だった。この年７月１４日には廃藩置県が行われた。そしてついに久留米の藩営工場も廃止された。

これは、言い切ることは出来ないけれども、久重のいわゆる政治思想は無味無臭なもので、あれだけ激動の波をうねらせた幕末から維新にかけての政事事情も、久重は割合クールに眺め、その中に身をおいてもおぼれることなく生きていたということだろう。

久重は、４９歳のころ開国開明思想を広瀬元恭に植えつけられている。伏見から京都四条烏丸へ移ったころ、蘭学者の噂を耳にし、その蘭学者が彼にとって未知の学問を教えていると聞いた。それが広瀬元恭だったのである。

広瀬元恭は甲斐（山梨県）の生まれだが、１５歳のとき江戸に出て、坪井誠軒の門に入り蘭学を学び、さらに大坂の緒方洪庵についていっそう学問に磨きをかけた、当時の新進学者だった。

「日本は西洋の諸国に比べ、著しく理学が劣っている。これは鎖国をしているからだ。早く鎖国をやめて、西洋諸国の文化を自由に取り入れるようにしなければいけない。西洋諸国と自由に交通できるようになれば、日本は今よりはるかによい国になる」

講義のたびに熱っぽく開国論を主張する元恭に、久重はひきつけられた。しかし、４９歳になっていた久重は、これによって政治思想を持ち、行動に出るようなことはしなかった。彼を取り巻く環境や生い立ちが強く影響したのであろう。

その後、久重はいろいろな人々と接触する機会が多くなっていくが、「公平中正」の立場を保ち、どちらかといえば、

「日本の国防は幕府を中心にして行こう」

と考えていた佐賀藩主鍋島閑叟や久留米藩主有馬頼咸の影響を強く受けたと思われる。

ＡかＢかという分け方をすれば、鍋島閑叟や有馬頼咸は明らかに佐幕派である。しかし同じ佐幕派であっても単純な開国論者ではない。あくまでも、

「日本国は日本人の手で守らなければならない。その時先頭に立つのは藩である」

という武士のいわば責務感を保ち続けた。そして、例えば衰微したとはいえ徳川幕府を核に各藩がその周りを囲んで、襲来する夷狄と戦おうとしたのである。したがって鍋島閑叟も有馬頼咸も共に、

「真の国防論者」

だったと言っていいだろう。

おそらく田中久重はこの両藩主の考えに賛同していた。しかしだからと言って久重は政治の主導者の仲間入りをしたわけではない。彼はあくまでも庶民の立場を守った。つまり“被治者”の側に身を置いた。鍋島閑叟や有馬頼咸は“治者”である。つまりその意識下にある“護民官”の位置にあった。

「治める立場」と「治められる立場」とは違う。田中久重が身を置いたのはあくまでも「治められ立場」である。治められる立場にある者が幸福な生活を送るのには、やはり治める側の優れた政治行政が期待される。久重は治められる立場に立ちつつも、治める立場にあるものがどうあるべきかを考え、その善導に参画し協力した。そして、その果実とし

ての善政を今度は被治者の立場に立って享受しようとしたのである。
だからこそ、治者の善政が行われてその恩恵に浴することができるようになれば、
「さらに被治者たちの生活内容を向上させよう」
と考えて、前記したような生活用具の便利化を図ったのだ。だから彼の、
「誰かさんを喜ばせたい」
という生活心情はあくまでも、
「被治者の生活を豊にする」
という一点に絞られていた。

「誰かさんを喜ばせたい」という心情は、生来の久重に備わっていたものであろうが、加えて京都で学んだ天文学と嵯峨御所大覚寺宮に影響を受けたことも大きい。彼は考えていた。この世には「神」が存在する、と。その神が「人を助ける」ことの重要さを自分に諭してくれたように思ったのである。

彼は天文学を学んだとき、次のように解釈していた。

神は宇宙の創造者であり、自然現象は神の姿の一部である。
人間は目と耳で神を感じることが出来る。
人間は心で神の声を聞くことが出来る。しかし、
人間は神を独占することは出来ない。心は神に与えられているのだから、と。

久重が久留米製鉄所の工場経営に勤しんでいたころ、発明したり改良したりした機器類には次のようなものがあるという。

無鍵の錠・自在捻切機械・旋盤の楕円削機械・久留米縞織上枠・煙草刻機械・蝋絞機械・醤油種油搾機械・改良竈・自転車・水車機械・改良車輪・藁切機械・風呂竈・鍍金法・製薬機械・昇水機械・浚渫機械・傘轆轤製造機械・写真機等

またその工夫による図案には次のようなものがあった。

膏薬延機械・小鈎器械・蝶番器械・紐鉛器械・敷居鴨居溝鉋器械・製釘機・歯立車・櫛歯鋸車・活版器械・洗米器・蒸気ランプ・一人乗り蒸気車・畳枕・畳床

つまり、軍需用の軍艦や鉄砲などの他に、庶民生活を便利にする生活機器を無数に発明していたということである。この辺の目配りは久重らしい。

久重はかたくなまでに、精密機械工としての世界に閉じこもり、そこから出ようとせず、機械工業の発展から取り残されたが、こうした久重の技術家としての性向が備えていたマイナスの面は、やがてプラスに作用する日が近づいていた。久重の最先端の技術にかける執念は老いてますます盛んで、そのための情報の入手にはアンテナを高く掲げて、絶えず気を配っていた。とくに佐賀の盟友たちのもたらす情報を重視していた。やがて文明開化

の足音は次第に高らかに彼の耳にも聞こえてきた。

日本の電信事業

鳥羽伏見の一戦に勝利した官軍は、その余勢をかって、錦の御旗を翻しながら江戸城に乗り込んでは見たものの、まだ東北地方の函館では、旧幕府軍の掃討戦に硝煙きえやらぬうちから、条約の忠実な履行を求めて止まぬ欧米列強の無理難題に維新の大官たちも大弱りであった。

貿易の拡大に妨げになる障害はこれを徹底的に排除しようと、「早く江戸湾の入り口などに灯台をつけてくれなけりゃこまるじゃないか。日本の港は暗くて近寄ることもできない。それに東京と横浜の間ぐらいには、はやく電信や鉄道をつけたらどうだ。造幣局の建設はどうなっているか」とばかりに、気の短いイギリス公使のパークスなどから、しばしば怒鳴り込まれていた。

なかでも灯台の建設と造幣局の設置は、先の下関砲撃事件の賠償金の交渉と、関税協定の改定交渉とが微妙に絡んで、賠償金減額の交換条件として、その設置を義務付けられたものである。それだけに督促は厳しく、新政府の直面した外交上の最初の難問であった。

維新の元勲木戸孝允などは長州出身だけに、皆から「君らが攘夷攘夷と騒いで、あんなことをしでかすから、こんな目にあうんだ」とせめられ、さすがの木戸も、このときばかりは、「いや、あいすまぬ」と頭をかいて苦笑したという。

このとき問題になったのが灯台と造幣局であったのは偶然ではない。その背景にはイギリスを軸とする世界的な定期航路網の完結と金本位制の貫徹が厳然と存在していた。定期航路の開設は港湾の整備が先決で、そのためには国際的なルールに従った灯台の建設が緊急の課題であった。

それに続いて石炭の補給や船舶修理関係の諸施設の整備が急がれた。また幣制の改革と統一貨幣の製造は金本位制へ移行する前提条件で、幕末以来の幣制の混乱は自由貿易の拡大にとって当時最大の障害となっていた。

すでにイギリスの汽船会社ＰＯが１８６４年に上海・横浜間に定期航路を開設したのに続いて、翌６５年にはフランスのＭＩ郵船も同じく上海・横浜間に定期航路を開きＰＯに挑戦した。さらに翌々年の６７年にはアメリカの太平洋郵船が東側からサンフランシスコ・横浜・香港間に定期航路を開設した。これによって世界的規模で定期航路は極東海域を最後の環として一応の完結を見た。

こうしたことを背景にして灯台の建設や造幣局の設置に続いて、少なくとも開港場である横浜と東京との連絡に鉄道と電信の建設が緊急の課題となった。本国で鉄道や電信の利便に慣れきっている外国人たちにとっては切望するところで、既に外国側から建設の申請

が出されていて、これを断りきれなくなっていた。その成否はわが国が国際社会の一員に入れてもらえるか否かのいわば試金石でもあった。

灯台の建設は横須賀製鉄所の技師ヴェルニーやイギリスから派遣されたブラントンらの外国人技師の手によって進められた。明治２年（１８６９）元旦をもって観音崎灯台が白色光を点灯したのをはじめ、野島崎灯台、城ヶ島灯台と次々に点灯し、一灯ごとに日本の海から暗さが取り除かれ、世界の海に向って開かれていく新生日本を象徴するかのようであった。そのごろ、初代の灯台頭として灯台建設の指揮を取ったのは佐野常民であった。

電信の建設は薩摩藩で電信機の製作にも関係したことのある寺島宗則が、外務大輔として外交の任にあったが、東京・横浜間の電信線架設にも着手することになった。また石黒寛二や福沢諭吉などとともにヨーロッパの土を踏んだことのある福田重固が、その知識を買われて活躍していた。パークスの示唆によったのであろうか、寺島は灯台建設に活躍していた技師ブラントンに電信線架設のことを依頼した。ブラントンは灯台のみならず、横浜港の近代的諸設備全般の整備の任務を持って来日していたもののようである。やがて１８６９年、技師のギルバードが電信機やその付属設備を持ってやってきた。早速手じかな所からというので、横浜の弁天灯明台役所（灯台）から横浜裁判所（県庁）間の８００メートル足らずで実験してみると、存外成績がよかったのに自信を得て、同年末にその横浜裁判所と東京築地運上所（税関）間に電信線を架設した。

これがわが国の電信事業の始まりで、ＮＴＴの発端である。現在１０月２３日をもって電信電話記念日とするのは、このことに由来する。

田中久重と電信事業

長崎・東京間の電信線架設の完成に息つくいとまもなく、新潟、函館の開港場をはじめ、主要各都市への電信線架設が急がれた。このように電信事業が発展すると、電信機の修理なども増大していった。それをいちいちヨーロッパに運んで修理していたのでは大変である。又事業の拡大で電信線、電信機、付属設備などの輸入に莫大な経費がかさみ、懐の寂しい新政府にとっては、それも大きな悩みであった。そこで経費の節減を図るためにも、修理など国内で出来るものは日本の製造所で済ませようとした。

そんなことから政府は明治５年（１８７２）１月、ドイツ人シェーファを雇い、やがて虎ノ門に開校した工学寮の中で電信機の製造・修理の指導に当たらせることになった。これが「電信寮製機所」の始まりである。彼は元々スイスの時計職人であったといわれている。時計師が産業革命期の産業機械の発明や製作に深く関わっていたことはよく知られているが、１９世紀後半の初期の電気関係の機械製作にも時計師の活躍が少なからず見られた。

当時電信事業に主導的役割を果たしていた佐賀藩出身の石丸安世が、すでに佐賀藩精煉方で電信機製作の経験のある田中久重の存在を思い浮かべたことであろう。また同じく工部省に関係していた佐野常民がその紹介者であったことは、十分に推測されるところである。佐賀に残っていた弟子の田中精助がまず呼び寄せられ、明治５年１１月に上京した。

その頃、久重は久留米にあって、藩営工場の跡を譲り受けて機械の製作に携わっていた。７０の坂を越えたにもかかわらず、かっての鋭気は少しも衰えず、再び最先端の技術を目指して立ち上がる機会をねらったいた。

この久重の東京進出を親身になって進めたのは、かの佐野常民であった。彼は既に新政府で活躍中であり、慶応３年（１８６７）に、フランスのナポレオン三世が開催したパリ万国博覧会観察のために渡仏したりしていた。

明治元年に帰朝し長州藩の大村益次郎と図って、

「日本陸海軍創建」

を企てた。明治２年には兵部省に入り兵部少丞になって日本海軍の創立に努力した。さらに工部省に移り工部大丞に栄進した。そしてこの時に、

「田中久重を東京に招いて、日本の近代化にもう一働きしてもらおう」

と考えたのである。

というのは、滅びた旧幕府は横須賀にフランス人の指導によって造船所や製鉄所を作っていた。これは無償のまま新政府に引き渡された。佐野常民はここを拠点にして、念願の「日本海軍の創設」を裏付ける軍艦の建造や軍港の整備に当たろうと考えた。ところが横須賀製鉄所の運営は、依然としてフランス人の手に握られていた。日本側がいくらとってかわろうとしても、こっち側の知識や技術がまだ到底未熟なのでフランス人たちは譲ろうとしない。

そこで佐野常民は、

「田中久重なら、堂々とフランス人に対抗した技術を発揮してくれるだろう」

と思いだったのだ。

明治初年における日本の近代化は、その技術面においていわゆる“お雇い外国人”とよばれる連中が支配していた。高い給与を取り、欧米の優れた技術を確かに日本に導入したが、一部の心ある日本人からは、

「果たして何時までもこれでいいのか？」

と思われていた。江戸にも、たとえば、

「漢方薬の国産化」

などを企てる日本人がいたのだから、これは脈々と続く考えだったと言っていいだろう。佐野常民も、

「日本海軍の基幹になる軍艦製造や、製鉄技術を何時までも外国人の手にゆだねておくわけにはいかない」
と、いわば、
「海軍の国産化」
を図ろうとしたのである。そしてその時に真っ先に白羽の矢を立てたのが佐賀藩時代に重用した田中久重だったのである。

しかし、この横須賀行きは結果としてはうまく行かなかった。佐野常民の推薦は、先の佐賀藩献納の機械が横須賀に回航されていたことも関連してのことであったろうが、久重自身、精密機械工として生きようと考えていたとき、重機械工業に属する造船業で自己の能力を十分に発揮できる否かについて不安があったからではといわれている。

それは結果としてそうなったということで、物事はすでに動き出していた。
明治５年暮に、佐賀から上京の途次に久留米に立ち寄った田中精助の情報を得て、久重は上京を決意したのである。
かっての門人で佐賀の精煉方に残っていた田中精助である。その田中精助がある日、久留米の久重を尋ねてきた。かれによると、
「佐野先生の特別のご配慮で工部省出仕になりました」
という。そして、「先生はあなたの上京も願っている」という。
精助は大塩の乱で甚大な被害にあった久重が伏見にいた頃の入門者だ。近江大椽の栄誉を貰った久重が京都御所へ参るときにも、三宝を掲げてその供をした若者である。久重は喜んだ。

久重は太陽暦になったばかりの明治６年（１８７３）早々に、あわただしく荷物を取りまとめ、再び故郷の山々に別れを惜しみながら、１月１４日新東京目指して新しい旅路についた。そのとき、田中大吉（後の二代目田中久重）と川口市太郎が同道し、万年時計を担いでの旅であった。博多港を出発し、大坂を経て東京に着くまでの１０日間ほどの蒸気船の旅は、それまでの陸路の長旅のことを思えば、老いの身の久重には文明の利器のありがたさを、ひとしお深く感じたことであろう。
彼らの一向は横浜から開通したばかりの鉄道には乗らなかったようで、蒸気船で東京に着いた。着岸したのは芝浦付近で、干潮だったので潮の満ちるのを沖で待っていると、海岸線に白い煙がたなびくのが見えた。すばやくこれを見つけた久重は、早速側に居合わせた田中大吉（二代目田中久重）や川口市太郎に向って、
「あれは何か知っているか」
と話しかけた。
両人が首をかしげていると、久重は

「あれが汽車というもので、黒い煙が石炭の煙、白いのが排出された蒸気だ」
と説明しながら、さも興味深げに実際に汽車が走るのを見入った。

久重は東京に着くと石黒寛二（直寛）の家で旅装を解き、旅の疲れを休めた。これより先石黒寛二は上京し明治４年（１８７１）９月４日工部省六等出仕に任ぜられ工部省に勤務していた。

田中久重は石黒の家に落ち着く間もなく麻布今井町（現在の港区）大泉寺の住職が佐賀の人であったことから、そのお寺の二階を借りて作業場とし、境内の観音堂をにわか仕立ての鍛冶場にして、さっそく石丸安世の指令でヘンリ電信機１０台の製作を始めた。しかしいつまでもお寺の二階にいるわけにもいかず、その年の１１月に芝西久保神谷町に移った。この地は今は道路になっている。

芝西久保神谷町に工場を移した久重は、明治７年にモールス電信機の製造に成功している。これは優秀な機械だったので、全て工部省が購入し、久重の工場は工部省の指定工場になった。そのため久重はさらに工場を拡張する為に芝新橋金六町九番地（現在の銀座八丁目あたり）に移転した。このあたりは西洋を模して造られた煉瓦街で、いわば文明開化の最前線であった。

これが明治８年（１８７５）のことで、初代久重が銀座の煉瓦街に「東芝」の発祥となる店舗兼工場を構えたときである。工場の規模が大きくなったので、それにふさわしい名称として従来の麻布の「珍器製造所」から「田中製造所」に変えた。だが、それだけではどうも物足りないと思った彼は、店頭に「万般の考案の依頼に応ず」と大書した張り紙を出した。面白いアイディアがあるなら、いつでも相談に乗りましょうというのである。一方、大吉（二代目田中久重）は汐留（現・東新橋）にあった電信寮製機所に勤めながら、工場近くに同様の店をもっていたと言われる。

先述した田中工場（製造所）で製造された電信機は、全国の電信所に設置された。関係者は、

「田中工場のおかげで、これからは欧米から電信機を輸入する必要はない」
と鼻高々になった。

田中工場は電信機の製造だけではなかった。さらに電信用時計仕掛けのスクリューや生糸試験器等も造った。なぜ生糸試験器が必要だったかといえば、開国後の日本で輸出品として特に大きなシェアを占めていたのは茶と生糸だった。つまり輸入品の多かった日本において、輸出品として外貨をかせでいたのが生糸と茶だったのである。そのため、政府は明治３年に群馬県富岡に始めての国営製糸工場を設立して創業を開始した。しかし、

「輸出する生糸は優良なものでなければならない」
と良識的な考えを持ち、検査を厳にした。その検査の為の機械製作を田中工場に命じたのである。久重はこの期待に応えて優秀な検査機器を造り上げた。

しかしこういう国家的な仕事をしつつも、久重はやはり民衆のことを忘れなかった。かれは工場の前に次のような広告を掲げた。
「万般の機械考案の依頼に応ず」
これは勢いに乗ったかれが、調子付いて他の分野にまで広く手を伸ばそうとしたのではない。持ち前の
「庶民を喜ばせたい」
と言う動機からである。

明治の文明開化の一つのシンボルとも言うべき電信機や電気機器の製造に携わることができたことは、発明家としての久重にとっては、何よりも嬉しかったことであろう。と言うのは、彼は発明というものは人の、社会の役に立って初めて意義を持つものなのだ、と常に考えていたからである。ただ情熱の赴くままに突っ走るのではなくて、そこには「人の役に立つこと」という筋が一本ちゃんと通っていたのである。

これは言うまでもなく、文明開化という時代の大波にさらされながらも、雄々しく生きようとする人々の求めに応じた発明活動を宣言するものである。もちろん、それは依頼者一人ひとりへの個別対応となるわけだから、それだけ密度の濃い奉仕ができるということになる。確かに、ビジネスという観点から見れば、それは決して合理的なやり方ではないだろう。しかし、喜寿を迎えた久重には、それがむしろ理想的なあり方に思えたのではないだろうか。彼は、採算を度外視してまでも依頼に応じることがあったそうだが、そこには気骨のある発明家と好々爺が共存している久重が見えるのである。

先述の「依頼に応ず」というのも、単に製作の注文に応ずるだけではなく、既に一応の技術を持つ職人達の「技術向上や改善」の相談にも乗った。しかし、本業のほうに追われてなかなか時間が取れない。また従業員たちも、
「一文の得にもならないし、本業の妨げになりますよ」
と言って反対する。久重も、それもそうだなと思って断る。相談に来た職人はがっかりして帰る。その悄然とした後ろ姿を見ていると久重はたまらなくなる。心のそこで持ち前の技術者精神が頭をもたげるからだ。純粋な久重は、
（もし俺があの人の立場なら？）
と考える。そうなると歯止めが切れる。
「お待ちなさい」
と叫んですぐ追いかける。そして改めて相談に乗った。
こういうことがしばしばあった。時には従業員達に内緒で応じたこともあった。
このいわば、
「技術コンサルタント」

の分野はそれだけで久重の名を高めた。つまり、

「自分の開発した技術を惜しげもなく他人に教え、与える」

というヒューマンな久重の科学者精神に、多くの人々が感動したからである。

誤解した人間がいて、

「昔、浅草がいろいろな興行をやっていたときに先生のからくり人形を見たことがあります。あの人形にさらに工夫を加えれば、浅草でさぞかし大当たりになるでしょう」

と言った。しかし久重は、

「たしかにあのからくり人形はわたしが若い頃、自分の生活と研究のために止むを得ずやったものですが、今考えてみればまったく児戯に類するものに過ぎない。ああいう子供のおもちゃには今の私はまったく興味がないし、またそんな暇もない。これからは、精巧な機械を作って新しい日本の建設に役立ちたいと思ってこういう看板を掲げたのです」

といって婉曲に断った。

しかし、生活向上のための機械の相談だと、先ほども書いたとおり彼は時間の過ぎるのも忘れて懇切に対応した。対する相手は身分を超えて誰でも相談に乗った。しかも損得をまったく考えない。そのため、久重の工場の評判は日増しに高まり、

「機械のことなら、田中先生は何でも相談に応じてくださる」

と大変な評判になった。

この辺は彼の前に書いた「治者と被治者の意識の差」の表れである。彼はどんなに国家権力に協力していても決して国民側のニーズを忘れなかった。前に実行した、

「被治者の暮らしを豊にするためには、治者側の行う善政の助長剤になろう」

という心情は一貫していたのである。

電信寮製機所（官営）との関わり

明治政府は、国の近代化には電信網を整備し、電信機を普及させることが不可欠だと考えていた。明治２年には、英国技師の指導によって東京～横浜間に電信装置が架設され、明治６年には東京～長崎間の電信回線も完成していた。しかし、いつまでも外国の技術に頼っていたのでは、外国資本に電信網を握ってしまわれることにもなりかねない。その危険を回避するためにも、政府にとっては電信機の早急なる国産化が必要だったのである。そして、その開発者にふさわしい人物として白羽の矢を立てたのが久重だったのである。

明治政府が殖産興業政策を進めたとき大量の外国人を雇用したのは，鉱山業等の近代化に、また鉄道や電信等の新事業の定着化に，彼らの機械操作や運転技術が不可欠なためであった。しかしながら，外国人依存だけでは拡大する政府事業の経営には不十分であった。

この限界を克服するため政府は日本人技術者の養成に乗り出していった。外国人雇用の財政負担の軽減，青少年にたいする洋学教育の提供，また困窮する士族子弟の救済など，日本人技術者の養成を促進した財政的，社会的，政治的要因を考えながら，短期間に大量の実務技術者を育成する役割を課せられたのが、工部省内各寮（明治 10 年１月，局に官制改革）の修技学校であった。その中の一つが「電信寮」である。

工部省電信寮製機所は日本の様々な電機会社の揺籃の地となった。東芝の前身である白熱舎は明治２３(１８９０)年に設立されているが、その創業者の一人である三吉正一は電信寮の出身。白熱舎の今一人の創業者は工部大学校教授の藤岡市助。白熱舎は、この二人によって東京は京橋槍屋町に設立された。

白熱舎の経営は１８９８年に三吉から藤岡にバトンタッチ。企業名も白熱舎から東京電気に改められる(明治３２年)。この東京電気が東芝の源流の一つとなっている。

今ひとつの源流は、カラクリ儀右衛門として知られる田中久重の経営する珍器製造所。この珍器製造所は後に田中製造所となり、やがて三井家の手に渡り芝浦製作所となっている。ちなみに、この田中久重の養子である田中大吉は電信寮に勤めた経歴を持っている他、沖電気の創業者である沖牙太郎は電信寮時代に田中のもとへ出向している。この三井の傘下に入った芝浦製作所と東京電気が昭和１４(１９３９)年に合併し東京芝浦電気株式会社が発足。この東京芝浦電気株式会社が１９８４年に東芝に改称している。

明治６年、「工部省電信寮」では東京・長崎線の開通など、電信事業の急速な発展によって電信手の需要が急増するのに応えるべく、電信手養成のため汐留に修技学校を開設し、生徒２００名を募集し教育を始めた。機械の多くがヨーロッパからの輸入品であったが、修技生の練習用のモールス電信機を数十台製作したのが、田中久重であった。シェーファの指導を受けたのであろう。

このように久重は上京する早々から、田中大吉や川口市太郎などを従えて、比較的簡単な練習用の電信機などのように、手の付けやすいものからはじめ、経営の地固めをしていった。

明治７年（１８７４）早々に田中精助は約１年ほどの有意義な海外旅行を終えて帰朝した。田中大吉も製機所に勤めるようになり、ともにシェーファの指導を受けることになった。その頃、製機所は最初の虎の門の工学寮から汐留にあった旧中津藩邸の土蔵の中に移ることになり、その仕事もようやく軌道に乗り始めた。

佐野常民は渡欧していたが後を引き受けたのが工部省の電信頭石丸安世である。久重とは佐賀藩における長崎伝習の関係で既によく知り合っていた。電信も明治６（１８７３）年２月には東京と長崎間に全線が開通していた。結局、久重が自分の工場を母体にしながら明治日本に貢献するのは、この電信事業の推進であった。

ところで田中精助の海外旅行のことであるが、

田中久重が上京すると、政府は明治６年（１８７３）にオーストリアで開かれる万国博覧会に参加するための日本代表を編成していた。総裁は参議兼大蔵卿を兼ねる大隈重信で、副総裁が佐野常民であった。

大蔵重信はかって八太郎といって、安政２年に佐賀の精錬方の庭先で田中久重が造った模型の蒸気船と蒸気機関車に感嘆の眼を見張った青年である。彼にはあのときの感激が忘れられない。実際に渡欧するのは佐野常民が総責任者になる。

この時派遣された日本人は７７人いた。その中に田中精助も加えられた。それぞれ、

「向こうに行ったら分担して研究せよ」

と命ぜられた項目があった。

田中静助	時計製造法・電信機械製造法
佐々木長淳	養蚕法
津田仙	樹芸法
緒方道平	山林法
藤山種彦	活字製造法・活字紙型製造法・硝子製造法・鉛筆製造法
藤島常興	測量器製造法・針盤製造法
田中文助	製紙法
伊藤弥介	組織法
中村喜一郎	染法
納富介三郎	陶器製造法
河原忠次郎	陶器製造法
丹山陸郎	石膏製造法
石井範忠	製紙法
朝倉松五郎	眼鏡製造法・宝石類及び大理石磨法
斉藤正三郎	木器革類塗法
竹内毅	巻煙草製造法
岩崎教章	石版術
平山英三	工作図学
山田藤三郎	蒸餅製造法
松尾伊兵衛	建築法

松尾信太郎　　造船法
内山平右門　　園庭築造法
宮城忠右衛門　　園庭築造法

など多岐に亘っている。しかしこれら渡欧した連中のもたらす技術が、日本近代化の特に生活面において大きな効果を生む。文字通り明治新政府の国是であった、

「ヨーロッパに追いつけ追い越せ」

というスローガンを実地に各分野にわたって行った。
田中久重が上京した背景には、こういういわば、

「天に向って日本を飛び立たせるすさまじい気流」

があった。

明治１１年（１８７８）３月２５日に、盛大な「電信開業式」が行われた。伊藤博文工部卿が出席し、

「日本国の逓信事業の確立」

を内外に言明した。式は京橋木挽町に新築された中央電信局で行われた。伊藤工部卿は芳川顕正電信局長、お雇い外国人ギルベルトなどを随員として臨席した。朝野の名士の多くが招待された。勿論その中には田中久重の姿もあった。

この年田中工場はそっくり工部省に買収された。そして工場で働いていた人々は全て今で言えば国家公務員として工部省の役人になった。これが「逓信省電信燈台用品製造所」の起源になる。

十四、田中製造所設立

明治１４年（１８８１）５月１１日には、恩人だった久留米藩主有馬頼咸が亡くなった。そしてその後を追うようにして１１月７日に、ついに久重も東京の自宅で死んだ。

二代目田中久重（大吉）は工部省の役人を辞めて、主として日本海軍のための仕事を多く行った。そして久重没後の明治１５年（１８８２）、芝浦の地１万平方メートルに田中製造所を設立し、電気機械分野に絞ってエレクトロニクス産業の基礎を構築。この機械工場は、動力に蒸気機関４台を備え、民間としては大規模なものであった。彼の工場では、海軍省の発注による製品を作ったがそれだけでなく、電信・電話機などあらゆる機械を製造した。

この工場で当時作られた製品は、魚形水雷発射管敷設水雷缶・機械水雷缶・火薬砲・発火電池・信管電信機・電話機・電気標示機・特殊望遠鏡など、当時の日本の技術界としては最高水準を行くものばかりだったという。明治２０年には実に６８０人の大人数が働く大工場に発展した。その豪壮な風景は浜松町駅と田町駅の中ほどで見られ、東海道線の利用客から親しまれたが、関東大震災で大半が崩壊した。

田中製作所という名称は、初代田中久重が銀座に店を構えたときから使っていたようであるが、「田中久重電機及諸機械製造所」という名も資料に残っている。しかし、二代目久重が建設した芝浦の工場が「田中製造所」の設立である。

明治２６年（１８９３）１１月１７日には、懇望によってこの田中工場を三井家に譲った。三井家ではこの工場を「芝浦製作所」と改称した。後の東京芝浦電気、現在の東芝の発祥である。

しかし東芝では、あくまでも初代久重の銀座製作所を“東芝の原点”としている。それは初代久重の“人間に奉仕する技術者精神”を“東芝の初心”として社運営の基盤にしているからである。

田中工場買収のときに三井側代表として交渉に当たったのは藤山雷太であった。藤山雷太は佐賀出身だった。その縁もあって、交渉は滑らかに進んだ。

二代目田中久重は別に「東京車輌製造所」を興し、蒸気や電気鉄道用車輌の製造を始め、鉄道交通事業に転じた。明治３８年（１９０５）２月２２日に、６０歳で亡くなっている。

久留米の五穀神社からスタートを切った“からくり人形”は、その後佐賀藩の要請により走る蒸気機関車や池を動く蒸気船の模型に発展し、これがやがて明治新国家の日本の近代化に大いに役だつ数々の機器を生んだ。

その創業者である“からくり儀右衛門”こと田中久重は、８３歳の高齢をもって世を去った。しかしこの間、彼は一片の私利私欲におぼれることなく、その偉大な発明工夫の天分をほとんど社会と庶民のために傾けつくした。

子孫のために西郷隆盛ではないが、

「決して美田を残さず」

という考えを保った。そして、高い志を持ち、創造のためには自らに妥協を許さなかった。久重は以下の言葉を残している。「知識は失敗より学ぶ。事を成就するには、志があり、忍耐があり、勇気があり、失敗があり、その後に、成就があるのである」と。

大正７年（１９１８）久留米市で、「全国発明品博覧会」が開かれた。総裁は法学博士男爵だった阪谷芳郎である。会長は久留米市長石津和風がなった。この時阪谷総裁・石津会長の名で、田中久重翁を追彰し、次のような追彰状と記念品が遺族に贈られた。

追彰状

故田中久重翁は実に近代の大発明家なり、幼より聡慧巧思に富み、齢初めて九歳、奇巧なる家庭用品を創作したる以来、家庭工業、機械工業、農具、防火、用水、染色、鍍金、製薬、汽車、船舶、兵器の類に至るまで、其の発明改良を加えたるもの枚挙に遑あらず、歳８３歳を以って没するにいたるまで自ら孜々として創作に従事するのみならず、循々として幾多の門人を教導せり、殊に其の発明に係わる久留米絣絵模様の製法及び轆轤の製造機械の如きは地方重要物産発達の基をなし久留米市内は言うに及ばず其の徳沢遠近郡村に及べり。其の発明の効果顕著にして国利民福を進めたる功績実に偉大なりとす。依って之を追彰しかつ記念品を其の遺族に贈る。

大正７年５月８日

全国発明品博覧会総裁

従三位勲一等法学博士男爵　　阪谷芳郎

全国発明品博覧会会長

久留米市長正五位勲四等　　石津和風

一方佐賀の肥前史談会においても、昭和４年（１９２９）１１月１１日と同５年（１９３０）１１月１１日に、「佐賀県先覚祭」が行われた。勿論其の中に田中久重父子の霊も共に加えられた。

いま日本でも、

「モノづくりの振興」

が改めて課題にされている。

小樽市をはじめ日本各地でもこの“モノづくり”を本気で地域の特性にすべく努力して

いるところが多い。“国際モノづくり大会”なども開かれた。

幸いなことに、日本人の器用さは、まだ廃れていないようである。一つの例がホンダの“アシモ”で、田中久重の“からくり人形”のまさにその延長線上にある創造物である。

予測運動制御によって重心やゼロモーメントポイント（ZMP）を制御して自在に歩くことができ、階段の上り下り、旋回、ダンスなども可能である。親しみやすさを考えたデザインが採用されている。 ASIMO という名称は「新しい時代へ進化した革新的モビリティ」の略であると本田技研工業は説明している。開発の動機に手塚治虫の鉄腕アトムがあったとされている。

最近では、カメラで有名な大分出身の「キャノン」が、カメラレンズを通しての人間の動作解析技術を利用し、老人を見分け、介護に専念するロボットを開発中とのことである。

このように田中久重のＤＮＡはまだまだ健在であるが、一方では現在の日本のモノづくりは、中国や韓国に追い上げられている。新しい日本のモノ造り振興のためには、先ず改めて“モノ作りの原点”に立ち返ることが必要である。

その意味では、田中久重の事蹟の顕彰は大いに意義がある。久重は諸閥からほど遠いところに身を置き、一人の庶民発明家として国民の為、或いは日本国のために自分の能力をフル回転させて、多くの人々に目を見張らせるような発明品を次々と生んだ。“からくり儀右衛門”こと田中久重は改めて評価される必要があるだろう。

特にかれが生涯持ち続けた。

「発明によって誰かさんを喜ばせたい」

という動機（モチベーション）は賞賛に値する。

おわり

引用・参考文献

久留米歴史探訪　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ　ワケノフミマロ
幕末維新と佐賀藩　毛利敏彦　中公新書　二和
久留米藩　林洋海　現代書館
久留米人物誌　篠原正一　久留米人物誌刊行委員会
真木和泉　山口宗之　吉川弘文館
田中久重　童門冬二　集英社
からくり儀右衛門　今津健治　ダイヤモンド社
日本一のからくり師　風巻紘一　ＰＨＰ
久留米小史　戸田乾吉
福岡県の不思議事典　半田隆夫・堂前亮平　新人物往来社
幕末史　星亮一　三修社
幕末の天皇・明治の天皇　佐々木克　講談社
松平容保の生涯　小桧山六郎　新人物往来
ＵＲＬ；近代史（１０）
ＵＲＬ；くるめんもんドットこむ
ＵＲＬ；ＺＥＲＯ　ＩＮ
ＵＲＬ；波山始末　川瀬教文
ＵＲＬ；幕末維新史を読む　パルティアホースカラー
ＵＲＬ；ウィキペディア各種
ＤＶＤ「坂本竜馬の生涯」マクザム